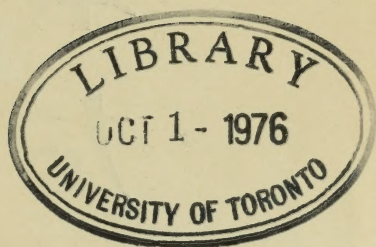
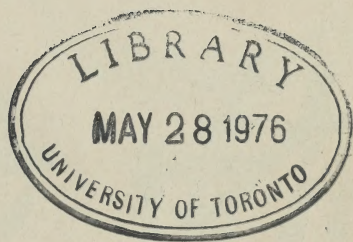
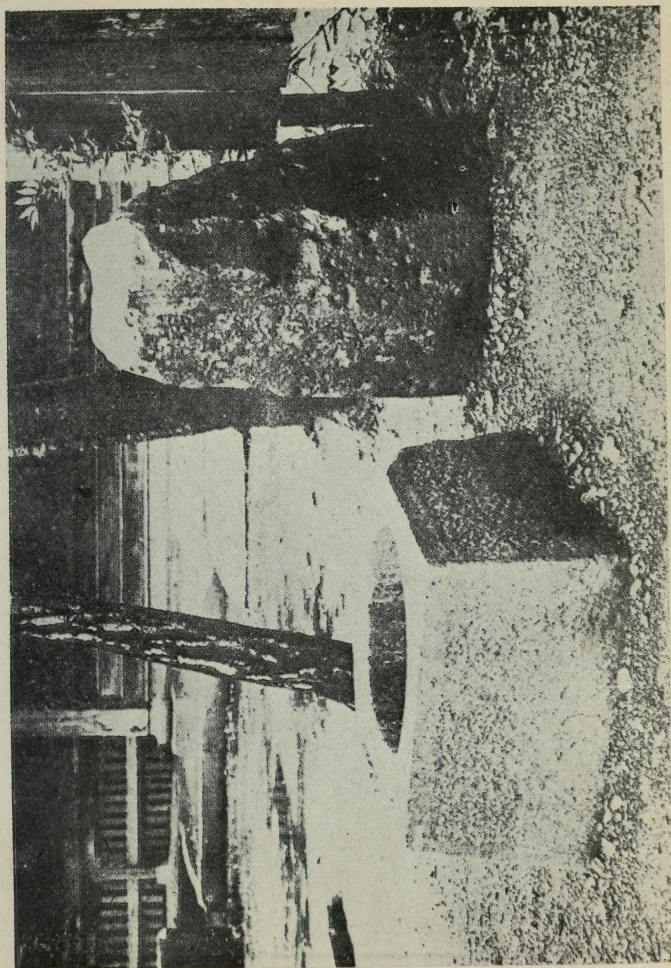
文部省認定

子爵松平慶民閣下題字
海軍大將加藤寛治閣下序
前景岳會長八田裕二郎先生序
工學博士仙石亮先生序
文學士滋賀貞著

偉大なる青年

橋本左内

橋本左内先生像

常磐の井（先生産湯の井）

先生居宅平面圖

（←が先生の書齋）

先生の師緒方洪庵肖像と現存の緒方塾（緒方塾に於ける先生參照）

先生三條實萬公に入說の圖

(實萬公繪卷物の一部)

左内先生筆蹟

左内先生の墓

（福井善慶寺内）

小塚原回向院の先生墓の套堂（昭和八年七月竣工）

序

私は深く景岳先生を景慕する一人である。幕末維新の際輩出した偉人傑士はその數尠からぬことであつたが、その學力その辯力その才識その手腕に於て先生は慥かに第一人者であつたといつて差支あるまい。その國政革新の大論策と開國進取の大國策とに至つては遙に時流を超越して居つた。僅かに二十六歳を以て大經綸を懷きながら空しく兇刃に斃れられたことは實に惜しいことであつた。而かも下獄より刑死に至る窮厄の間に處して、先生が示されたる沈着不動の態度、念々主君を懷うて止まぬ純忠至誠の精神には唯々敬虔の情を捧ぐる外無いのである。「苦寃難洗恨難禁。俯則悲傷仰則吟。昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心」といふ獄中の作を吟する時は先生の胸中を推察して一掬の涙を催さゞるを得ない。

私は昨年十月七日小塚原回向院に於ける第七十四回の先生の祭典に於て次のやうに

述べた。

「凡そ偉人の行爲と云ふものは生前に於て、肉體的に卽ち形而下に成功された人よりも、肉體的に又は形而下に失敗されて、精神的に活きた人の感化と云ふものがより偉大なものであります。安政大獄の犧牲となられた志士は、皆肉體的の失敗者であります。現世に於ては其尊き志が遂げられず、時代の暴虐に蹂躙せられて、恨を呑んで空しく泉下に行つた人でありますが、精神的に後世に殘した感化と云ふものは、實に偉大なものであります。卽ちそれが明治維新の原動力となりましたことは勿論、爾來青年壯者の感奮の的となり引いては日淸日露の戰役、又は近くは最近の滿洲、上海事件に發揮せられました全國民の忠勇義烈の精神の源となつてゐることは明であります。實にこの安政大獄の鐵槌に斃れた志士の忠魂義膽と云ふものは、確かに日本全國民の愛國心に蘇生し、復活して愈々其根を堅め、英靈と共に不滅に我國家國民を守護せられむことを信じて疑はざるものであります。之を大楠公の死に顧みましてもさうであります。楠公は御承知の通り、逆賊を掃蕩すべく秘策を朝廷に献ぜられて容れら

れず、失敗を豫期せられ自ら死を決せられて、後事をわが子正行に托して、故ざと寡兵を提げて必死の難局を引受けて湊川に出陣せられて、奮戰苦闘力の限りを盡して武人の最後の手本を示されました。斯くして楠公は肉體的には捷利の到底見込ないことを考へられて、恰も精神的に志を遂げることを考へられましたかの様に湊川に死なれましたが、其死後に於ては確かに精神的に永遠の生命を求むることに成功せられました。其偉大さと云ふものが、南朝の人々が、末の末迄も忠を忘れず、義を忘れず、實に微弱なる南朝の朝廷を支へて五十年もその事業を續けしめ、又五百年後の明治維新に至る迄、將又今日に至る迄もその英風を慕つて立つ者は雲の如く起りまして、遂には此維新烈士に依つて投ぜられた一石に依つて、世界を驚嘆するやうな大日本勃興の精神力となつたことは明かでありまして、實に感激に堪えざる次第であります。左内先生にして若し明治維新以後六十五年の轉變を知られましたらば、實に人生の半ばに過ぎない先生の短い生涯と雖も、その間に發揮せられた人生の意義といふものは如何に宏大であるかと云ふことを自得せられまして莞爾たるものがあられると思ひます。

是に於てか先生生前の「苦寃」も洗はれ先生の「禁じ難き恨み」も解消せられる云々」

斯の如く私は先生の忠魂義膽が永久に生きてこの國を護つてゐられると信ずるものである。

滋賀君のこの著は必しも詳細を悉してるとは云へないが、是迄世間に知られてゐなかつた新資料に依て先生の事蹟の闡明せられた點も尠からず認められ、先生の全貌を知るに足る好著たるを失はぬ。私は先生の精神氣魄が讀者諸君に傳はつて先生の永遠に生きて行かれんことを希望して止まない。

昭和八年十月

海軍大將　加藤寛治

序

橋本景岳先生の師事された吉田東篁先生には、時代は遲れて居るが、余も少年の時敎を受けたので、弟弟子の一人である。東篁先生は忠孝節義の重んずべきこと、國家を背負つて立つほどの大志を持たねばならぬことを、常に我々に說き聞かされ、景岳先生を何時も引合に出して激勵された。余が夙く海軍に身を投じ後議政壇上に立つたのも、此等の感化に依るものである。

かくして、余は少年の時より先生を景慕してゐたが、後になつて見れば見るほど、先生の才學識見の非凡にして、人格の偉大崇高なるに敬服し、益景仰の念を深くするやうになつた。それで景岳會が出來た時も、前述の關係から會長の席を汚し、名士學者の講演を請ひなどして、先生の遺風を顯揚せんと努めて來た。

併し、未だ纏つた先生の傳記が無いのを遺憾に思つてゐたが、この頃文學士滋賀貞

君が、若い人達の爲に書いて見たといつて此の書を示された。行文平易、能く先生の眞面目を寫してあつて、喜んで一讀した。靑少年の人達が讀んだらば多大の敎訓を得るであらう。余は幼時同君の父君有作先生（その頃は小林堅藏と云はれた）に敎を受けたことがある。今此書に依つて、景岳先生と同年であり竹馬の友であつたことを知り、往時を追懷して感慨無量であつた。併せて記して序言とした。

昭和三年十月二十日

景岳會長八十翁　八田裕二郎

序

景岳橋本先生の偉大なる才識と功績とは、年を逐うて喧傳せらるれども、先生の事蹟を見るには、唯橋本左内全集を讀むより外はない。しかし此の全集は、おもに先生の往復手簡から出來て居て、先生の眞面目を理解するには、頗る手數がかゝり、普通の人は堪ふることがむつかしい。此の他に白土氏の橋本左内、高橋氏の吉田松蔭と橋本左内などがあるけれど、別に見るべき所がない。此に於いて數年以前、福井縣教育會にて、青年の愛讀に適するやうな、先生の傳記が欲しいと思ひ、多數の材料を蒐めて、之を德富蘇峰氏に賴み、氏は已に稿を卒へたけれども、久しく發行になりかぬるのは、誠に惜しいことである。然るに文學士滋賀貞氏は、福井市の出身であつて、かねてより先生の傳記を作らんと思はれたれども、病痾のために久しく妨げられしが、本年は先生の七十周年に丁るから、其の記念として、せめて青少年に適する、簡單なも

のにても作りたいとの考へにて、匆々に筆を驅られたるものが、則ち此の小冊子である。滋賀氏の令祖父嘯峯翁は、景岳先生に書法を敎へられ、令父萊橋先生は、景岳先生と竹馬の友であつたから、同氏は大に景岳先生の事蹟を聽て居られ、特に同氏自からも史學を專門として居られ、景岳先生の研究に對し、久しく心意をひそめて居られたから、此の著に依つて始めて、先生の眞面目を明らかにすることを得たる感じがする、泉下の先生必らず首肯せらるゝであらう。

昭和三年十月二十二日

工學博士　仙　石　亮

改版の序

昭和三年初めてこの書を出した時に私は卷頭に次の如く一言致しました。

「左內さん」と呼んで、私の子供の頃、父や母が先生の話をして聞かせたことが時々有りました。或時父に伴れ立つて先生の舊宅―その頃は大玄院とかいふお寺になつてゐて前方に格子窓のついた土藏風のものが殘つてゐたやうに記憶します―の前を通つた時「此處が左內先生の何時も勉强された所だぞ」と云つて、敎へたことを覺えてゐます。それで私は叔父さんでゞもあるやうな親みを持ち乍ら先生に對して景慕の念を懷いてゐました。啓發錄を讀んで感奮した事もありました。併し生來の愚根は致方もありません、感激も一時のことに終つて、恥かしながら、一生を空しく無爲に終らんとしてゐます。

併し多少聞いたり調べたりした事もありますから、靑少年諸君の讀物となるやうな先生の傳を書いて見たいと思つてゐましたが、生來の懶惰と病弱との爲めに遷延共日

を空過いたしました。本年は　今上陛下御卽位の大典を行はせらるゝ目出度い年であり、丁度先生が昨夜城中霜始隕、誰知松柏後凋心と詠じて氷雪の如き清節を全うせられた七十周年目―十一月十八日が丁度先生が刑場の露と消えられた陰暦十月七日に當ります―に相當致しますから、この際一つ記念に書いて見やうと思つて、涼風の立つ頃から筐底の舊稿などを捜つてぽつ〳〵筆を執り始めました。

そこへ私を大に感激せしめた事がありました。それは九月の初頃郷里出身の海軍大將加藤寛治氏が數十年振で歸郷し、大歡迎を受けられ、中等學校生徒に一場の講演をされたことであります。私はその講演の概要を福井新聞で讀んだのでありますが、その大意は「自分の少年時代は弱虫であつたが、景岳先生の啓發錄を讀み、稚心を去らねばならぬと說かれてあるのを見て大に發憤し、その結果、東京から福井迄の徒歩旅行を企て、非常な苦難を嘗めて美濃境の深山幽谷を跋涉し、十數日を經て漸く福井に歸り父の墓に參つた。この時の體驗が自分の身心を一變した」と云ふのであります。

私は之を讀んで「是ある哉〳〵、志ある者に取て偉人の感化此くの如く大である。恐

らく大將以外にも、啓發錄を讀み先生の傳を讀んで感憤興起した人は幾人もあるに相違ない。是非御大典迄には出版の運にしよう。若し一人にても感憤して立つ人あらば幸甚の至である」と考へて急いで稿を繼ぎました。

この書は若い人達を前に置いて御話をする積になつて書いたのですから、漢文や書簡文なども其儘には引用せず、其意味を碎いて書きました。それが爲めに原文の妙味を失つた點も尠くないのであります。先生の事蹟は調べて見れば見る程敬服すべきこと許りでありまして、迚もこんな小册子では總てを盡し得ません。たゞ若い人達が先生が何んな人であつたかを了解し、その中から或者を學んで下さつたならば本懐之に過ぎないのであります。

世間では先生を以て幕末に於ける志士の一人と呼んでゐます。併し一志士と云ひ去るには餘りに偉大であります。その學問に於ても、その才腕に於ても、その識見に於ても、その人格に於ても、慥かに一世を超越してゐました。唯五十年といはるゝ人生の半を過ぐる僅に一年の短命であつた爲に、その經綸を事功の上に顯はし得ずして了

られたことは、返す〲も遺憾至極でありました。されどその短い生涯は、寸刻も怠りのない、分時も弛のない、緊張し充實し切つた生活でありました。憂國慨世の熱誠を以て燃え盡された至純至眞の生活でありました。而して偉大なる青年として永久に生きて居られるのであります。

「人間自有適用士、天下何無可爲時」とは、先生が嘗て口吟された一句であります。先生は七十年前幕末多難の際に奮起して、爲す可き事を爲されたのでありますが、七十年後の今日爲すべき事は更に更に多いのであります。私は先生の如き至純至眞な熱誠を以て昭和青年の奮起を祈つて止みません。

當時私は病餘健康が勝れぬ時でございましたが、小冊子ながら兎に角完稿した時は、多年景仰の念を捧げてゐた先生に對して、果すべき或義務を果し得たやうな感がいたしました。且つ畏くも各宮殿下の臺覽を辱うし、相當の讀者を得ましたことは私に取つては望外の光榮でございました。その後私は先生の詳傳をものしたいものと、多少づゝは材料を蒐めてゐましたが、彼此する中に五年の星霜は流れて了ひました。

今年は先生刑死後七十五年目であります。書肆武藏書院主は裝釘を新にして再び出版したいと申します。詳傳は詳傳として、青少年の方々又は一般の讀者諸君にはこの書の方が手頃でもあり、又多少とも獨自性を有すると信じますから、幾分かの改訂と增補とを加へて再び世に問ふことにいたしました。この五年の間に世界の形勢もわが國の情勢も急轉回をして、所謂「非常時」と呼ばるゝ時代を出現いたしました。この際先生の如き偉大なる人物を廣く紹介することは無意味とは考へません。

先生を景慕する人々に依て成立してゐる景岳會は、前會長八田裕二郎氏の沒後、海軍大將加藤寬治閣下を會長に推戴しました。閣下は少年の頃啓發錄を讀んで感奮興起された方でありまして、先生の遺烈發揚に非常に熱心して居られます。千住小塚原に在る墓石が風雨の爲めに剝落するのを慨して、套堂の建設を企てられ、寫眞版に見えてゐるやうに立派に仕上つて、去七月一日落成の祭式が行はれました。私は勝手ながらこの書を以てその記念にもしたいと存じます。

本書初版の際、左内先生を擢用せられた春嶽公の令息松平慶民子爵の題字を辱う

し、福井に於ける藜園會長仙石博士及び東京に於ける景岳會長八田先生の序文を頂きました。今度改版に際しては更に現景岳會長加藤大將の序文を辱ういたしました。謹んで深謝の意を表します。

昭和八年十月一日

滋　賀　貞

偉大なる青年　橋本左内

附　錄

詣橋本景岳墓　伊藤博文

曝骨刑場吾不及　存心社稷與君同
追懷往事感何限　落木秋風暮雨中

橋本左内

一、新日本の人柱

上下三千年に亘る我國の歴史を通觀しましても、世界各國の興亡史を繙いて見ましても、明治維新の大業、これに續いた明治の大御代ほど輝かしい時代は外に見出すことは出來ません。東海の片隅に甘い夢を見つゞけてゐた一島國が、その眠から覺めてはね起きると倶に、「萬機公論に決すべし」「上下心を一にして盛に經綸を行ふべし」「智識を世界に求め皇基を振起すべし」等々の旗標を掲げて躍進し、遂にその理想を僅か五十年足らずの中に實現し、世界第一等國の列に加つたことは一の大なる驚異でなければなりません。斯くなつた原因は勿論幾つもあるのでありまして今こゝに一々數へ立てる暇を有ちませんが、私は其一として國を愛し世を憂へた幾多の人物が、そ

の身命を抛つて國事の爲めに盡力したその業績を忘れてはならないと思ひます。云はゞ此等殉國の人々は實にその尊き血と肉とを以て、更に尊きその魂を以て新日本建設の人柱に立つたといふべきであります。
景岳橋本左內先生もこの尊き犧牲者として、永久に忘れられてならない一人であります。

今より丁度七十年前の安政六年、時の大老井伊掃部頭直弼は、幕府の權勢を盛り返さんが爲めに、國事の爲めに奔走した多數の志士を引捕へて、これを重刑に處しました。世に之を安政の大獄といひます。この時刑場の露と消えた人々は何れも一角の人物で誠に惜しい事をしたものでありますが、此中でも吉田松陰と先生とは最も傑出した人物で、これを失つた事は痛恨限りなき事でありました。井伊直弼は果斷な政治家であつたに相違ありませんが、この二人を殺した丈でゞも翌年櫻田門外に仆されるに値したかとも思はれます。この時松陰は三十歲先生は二十六歲、まだ青年といつても善い若さでありましたが、松陰は炎々火の如き熱情を以つて、國家の革新に邁進せん

とする氣魄を有つてゐましたし、先生は透徹水の如き頭腦を以て、世界の大勢を洞察し、胸中に大經綸を藏して居られたのでありまして、兩者の性行人物は夫々趣を異にしてゐましたが、將來の國運を担當すべき第一流の人物であつたのであります。

私は先生に就て松陰を引合ひに出しましたが、これは兩者が相異の點を持ち乍ら、似寄つた點も多く、相比敵するに足ると思ふからであります。所で世間に其名の能く知られてゐるのは何方かと云へば、無論松陰であります。これは松下村塾で松陰の教育を受けた人々、又は間接に薫化を受けた人々の中から高杉晋作、木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋などいふ維新の功臣が輩出したが爲めであります。先生は松陰よりも三歳の年少者であり、且つ藩主の爲めに東西に奔走せられたのでありますから、悠りと人材を教育してゐる暇はありませんでした。その爲めだけでもありませんが兎に角越前藩から長州藩の如く功臣が出なかつた爲めに、先生の名聲を顯はすことが出來なかつたのであります。併し、その性情の至純至誠なる點に於て、精力の絶倫なる點に於て、その見識の高邁卓拔なる點に於て、殆んど甲乙を見ないと云つてもよいと思はれ

ます。若し先生をして維新の盛運に在らしめたならば、必ず赫々たる功績を立てられた事と想像するのであります。先生は實に建設的政治家でありまして、卓拔な見識とこれを實現する手腕力量とを有たれたことは、この小傳の讀者の首肯される所でありませう。

二、先生の家庭

先生は天保五年三月十一日――天保錢の鑄造された前年に越前福井の城下に生れられました。今年から九十五年前であります。織田信長麾下の勇將柴田勝家が北國に封せられて、北の庄に築城したのが福井の起源でありますが、德川時代になつて家康の庶長子秀康が越前七十五萬石に封せられてから、大規模の築城が出來、名を改めて福井市が生まれたのであります。市の中央を足羽川が貫流して橋南橋北の二大部に分つてゐますが、先生の家は橋北の常盤町にあつたのです。

先生の家は代々醫者でありました。お父さんは名を長綱通稱を彦也と云つて和蘭醫

術を研究して藩の奥外科掛となつたのであります。當時醫者は士分以下に取扱はれたのでありますが、その醫者の中でも漢方醫は本道と云つて重んぜられましたが、外科は低い位地に置かれたのであります。長綱は氣概があつて快活な人でありまして、能く警句を發して人を驚かしたさうです。先生の弟の故綱常子爵はかう云つて居られます。「父は夙くから西洋醫學の精密なことを知つてゐたので、長崎から猪股瑞英といふ蘭醫を招聘して家に置いて勉强したのです。そして當時の古い漢方醫のわからずや連を目覺ましてやらうとしたのです。そこで俗人共は目を見張つて驚いてゐたのですが、後に侍醫に拔擢されると、内からは嫉まれ、外からは惡口を云はれて思ふやうにならず、毎日酒を飮んだり詩を作つたりして氣をまぎらしてゐました。そして自ら竹篦と號してゐました。これはへぼ醫者を藪といひ侍醫を御匙といふ所から皮肉つたのであります」とこの性格は慥に先生にも子爵にも傳はつて居るやうに思はれます。
このお父さんは嘉永五年十月、先生が十九歳の時病歿したのですが、先生が後にその遺稿を集めて序文を書かれた中に「お父さんが臨終の際、お前は才を恃んで人に誇つて

はならんぞ。勉強を怠つて祖先を辱めてはいけないぞ。君主長上を敬ひ、親類兄弟と親しくして信義を缺いてはならぬぞ」と誡められたと云つて居られる所を見ても、誠に正しい人であつたことが想像されます。

先生のお母さんは名を梅尾といひ坂井郡箕浦大行寺といふ眞宗寺の住職小林靜境の娘であります。このお母さんは餘程しつかりした人で賢夫人であつたのです。先生が子供の頃「内のお父さんよりお母さんの方が恐い」と友人に語られたといふことを以て見ても、子供の躾け方は嚴格であつたやうであります。私の聞いた話では、お父さんが萬歳が大好きで、お正月にはこれを邸内に呼んでお客の席上で舞はさしたさうです。この萬歳は太夫と才藏とがゐまして、太鼓に合はせて素襖に烏帽子を着けた太夫が舞ふのですが、時々滑稽な掛合話をやり、隨分卑猥な事も云ふのです。所がかういふ席上へ先生はついぞ其の姿を見せられた事が無かつたさうです。これは恐らくお母さんが子供の出席を禁じられたものでありませう。之は後の話ですが、先生が江戸に在つて國事に奔走して居られる中にも、お母さんへの通信を怠らず、兩方の間に往

復された書面が數十通殘つてゐますが、先生が母を思ひ母を敬はれた至孝の情と、お母さんが先生を信じ先生を激勵された尊い心持が紙上に溢れてゐまして、この母にしてこの子ありと首肯かれるのであります。昔、羅馬にコルネリヤといふ賢夫人がありまして、多くの夫人達が驕奢虚飾を競ひ、美くしい寶石を見せびらかして誇としましたが、コルネリヤは私の寶はこれだといつて、その二兒グラッカス兄弟の教養に力を盡し、遂に羅馬の國事に殉せしめましたが、梅尾夫人はこれに比べて差支ない賢母でございました。安政六年先生が罪人同樣に、江戸の小塚原で斬られたと聞かれた時のお母さんの胸中は何んなであつたでせう。併し忍耐心に富んだ健氣なお母さんは、悲憤を胸に收めて女々しい涙を出されなかつたさうです。只その後は微笑だもせられなかつたさうですが、翌年井伊掃部頭が櫻田門で殺されたと聞かれた時は、「是で聊か私の胸もすいた」と初めてにつこり笑はれたといふことであります。

三、幼少時代

先生は天性頗る明敏で神童とも云はるべきでありました。七歳の時から藩醫舟岡周齋等に就て漢籍を學び、また手習の爲めに藩の祐筆小林彌十郎等の許に通はれました。八歳の時藩儒高野眞齋に就て文を學び、十歳の時に三國志を讀んで略その意味を了解されるやうになりました。三國志は、支那の後漢の末に天下が魏呉蜀の三國に分れて相爭ひ、諸葛孔明、關羽などの出て來た時代の歴史を書いた者であるが、之を讀みこなすには餘程漢學が出來て居らねばならないのです。先生は歴史物を好んで讀まれたやうに見えます。その詩を見ましても、書簡などを見ましても、古今の歴史に目を通して、治亂興亡の跡を尋ね、人物の正邪忠奸を批判し、以つて自らの修養に資せられた事が明かであります。

十二歳になつて吉田東篁の門に入られました。東篁は名を悌藏と云つて「鉈差」と蔑視された微職の者でありましたが士分に取り立てられたのでありました。この職は

眞の型ばかりに一本刀を指して城のお壕や土堤を巡視し、城東の竹藪を監視するのであります。併し、東篁は幼い頃から學問が好きで、藩儒前田雲洞、清田丹藏等に就て學び、山崎闇齋派の朱子學を奉じてゐました。その學風は詩文を作つたり博く諸子百家の說を研究するといふのでなくて、四書五經を本として實踐躬行を貴ぶのでありました。隨つてその教育方法もたゞ文字を授けるといふのでなく、常に古今の人物の言行を引いて、忠孝節義を說き、談佳境に入ると感極つて泣くといふ風でありました。この先生に就てから、左內先生の學問見識が著しく進んだやうであります。彼の宋の名臣岳飛の人と爲りを景慕して、自ら景岳と號されたのも、この時であります。爾來先生は非常な感激を以て勉强をはじめ、傍ら劍道柔道を學び、家が醫者でありますから、藩の醫學校濟世館に入つて漢方醫をも學ばれました。私の生まれた家は鍵町といつて、幅二間位の芝原用水といふ小川を隔てゝ、先生の住まれた常盤町に接してゐましたから、云はゞ背中合せに住んでゐました。それに先生の幼少の頃、祖父の小林彌十郎に書を習ひに來られましたし、私の父は先生と同年であつて自然親しく交つた

やうでありますから、子供の時分ちよい〳〵先生の話を聞かされました。その話に依ると、先生は夜二時（今の四時間）しか寢られなかつたやうです。橋本の直ぐ前に、安井某といふ老人が隱居して居たのですが、老人の事で朝は暗い内から起きるのですが、何時起きても先生の室には燈火がともつてゐるので、橋本の息子さんはいつ寢るのだらうかと怪んださうです。

先生の讀書法は漫讀濫讀の類でなく、眼光紙背に徹するの意氣を以て精讀し、會心の場所があれば、これを抄錄し、もし感動した文句があれば、之を小さい紙片に書き拔いて、机といはず本箱といはず、一面に貼付して、自分の規箴とされたさうです。で、先生の部屋へはいると色々の札がぺた〳〵貼つてあつて、弘法大師の靈場などに參詣した樣であつたといふことです。詩文なども十三四歲の時から試作して、鈴木蓼處矢島立軒などゝ互に示し合つたり批評したりされたやうです。十五歲の時に作られたといふ左の一詩が殘つてゐますが、肥馬に跨り輕裘を着て王侯の貴きを誇るよりも山中に横臥して、自由を味ふ方がましだといふ超脫的な考方は、十五歲の少年

秋日山居

與木石居鹿豕遊。夜眠破屋晝山頭。
輕裘肥馬王侯貴。不若此身却自由。

として餘程老成してゐたことを證するに足りませう。私の父が或紙片の端に「余幼少の時より交りし人は種々ある中に、橋本左内の如きは世間の知る所にして非常の人材なるは勿論なれば敢て喋々を要せずと雖も、予が竹馬の朋友にてありし頃より、嶄然頭角を見はし、老成人の風ありて、其志望の高尚に、其言語の沈着なる、其强記にして雄辯なる、讀書作文の業に到るまで、一として絕類離群ならざるはなく、人をして感嘆置かざらしむ」云々と書き付けてゐますが、朋友同輩の間に特別の光彩を放ち、畏敬されたことは明かであります。

併し先生は其學才を衒ふやうな事は絕えてありませんでした。その事は、矢島立軒

が先生の啓發錄に書いた序文に明かであります。即ち東篁門下の若い書生連が大言壯

> 十許年前。余與橋伯綱。(先生のこと)從東篁田翁遊焉。翁門下。多雄辨倜黨之士。相聚抵掌。與譚當世之事。座中或有感憤激昂投袂起舞者。盖慨學問事業殊其効。而不適於世務也。伯綱時年才十五六。丰骨珊々。癯然一書生也。俯首斂膝。含蓄不敢發一言。云々

語し、或は悲歌慷慨してゐる間に、痩せて弱々しい婦人の如き先生は、隅つこに小さくなつて、沈默を守つておられたのであります。序に申ますが、福井は七十五萬石の雄藩であつたのですが、二代忠直が減封されて、その半分以下にされてから、藩勢が頓挫して藩士の經濟が苦しくなり、好學の氣風が振はなかつたのです。故に川狩や游獵などに出掛ける蠻的な士やその子弟は、書物を讀んだり學問する者があると、青表紙讀と賤めたさうです。先生は位地の卑い醫者の子であり、白面の弱々しい少年であ

つたから、習ひ物の歸途で、腕白者に惡戲をされたり、喰つて掛られたりされたのであらうが、こんな連中に相手になられなかつたに相違ありません。併し無用な爭ひをせず、無用な言を發しない先生も必要あつて口を開けば、極めて明快な口調で理路井然と所信を述べ立てられたのであります。先生が十五歳の時に、弟の縄三郎（綱維、時に年八歳）を連れて私の祖父の所へ手習の弟子入に頼みに來られたさうです。其の時の應接振が如何にも行き屆いて居て、迚も十五歳の少年とは思はれなかつたので、その時隣室に襖を隔てゝ聞いてゐた客人が、先生の歸られた後で、今來たお婆さんのやうな人は誰でしたかと尋ねて舌を捲いたといふ事であります。

四、十五歳の著啓發錄

少年左内の面目を最も能く看取し得る者は、十五歳の時に著はされた啓發錄でありますます。その志望の遠大、その見識の高邁、その氣象の俊鋭、たゞ感嘆の至りであつてその老成振りに舌を捲く外は御座いません。所謂候文躰である爲めに、今日の青少

年達には聊耳遠いかも知れませんが、立派な修養訓といふべきであります。

啓發錄は先生自らその終に於て「余嚴父の敎を受け、常に書史に渉り候處、性質粗直にして柔慢なる故、遂に進學の期なき樣に存じ、每夜臥衾中にて涕泗にむせび、何とぞして吾身を立て、父母の名を顯はし、行く〳〵君の御用にも相立ち、祖先の遺烈を世に耀したくと存居候折柄、おひ〳〵吾身に解得致し候事どもこれ有り候樣覺え申すに付、聊書き記し、後日の遺忘に備ふ、敢て人に示す處にあらず」と云つてをられる樣に、自らの規箴として自らを鞭韃せんが爲に書かれた者で、少年學に入るの門戶として次の五箇條を說いてをられます。

第一は稚心を去るといふのであります。果物のまだ未熟で水臭いのはいけない樣に、人間も俗に云ふわらべしい心を去らねばならぬ。竹馬や紙鳶などの遊に耽り、甘い食物を食べたがり、父母に寄り掛り、または嚴しい父兄を憚りて母の膝下に隱れるやうなのは皆稚心がある爲である。十三四歲にもなつて學問に志した者が、此の靑臭い心を毛ほどでも殘してゐては到底天下の大豪傑にはなれぬ。昔、源平の頃又は元

龜天正の頃、十二三歲で母に別れ父に暇乞ひして、初陣などに功名を立てた人がある が、此等は皆稚心がない爲である。この心が拔けぬ間は士氣が振はぬもので、何時ま でも腰拔武士たることを免れぬ。故に余は稚心を去るのを士道に入る第一歩と考へる といふのが其大意であります。

第二に振レ氣をあげて負けじ魂恥を無念に思ふ意氣張を振ひ起さねばならぬこと を說いて居られます。「人の中でも士は一番此氣が强いから、如何に年若な者でも兩 刀を帶びた者には、不禮をせぬのであるが、近頃の武士は太平に慣れて柔弱に流れ、 腰にこそ兩刀を帶すれ、太物包をかづきたる商人樽を荷ひたる樽拾よりも劣つて、纔 に雷の聲を聞き犬の吠ゆるを聞いても尻込みする有樣だ」と慨嘆し、「昔の士は平生 は鋤鍬持ち土くじりして居ても、一朝事あれば鋤鍬捨てゝ虎狼の如き軍兵を指揮し、 事成れば名を靑史に殘し、事敗るれば屍を原野に曝し、富貴利達などに心を違へぬ大 勇猛大剛强の處があつた。然るに今の士は勇はなし義は薄し謀略は足らず、迚も千 軍萬馬の中に切入ることも出來まいし、謀を運らして勝を千里の外に決するの大功を

立て難いであらう」と罵倒しておられます。慥に當時は太平久しく續いた爲に士風頽れて先生の罵倒に値するものがあつたのであります。先生は更に進んで「今の士から腰の兩刀を奪ひ取つたならば其心立其分別町人百姓の上には出まい。然るに高祿を食んで、平生安樂に暮して行くことの出來るのは、高大な君恩のお蔭である。之を思へば恐入る次第で、寢ても目も合はず、喰ふても食の咽に通るべきではあるまい。それも國家に功勞を立てた本人なら兎も角、その子孫の手柄なしに恩澤に浴して居るものであつて見れば、何とぞ一生の中に、粉骨碎身して露ほどでも報恩する心掛をせねばならぬ云々、」と說いて居られます。今日でもこれを聞いて耳の痛い人は尠くはありますまい。

第三に立志の要を述べて、「士に生れて忠孝の心のない者はない。忠孝の心あつて我君が大事であり、我親が大切な者だと合點が出來たら、何とかして弓馬文學の道に達し、古代の聖賢君子英雄豪傑のやうになり、君の爲め國家の爲に利益になる大業を起し、親の名までも揚げやうと考へて來る者である。是が卽ち志を立つると云ふ者で

ある」と論じ、「志なき者は魂なき虫同様で、何時まで立つても丈の伸ぶることはない。古の俊傑の士とても、目四つ口二つ有つた譯でなく、皆其志が大にして逞しかつたからである。志の立つた者は恰も江戸立を思ひ立つたやうな者で、如何な足弱な者でも、一度江戸行きをきめれば、竟には江戸まで到着すると同じやうに、聖賢豪傑にならうと志せば、如何な短才劣識な者でも、一日〳〵と修養して、遂には聖賢豪傑になれぬことは無い」と云つてゐられますが、如何にもその志の大にして逞しい事を知るに足ります。猶その終に於て「志を立つる近道は、經書又は歷史の中で、吾心に大に感徹した處を書き抜いて壁に貼つて置くとか、扇に認めて置くとかして、日夜それを眺め、吾身を省みることが肝要だ」と述べて居られますが、之は前に述べたやうに先生の自ら實行された所なのであります。

第四に志が立つても、之を育てゝ行くには勉學せねばならぬと說き、「學の第一義は、忠義孝行の事を見たら、自分もその忠義孝行に負けず劣らず勉め行くに在り」と喝破し、「後世その意味を誤つて、詩文や讀書を學問と心得てゐるのは笑ふべき事であ

る。詩文や讀書は刀の柄鞘や二階の階子段の樣な者で、學問の道具に過ぎない。學問とは忠孝の筋と文武の業との外にない」と云つておられます。此實學的思想は吉田東篁の感化に負ふ所が尠くないやうに思はれます。ついで「忠孝の眞心を以て文武に精出し、治世に於て君のお側に召使はれた時は君の過を匡し、その德を彌增に盛ならしめ、役人となつたらその役所の事を能く治めて、依估贔負をしたり賄賂を取つたりせず、公平廉直その役所中の者がその威德に畏れ懷くやうにせねばならぬ。又亂世に際しては、或は戰陣に出て太刀槍の功名をし、或は陣屋の中に謀を運らして敵を鏖にし、或は兵站部を掌つて兵卒の飢渴せぬ樣な心掛を平生から練つて置かねばならぬ。而して此等の事をするには、胸に古今を包み、腹に形勢機略を諳じ藏めて居らねば出來ないのであるから、學問をして吾智識を明かにし、吾心膽を練ることが肝要だ」と述べて居られます、言々句々老成大家の口吻であります。今の學生達には何の意味もなく學校に通つて、どうぞかうぞ試驗を誤魔化して通れば、それで滿足し、或資格か肩書を得さへすれば、それで一角の人物になつた積で居る人が尠くありません

が、先生のこの言に對して大に省みる所あつて然るべきだと思ひます。

第五に交友を擇ぶべき事を述べて「吾同門同里の人、同年輩の人で、自分と交つて呉れる人は何れも大切にせねばならぬが、その中に損友と益友とがある。故に友を擇ぶといふが大切なのであつて、損友は自分に得たる道を以て其人を匡正してやらねばならぬし、益友は自分から親みを求め事を諮り常に兄弟のやうにせねばならぬ」と云つてありますが、こゝらにも先生の老成振が顯はれてゐまして、大抵の少年ならば損友に近ずかぬやうにすべきだと云ふ所を、自分の德で感化してやらねばならぬと考へておられる所は、實に親切に行き屆いて居るのに感心させられます。而して益友とは如何なる者かといふことに就て「さて益友と申す者は兎角氣遣な物で、時々面白くない事があるが、此氣遣な點が吾身に補ひになるので、吾が過を告げ知らせ、氣の附かぬ點を補つてくれるのが有り難いのだ、おべつかを使ひお追從を云つて口先の旨い輕薄者はみな損友である」と申しておられます。恐らく先生自身が友人間では氣遣ひな人として見られたでありませう。

以上啓發錄五箇條の大意を解說しましたが、是非附錄の原文を一讀せられん事を望みます。先生が十年後の二十四歳の時、この啓發錄の後に「之は今より十年前に自分の手記した者である。言ふ所は淺薄卑近であるが當時の憤發心の旺盛であつた事は却つて今日の及ばぬ所であつた」と書いておられますが、先生が偉くなられたのは固より天性の英敏なのにも因りますが、感憤興起して非常な努力をされた結果であることを忘れてはなりません。

五、大阪に遊學

かくて先生は十五六歳の頃吉田東篁の許で經史を學び、濟世館に通つて醫學を學び、傍らまたお父さんの手傳をなし、夜は深更に至る迄勉强をされて、學力も見識も著しく進歩しました。蘭學は何時から始められたか明かでありませんが、お父さんや半井仲庵に就て學ばれたらしいのです。學力識見が進むと共に、他日天下國家の爲に大業を立てたいとの志望を懷かれるに至つたのは當然であります。啓發錄の終に、

「嗚呼如何せん吾身刀圭（醫師）の家に生れ、賤技に局々として吾初年の志を遂ぐる事を得ざるを、然れども所業は此に在りても志す所は彼に在り候へば後世吾心を知り、吾志を憐み、吾道を信ずる者あらんか」と書かれてゐるのを見ても、その思想を窺ふことが出來ます。

そこで先生は福井のやうな田舍に居て、井戶の蛙になつてゐるに滿足せず、廣い世界が見たいといふ考を起されました。先生のお父さんは福井藩の醫學生としては他藩に出て學問した最初の人でありまして、外科を紀州藩の花岡隨賢に、內科を京都の名醫某に學び、後ち自宅に長崎から來た蘭醫猪股瑞英を留めてゐた程の人でありますから、先生の遊學に不同意はありませんでした。で、嘉永二年十六歲の秋大阪に出て、當時蘭醫の大家として天下に其名を知られてゐた緒方洪庵の門に入られました。洪庵は江戶で坪井信道、宇田川玄眞の蘭學家に學び、後ち長崎に出て蘭人に就て勉强し、廿九歲の時大阪で開業しました。中々の人格者で、報酬の多寡などを眼中に置かず、貧乏人でも熱心に治療しましたから、患者は常に其門に滿つる有樣でありまし

た。著書には扶氏經驗遺訓といふのがあります。また多くの生徒を養成しまして、塾中常に數十名の學生が各藩から來てゐました。洪庵は一方に緻密な所がありますが、また放膽な人でありまして餘り學生を拘束することなく、各其材に因て誘導しましたから、大人物がその門下から輩出しました。幕末の偉傑大村益次郎、赤十字社の創始者佐野常民、慶應義塾の創設者福澤諭吉なども皆此門下から出たのであります。福澤諭吉は先生よりは四五年後に入塾したのですから、勿論先生と一所にはならなかつたのですが、その著福翁自傳の中に、當時の塾の有様を細々述べてゐる所を見ますと、隨分塾生は亂暴で粗放な生活をしたものゝやうですが、一方では非常な眞劍さを以て勉强したものゝやうです。當時の學生生活同時に左内先生の勉强振を知る一端にと左に福翁自傳の一節を引用致しませう。

塾で修業する其時の仕方は如何云ふ鹽梅であつたかと申すと、先づ始めて塾に入門した者は何も知らぬ、何も知らぬ者に如何して敎へるかと云ふと、其時江戸で飜刻になつて居る和蘭の文典が二冊ある。一をガランマチカと云ひ、一をセインタキスと

云ふ。初學の者には先づ其ガランマチカを教へ、素讀を授ける傍に講釋をもして聞かせる。之を一册讀了ると、セインタキスを又其通にして敎へる、如何やら斯うやら二册の文典が解せるやうになつた所で會讀をさせる。會讀といふ事は生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に會頭が一人あつて、其會讀するのを聞いて居て、出來不出來に依て白玉を附けたり、黑玉を付けたりすると云ふ趣向で、ソコで文典二册の素讀も濟めば、講釋も濟み、會讀も出來るやうになると、夫れから以上は專ら自身自力の硏究に任せることにして、會讀本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、又質問を試みるやうな卑劣な者もない、緖方の塾の藏書と云ふものは、物理書と醫書と此二種類の外に何もない。ソレモ取集めて僅か十部に足らず、因より和蘭から舶來の原書であるが、一種類唯一部に限つてあるから、文典以上の生徒になれば、如何しても其原書を寫さなくてはならぬ。銘々に寫して其寫本を以て毎月六才位會讀をするのであるが、之を寫すに十人なら十人、一緖に寫す譯に行かないから、誰が先に寫すかといふ事は籤で定める。……斯う云ふ次第で塾中誰でも是

非寫さなければならぬから、寫本は中々上達して上手である。一例を擧ぐれば一人の人が原書を讀む、其傍で其讀む聲がちやんと耳に這入つて、颯々と寫して、スペルを誤ることがない。斯ふ云ふ鹽梅に、讀むと寫すと二人掛りで寫したり、又一人で原書を見て寫したりして、出來上れば原書を次の人に廻す、其人が寫了ると又其次の人々が寫すと云ふやうに順番にして、一日の會讀分は半紙にして三枚か或は四五枚より多くはない、偖その寫本の物理書醫書を如何するかと云ふに、講釋の爲人もなければ、讀んで聞かして呉れる人もない、内證で教へることも聞くことも書生間の恥辱として萬に一も之を犯す者はない。唯自分一人で以てそれを讀碎かなければならぬ、讀碎くには文典を土臺にして辭書に便る外に道は無い。其辭書と云ふ者は、此處にヅーフと云ふ寫本の字引が塾に一部ある。是は中々大部なもので日本の紙で凡そ三千枚ある。之を一部拵へると云ふことは中々大きな騷ぎで、容易に出來たものではない。是は長崎の出島に在留して居た和蘭のドクトル・ヅーフと云ふ人が、ハルマと云ふ獨逸和蘭對譯の原書の字引を飜譯したもので、蘭學社會唯一の寶書

と崇められ、夫れを日本人が傳寫して、緒方の塾にもたつた一部しかないから、三人も四人もヅーフの周圍に寄合つて見て居た。夫からもう一歩立上ると、ウエーランドと云ふ和蘭の原書の字引が一部ある。それは六冊物で和蘭の註が入れてある。ヅーフで分らなければウエーランドを見る。所が初の間はウエーランドを見ても分る氣遣はない。夫ゆゑ便る所は只ヅーフのみ。會讀は一六とか三八とか大抵日が極つて居て、いよ〳〵明日が會讀だと云ふ其晩は、如何な懶惰生でも大抵寢る事は無い、ヅーフ部屋と云ふ字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引きつゝ勉強して居る、夫から翌朝の會讀になる、會讀をするにも籤で以て此處から此處までは誰と極めてする、會頭は勿論原書を持て居るので、五人なら五人十人なら十人、自分に割當てられた所を順々に講じて、若し其者が出來なければ次に廻はす、又其人も出來なければ其次に廻はす、其中で解し得た者は白玉、解し損ふた者は黑玉、夫から自分の讀む領分を、一寸でも滯りなく立派に讀んで了ふたと云ふ者は白い三角を付ける。是は只の丸玉の三倍位優等な印で、凡そ塾中の等級は七八

級位に分けてあつた。而して毎級第一番の上席は三箇月を占て居れば登級すると云ふ規則で、會讀以外の書なれば先進生が後進生に講釋もして聞かせ、不審も聞いて遣り、至極深切にして兄弟のやうにあるけれども、會讀の一段になつては全く當人の自力に任せて搆ふ者がないから、塾生は毎月六度づゝ試驗に逢ふやうなものだ。さう云ふ譯で、次第々々に昇級すれば、殆んど塾中の原書を讀み盡して、云はゞ手を空するやうな事になる。其時には何が六かしいものはないかと云ふので、實用もない原書の緒言とか序文とか云ふやうな者を集めて、最上等の塾生だけで會讀をしたり、又は先生に講義を願つたこともある。私などは卽ち其講義聽聞者の一人であつたが、之を聽聞する中にも、樣々先生の說を聞いて其緻密なること其の放膽なること實に蘭學界の一大家、名實共に違はぬ大人物であると感心したことは毎度の事で、講義終り塾に歸つて、朋友相互に「今日の先生のあの卓說は如何だい、何だか吾々は頓と無學無識になつたやうだ」などゝ話したのは今に覺えて居ます。

から云ふ塾風の中に在て、先生は益々其精力を傾けて蘭學と醫術との研究に努力さ

れたのでありまして、「扶氏經驗遺訓」「病學通論」「ローセ氏人身窮理書」「イスホルシング氏の理學書」等の原書譯書を筆寫し讀破されたのです。塾中最も年少なひ弱い白面の書生が、漸次その頭角を顯はして、會讀の度毎に著しい進歩を示すのを見ては、同窓の者も驚いて後世畏るべき人物として畏敬したのであります。洪庵先生も、「彼は他日わが塾名を揚げん池中の蛟龍である」と嘆賞したといふことであります。當時越前の藩主は松平慶永（春嶽）といふ賢君でありまして、人材養成に熱心でありましたが、兼々先生の才名を聞いてゐて、曩きに緒方塾へ特に使を遣つて先生の好學を褒賞奬勵されたのであつたが、先生の十八歳の時（江戸の坪井信道門下にあつた岡部養竹と同時に）修學費を支給されることになりました。之は福井藩が給費生を設けた始めでありまして、先生は益々感激して勉强されたのであります。

緒方塾の書生中には、夜間外出して酒を飲んで來たり、惡戯をして來る者もあつたのですが、何時の頃か、平生滅多に外出せぬ先生が深夜になつて歸つて來ることが度重つて、仲間から揶揄はれた事がありました。遂に其事が洪庵先生の耳に入つたの

で、一夜洪庵は人を遣つて先生の跡をつけさして見た所が、先生は天滿橋の橋下に巢を喰つてゐる乞食の群に入つて診察をし投藥をして居られた。この事を尾行者が洪庵に報告すると、その翌朝洪庵は門生を集めて、お前達は「ちつと左内の眞似をしろ」と誡めたさうであります。飽く迄も眞面目な先生の態度はこの一事にも能く顯はれて居ります。

六、醫師としての左內先生

先生は緒方塾に二年餘在學して居られましたが、十八歲の冬、お父さんの病氣だといふ報知に接して歸國されました。孝心な先生は病父の枕頭に侍して看護されると同時に、お父さんの代りに、病人の診療に從事されました。或時梅毒患者があつて、色々服藥させられたが、効驗が無いので、先生は刀を執つて大阪で學んだ局部切開術を行ふて、治療されました。之にはお父さんは驚いて「こゝ迄技術が出來て居れば安心だ」と大層滿足されたさうです。翌年先生十九歲の冬、お父さんは遂に亡くなつて、

先生は後を承けて藩醫の列に加はられました。その翌年は嘉永六年で米國のペリーが軍艦を率ゐて浦賀に來航しました。所謂黑船渡來といつて國内は大騷ぎ。福井藩も海防の爲に精兵をくり出したのでありました。兼て蘭學を修めて世界の大勢に目覺めてゐられた先生には、當時上を下へと狼狽へ騷ぐを見て齒がゆくもどかしかつた事でありませう。併し内に憂國慨世の情を懷きながら、先生は醫師としての本分を忘れもせず怠りもせられませんでした。私の母の伯母に當る者が、脚部の病があつて先生の治療を求めました所が、先生は之を診て「これはお年のせいで、全快は六ケしいと思ひます。丁度大根の萎びたのが本のやうにならないのと同樣で御座います」と云はれたさうですが、その落ちついた態度と丁寧な言語とは廿歳足らずの青年とは見えなかつたさうです。この老人は遂に快復しませんでしたが、一家の者が誰か他の醫者に診て貰つてはと勸めましたが、「左内さんに掛つて死ねば本望だ」と云つて聽かなかつたさうです。先生が醫者としてよく仁術の要諦を心得てゐられたこと知るに足ります。

吉田東篁のお母さんが、乳癌に罹つて、これも先生が治療に從事されてゐました。

この時東篁は國事の爲に江戸に出てゐましたが、歸國してから外科手術を行ふこと丶なり、先生が痲醉藥を用ひて執刀されました。流石に沈毅な先生もや丶鈍るやうに見えたので、東篁は隣室に居て、「左内確り頼むぞ」と云つて、一生懸命に祈念を凝らして居つたさうです。手術後左内先生が「先生の母上に刀を入れるといふことは如何にも忍びなかつたが、先生の御一言で氣を勵まされ、十分に手術を行ふことが出來ました」と云はれたさうです。この手術で東篁のお母さんは一二年生き延びたさうです。

當時は何れの藩でも漢方醫が幅を利かせて居ましたが、保守的な福井藩は尙更の事で、西洋醫家は、半井仲庵、笠原白翁、大岩主一の三人に過ぎませんでした。そこへ先生が一枚加はられたことは藩主春嶽公の蘭醫保護と相待つて、一の勢力を加へたに相違ありません。また種痘に就ても先生が盡力いたされましたので、二十歳の十二月藩主より慰勞の辭を賜はつてゐます。

序に述べて置きますが、我國に種痘を輸入するに就ては、佐賀藩主の鍋島閑叟が夙くより心配をしてゐました。之は長崎に近い關係上當然のこと丶思はれます。之に

ついては越前藩主松平慶永公が率先その輸入に盡力されましたので、嘉永元年十二月に、「牛痘苗を外國から求めて下附されたい」と幕府に請願されて居ります。所がその翌年嘉永二年に、和蘭船が長崎に入港して牛痘苗を齎らしました。これを同地の醫師楢林宗建が直ちに吾兒に種痘し、その得た良苗を鍋島侯に献し、一部は急飛脚を以て大阪の緒方洪庵、京都の日野鼎哉、江戸の戸塚靜海へ送りました。この日野鼎哉は笠原白翁の先生でありまして、白翁も種痘熱心で、兼て牛痘のことに就て依賴しておきましたが、日野家から白翁の方へ長崎へ牛痘到來の由を通知して來ると、白翁は藩命を以て長崎への旅に急ぎました。

我君の命かしこみ路遠し心づくしの旅の空かな

たとひ吾いのち死すとも死ぬましき人を活さむ道ひらきせん

この二首の歌は白翁の壯烈な意氣を示してゐます。所で白翁が京都まで行きますと、既に痘苗が日野家に到着してゐましたので、白翁は二人の幼兒とその兩母とを上京させ、之に接種して十一月深雪を冒して歸國したのです。之が福井藩に於ける種痘

の始でありまして、漢方醫や一般世人はいろんな蜚語を放つて妨害しましたが、漸次その眞價が認められ、嘉永六年には除痘館が公設されたのであります。左内先生は大阪の緒方塾に居つて種痘のことは百も承知してゐられたのでありますから、白翁等を助けてその普及に盡力されたので御座います。

七、江戸遊學

嘉永七年（安政元年）二月先生は藩の許可を得て蘭醫益田宗三、魚住順方の二人と共に江戸に遊學されることになりました。蘭學及び西洋醫學勉强の爲めと云ふ事でありましたらうが、當時外國問題の騷がしい時でありましたから、必ずや他に大きな考を持てゐられたに相違ありません。さて江戸に出て三人共蘭學家の坪井信良の門に入りました。信良は緒方洪庵の先生であつた坪井信道の養子であります。所が先生の學力が非常に進んでゐましたから、信良は「迚も自分の及ぶ所でない」と云つて、これを杉田成卿に紹介してその門に入らせました。成卿は蘭學の先驅者杉田玄白の孫に當

る人であつて、二十四歳で幕府の譯官に擧げられ、後には蕃書調所の教授になつた位の人で、蘭學の造詣も深く、漢詩文も能くし、仲々の人物であつたので先生も此人に心服されてゐたやうでありますし、成卿も亦先生を愛して譯書の校閲などを依賴したさうであります。成卿の著としては濟生三方といふのが有名なものでありますが、この年砲術訓蒙といふのを譯出しまして、時勢に適しましたから大に世に行はれました。恐らく先生も手傳はれたことゝ思はれます。先生がこゝに在塾中、或時成卿が洋書一部を先生に與へて讀ませましたら、先生は三度の食事は握飯を女中に運ばせ、一週間ほどは一室に閉ぢ籠つたきりであつたさうですが、一月ばかりで讀み切つて了はれたので、成卿もその才敏と精根の強いのに驚いて、試みに書中の事を尋ねて見た所が、答辨流るゝが如く、少しも誤がないのに舌を捲いたと云ふ逸話が殘つてをります。

　先生の蘭學に於ける造詣は何れ位であつたかは能く分りませんが、遺稿の中に蘭書から治鐵法を譯されたのが殘つてゐるのを見まして、蘭學者としても恥しからぬ程度

であつたと思はれます。杉田成卿がその著濟生三方を再版する時に「爾後市川（名を齋宮といひ福井藩に聘せられた蘭學者）を以て濟生三方御校讀の義願ひ奉り候ひしが未御披閲下されず候や再刻に取掛らせ申たく存じ奉り候間若し御點閲相濟み居候處も候はゞ一卷にても拜受仕度云々」と先生に依賴してゐる所を以て見ても、一角の蘭學家たる資格は十分あつたに相違ありません。序に申しますが、英語も多少手を付けられたやうで、杉田から市川へ宛てた手紙の中に「同人（左内先生）より借居候英辭書榊方へ又貸いたし、拙家の災を免れ至幸と奉レ存候」といふ文句があります。

蘭學の餘暇には、當時の大儒鹽谷宕陰に就て漢學を研究し、此處で藤森弘庵とも知り合ひになられました。宕陰はこの頃四十四歲、弘庵は五十五歲でありましたから、先生は子供見たいな者でありましたが、兩人とも國事を憂へてゐた人ですから、談話はさういふ方面に及んだことゝ思ひます。

先生が上京された年の七月に、福井に大火があつて、先生の家も類燒しました。

元來あまり豐でない家計でありましたから、親族等は評議して、先生を呼び戻さうと云ひましたが、お母さんは獨り之に反對して、困苦を忍んで何處までもその修業を續けさせやうと主張されましたので、その儘になりました。此の一事もお母さんの誠に男まさりの賢夫人であつたことを證するに足ります。後藩主から金七十圓を與へられましたが、先生は直ちに之れを家屋再建の費用にとて、お母さんの許に送金されたさうです。

翌安政二年廿二歳の時こゝに一大變動が先生の身の上に起つて來ました。それは先生が藩主に見出されて政治的活動を開始されることになつたことであります。

八、外船の渡來　時勢の變

これからの話を進める前に、こゝで一寸當時の時勢と越前藩主松平慶永公の事に就て述べておきませう。

嘉永六年黑船が浦賀に渡來したことは、正に晴天の霹靂と云ふべきでありまして、

幕府の倒壞は玆に萠し、明治維新の序幕はこゝに開かれたのであります。勿論外國船が我國に來たのは此時に始つたのではありません。それより五十餘年前有名な松平定信（白河樂翁）が老中であつた頃に、露人が北海道の根室に來たことがあり、稍後れて英國船が長崎に闖入したことなどがあつて、幕府は俄に國防に注意し、蝦夷經營に着手したのですが、外交に關しては唯外夷打拂の舊法を守つて、外國船を寄せ付けない方針を取つて來ました。併し世界の大勢はひし〳〵と押寄せて來て、何時までも鎖國一點張では通せぬ有様になつて來まして、弘化元年、多年我邦と親しい關係にあつた和蘭の國王ウイルレム二世は、特に國書を幕府に送つて、近年支那が英國と干戈を交へて戰敗し、その結果遂に開國せねばならなくなつた事情を報告し、何時までも舊法を墨守するのは不利益であるといふ意味の忠告をしたのであります。されど幕府は姑息にも祖法變すべからずと云つて其儘に打過ぎて來ました。

嘉永五年、和蘭はまた風聞書を幕府に上つて、來年米國が我國に强て通商を求むるよしを知らせました。幕府の當局者は半信半疑の爲でもあつたのですが、相變らずの

姑息病で確乎たる處置を講じてゐませんでした。が、果然嘉永六年六月三日、江戸の鼻先きの浦賀へ、是迄見た事もない軍艦が四隻も入つて來て、黑い烟を吐き大砲を放つて威容を示したのですから、大騷をしたのも無理は無いのであります。幕府は浦賀奉行をして外交の事は長崎に行つて乞ふがよいと云つて斷りましたが、ペルリ提督は頑として應じません。武力に訴へても上陸して大統領の國書を奉呈せねばならぬと主張した者ですから、幕府も遂に栗濱に假館を立てゝ之を受理し、明年何分の回答をするといふ事で米艦を立ち去らせました。

この騷の最中に、第十二代將軍家慶は薨去し、家定がその後を承けましたが、病羸凡庸の人で到底國政を決裁すべき器で無かつたから、老中筆頭の阿部伊勢守正弘がこの難局に當らねばなりませんでした。伊勢守は活眼達識世界の大勢を看取して、國是を確定する底の果斷は持ち合はせてゐなかつたやうですが、度量も寛く、人を丸める事が上手で、德望のある名宰相でありまして、この際和戰何れにしても獨斷專行を避け、天下の人心を纏めることが大切だと考へました。で、當時諸侯中最も德望が高く

て、英明老練外國の事情に精通してゐるとの聞えのあつた水戸の齊昭に、萬事を相談しました。且又諸侯に向つては通商は國家の大事であるから、憚る所なく意見を申出でるやうにと命じました。是迄國政萬端はすべて獨裁で決行し、他から一指をも染めしめなかつたのに、今や未曾有の大事とはいへ、諸侯に喙を容れしめる端を開いたことは、幕府の威權も冥々の中に衰へてゐることを示したのであります。

所で、當時の諸侯とても、五六名の賢君と云はるゝ人の外は、永い間の太平に馴れたお殿樣であつて、藩臣の援助なくては何等の言動も出來ませんでした。その藩臣にした所が門閥の重臣連は多く凡庸の手合ひであつて、時事に對して意見の立てられさうな者は、寧ろ下積になつてゐる學者や、在野の志士であつたのであります。是に於て處士横議の風が生じ、國論が沸騰するに至つたのであります。

それは兎に角、幕府の諮問に對して、諸侯は各藩論を定めて建白をしましたが、二三の開國を唱へる者の外は、大體鎖國攘夷の意見でありました。勿論その中に硬軟があり、緩急があり、その理由も區々であつたが、開國不可と云ふに變りはありません

でした。云はゞ鎖國攘夷が當時の輿論であつたのであります。で、幕府も鎖國の方針を維持するやうに宣明したのであります。

一方外交關係はといふと、ペルリが浦賀を去つてから間もなく、同年の七月、露國のプーチヤチンが四隻の軍艦を率ゐて長崎に入港し、日露間の懸案になつてゐる樺太の境界を定め、且交易を開かんことを要求しました。まさに是れ前門に虎を防いで後門に狼を迎へたのであります。幕府は筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨を遣つて應接に當らせ、これといふ要領を得させずに長崎を解纜せしめました。すると明けて安政元年一月十五日、ペルリは七隻の軍艦を以て江戸灣に入り、神奈川沖に投錨して、去年の確報を得たいと迫りました。幾ら剛いことを言つてゐても、幕府は彼の威迫に抗することが出來ません。そこで林大學頭等を委員として談判に當らせ、三月になつて、和親條約十二條を締結しました。これは下田箱館の二港を開いて食糧薪水等を彼等に給與すべきことを約したのみで、通商貿易を許したのではありませんが、我國が外國と條約を結んだ最初のものであります。當時幕府は財政が窮乏し、武

力が不足であつたので、餘儀なく條約を結んだのでありますが、曩きに鎖國の方針を言明して置き乍ら、その實行が餘りに相異したので、甚だ軟弱であり退嬰であるとの攻撃を受け、阿部伊勢守も評判を惡くしたのであります。

かく外交問題の切迫すると共に、幕府は國防上の施設に着手して、品川灣にお臺場を築造し、韮山の代官江川太郎左衛門にその備砲を鑄造せしめました。五百石以上の造船を禁じてゐましたが、この禁を解き、勝安房等數十名の俊秀を長崎へ遣つて、蘭人に就て船舶操縱の方法などを習はせました。一時咎を受けて幽閉の身となつてゐた高島四郎太夫秋帆をして洋式の教練を始めさせました。而してかういふ事は幕府だけに限りません。各藩の心あるものも亦軍事に力を用ひて造船、鑄砲、洋式操練などを始めたのであります。

以上述べたことに依て、嘉永から安政に亙つて國内が俄に騷々しくなり、世運の變遷につれて新人物の要求が生じ、新人物はその頭を擡げ得る機會を得たことを知ることが出來ませう。

九、松平慶永公

越前藩主松平慶永公は徳川三卿の一である田安家に生れられた人でありますが、天保九年家慶將軍の命を以て越前守松平齊善の後を承け、福井三十二萬石の領主となられたのであります。夙くから英明の資質など有しておられた事は、天保十四年、十六歳で始めて江戸を出てお國入をする時に、兼て尊敬してゐられた水戸の徳川齊昭を訪ねて、國主たる者の心得九個條を擧げて質問された事でも明かであります。その箇條の重な者は　一、國主身持の心得　二、學問奬勵の件　三、武道修練の件　四、家老役人、近侍等の待遇、使ひ方　五、百姓町人撫育の件　六、善人不善人の見分け方などでありますが、これに對して齊昭は丁寧に答書を與へてゐます。そしてその答書の終に

御持參になつた個條書は熟覽の上愚見を認めました。憚ながら御養子の御身分で、且又初めての御入國の事であるから、急に改革なさるのは宜しくありますまい。諸

事十分御考慮のほどを望みます。只今の御年輩で斯く國政に心を用ひられる事は實に感心の至であります。此上ながら間斷なく御遣りになれば、何んな事業も容易なことゝ賴母しく思ひます。

と述べてありますが、齊昭は當時四十四歲、聲望天下に響いた人でありますから、公の爲にこれが大なる激勵になつた事と思はれます。

越前藩は藩祖秀康が家康の庶長子を以て、七十五万石に封せられた北方の雄藩であつたが、二代忠直の時、殆んど半分に減封され、藩勢が挫かれた上に歷代の藩主が治世短く、多くは養嗣であつたなどの關係から、藩政は振はず、經濟も豐かでありませんでした。公はまづ緊縮政策を取り、自ら手許の費用を半減して儉約を實行し、藩中に向つても、奢侈を戒め衣服、宴會、贈遺等に關する制限を定められました。公の儉約勵行は其場限りのものでなくして、後々迄も實行されたのであります。私の母は御殿奉公をしたことがあつて、慶公及び夫人の日常生活に就て話をしましたが、朝はぜんまい又は豆腐などの味噲汁だけ、晝晩は刺身か燒物かの一種とお汁位のものであ

つて、衣服はすべて木綿物に限り、御殿女中などは赤裏をつけることを一切禁じられてゐたさうです。この儉約の結果後に財政に餘裕を生じ、學校其他の施設が出來たのであります。

公は一方で進歩的な考を持つた人でありまして、諸般の施設に手を着けられました。弘化四年に藩士西尾源太左衛門父子を江戸に遣つて、砲術家下曾根金三郎の門で砲術を習はせられました。江戸から安五郎といふ大砲の鑄工を呼寄せて、越前最初の大砲鑄造をはじめられました。また弓隊を廢して銃隊を置き、ゲヴエール銃の製造をも始められました。種痘を行ふことに熱心であつた事は前に述べた通りであります。又藩學明道館を創設して人材の養成に力を盡されましたが、此の事は後に述べることに致しませう。

公の名聲は段々高くなつて行きました。且つ將軍家の近親でありますから、列侯の間にも重きをなしました。公の親しく交はられた諸侯は先輩として崇敬してゐられた水戸の齊昭を始として、薩摩の島津齊彬、宇和島の伊達宗城、土佐の山内豐信、福山

の阿部正弘等であつて、何れも名諸侯と謠はれた人々であります。つぎに公の左右に在つて輔佐した藩臣は何んな人かと申しますと、中根雪江（師質）と鈴木主税との二人を擧げねばなりません。雪江は平田篤胤の門に於て國學を學んだ人で、年は公より二十歳も上であり、温厚忠實常にその左右に在つて謀議に與かたのであります。其の著の昨夢記事などを見ますと此事は歴々と明かであります。鈴木主税は雪江よりは七つ許り年下ですが、嘗て寺社町奉行の時弊政を改革して人望を得、後ち公の側締役となつて輔導の任に當りました。序に申しますが、主税は福井の木田地方に今も世直神社として祭られてある位で、善政を施し人民に歸服されたのであります。左内先生が主税の死後、その墓表のことで中根雪江に送られた手紙の中にも「市尹（町奉行をいふ）の節なども追々徳政これあり、既に過日病氣の節も市中にて回復の祈禱いたし候者御座候よし傳聞仕候、人心に感候功此くの如くに御座候」とあります。この人は一角の豪傑で、藤田東湖が「今の時眞に豪傑と稱すべき者は天下唯鈴木主税と西郷吉之助（隆盛）とあるのみだ」と評したといふことであります。主税と東湖とは米艦渡來以

來互に往來して親しく意見を交換したのであります。

嘉永六年米艦渡來の時、公は年二十六血氣盛の時であります。外國關係に就ては非常に心配され、水戸齊昭や老中阿部伊勢守などに對して、書面を以て或は直接會見して意見を述べられた事一再でありません。この頃の公の意見は、同年八月幕府の命に應じて建白された答書に明かでありますが、一言で云へば極端な攘夷思想でありました。この答書は家老の本多修理が國元の意見を纏め、鈴木主税と同行して江戸に參り、反覆商議した結果提出した者でありますから、公を中心として雪江、主税などの思想識見を或點まで見ることが出來ます。其中の一二節を摘んで申しますと「明年春米艦が渡來した節は必ず戰爭する覺悟で、その用意をするやうに諸侯へ仰付けられて、專ら防戰の術を勉强し、天下の人心を一定されるがよい。而してそれには先づ大元帥を建て兵馬の權を御委任なさるが第一の急務であります」といひ「講和の妄議は一切御止めになつて、今日只今から必戰の廟算を確定した旨を發表し、大元帥を建てられることが急務中の大急務と存じます」といひ猶「德川一族の中で德望兼備の人を

大元帥に建て、軍事政務一切を御委任になるやうに」と述べてありますが、此等を要約すれば、必戰を期して攘夷を實行すべきで、それが爲には大元帥を建てることが急務だといふのですが、これは庸弱な家定では天下の人心を纏めることが出來ないのを憂へられた爲めであつて、後に一橋慶喜を將軍の儲嗣と定めやうと熱心に運動された意向は、こゝにも顯はれてゐるのであります。

嘉永から安政にかけて、米艦渡來以後容易ならぬ形勢になつたことは前に述べた通りでありますが、尊王愛國の志厚く、德川の宗家を思ふ心の深い公としては、奮つて國事の爲めに盡瘁したいと考へられる事は當然であり、また公の地位は最もこれに適したのであります。而して夫に就ては第一必要な者は人物であります。雪江や主稅も亦賢材を得たいと希つてゐました。是に於て左内先生が見出されたのであります。

十、先生の登用、二度目の上府

安政二年六月先生二十二歳の時藩公より學業上達の褒詞と印籠とを賜はりました。

これは先生が愈々登用せられる前提であつたのです。ついで七月歸國を命ぜられ、十月醫員を免ぜられて御書院番に擧げられました。醫者は士分以下に卑められて膏藥煉などゝ輕蔑された者でありますが、さういふ低い位地から士分の相當上席に拔擢されたといふことは、格式を重んずる幕府時代では破格のことでありまして、今日で云ふと、一屬官から大臣の秘書官にでもなつたやうな者ですから、藩中皆目を欹てたのであります。この拜命の日のことは綱常子が左內全集にかう書いておられます。

拜命の日先妣その醫員を罷めたるを聞くや赫怒して曰く、汝何ぞ辭せざりしと聲色倶に厲し、蓋伯兄を以て先考の志に負くと爲せば也。伯兄惶恐伏して泣くこと久しうして徐ろに告ぐるに君恩深重、又特に弟を醫班に列して以て世業を襲がしむることを以てす。先妣色稍釋く。伯兄乃ち仲兄（綱維）に命ず、仲兄の志航海術を學ぶに在り、故に辭す。遂に綱常に命じ且修業の法を問ふ。綱常答ふるに只勉學あり其他を知らざることを以てす、伯兄喜んで泣く。時に伯兄年二十二、仲兄十六、而して綱常甫めて十一なりき。（漢文）

これが先生の生涯に一轉機を與へた者でありまして、啓發錄の中に、「醫者といふ賤しい業をしてゐるが志は天下國家に在のだ」といふ抱負を述べておられたのが、玆に實現されんとする機會が與へられた譯でありまして、之より政治的方面に活躍されることゝなつたのであります。

先生が登用されることになつたのには斯ういふ話があります。曾て鈴木主税が藤田東湖に向つて「何うも人物が乏しい」と云つて嘆じた所が、東湖は言下に「貴藩には橋本左内といふ者が居るでは御座らぬか。年は若いが學問といひ見識といひ誠に立派な人物だ。燈臺本暗しとは貴下のことで御座るな」と笑つて、先生の人物を賞めたさうであります。そこで主税は始めて先生を知り、中根雪江と相談して、藩主に勸めたのであると。又斯ういふ話もあります。先生が江戸で醫學の勉強中、或日上野に遊んで、乞食が病氣で路傍に寢てゐるのを見られて憐れに思ひ、人知れず治療してやられた事がある。此事を聞いたのが、主税が先生を知る始めであつたのだと。先生が藤田東湖と會つて知合になられたのは何時頃か判然しませんが、當時東湖といへば其名

遍く知られて、志士の間には燈明臺として仰がれてゐた人であるから、先生もその謦咳に接せんが爲に江戸遊學中訪問された事でありませう。固より東湖は先生のお父さんともいふべき年輩で、名のある大先生でありますから、友人といふよりも弟子として教を受けるといふ態度であつたでありませう。併し先生の沈着なる態度とその雄辯と世界の大勢に精通してゐるのには流石に東湖も驚いたに相違ありません。また病乞食を治療したといふことも、大坂在學中にも同様の事があるから先生としては有りさうな話であります。併し先生の秀才であることは既に主税の耳に入つてゐない筈はなく、主税と左内先生の先生である吉田東篁とは同じ淸田丹藏門下で、東篁も主税には推服してゐた間柄ですから十分承知してゐたことゝ思ひます。所が藤田東湖が折紙をつけた者ですから直ちに登用の段取に運んだのではありますまいか。また先生と親族關係であり且つ親しい交をした佐々木長淳（權六）の直話では、先生は夙くから國政方面に出たいといふ希望があつて「お隣の中根雪江さん——佐々木の隣が中根の屋敷でありました——にも賴んで吳れ」と云つて居られたさうですから、中根雪江も推輓

に力があつたのであります。

それは兎に角、先生登用のことが定まつて、十月一日鈴木主税は江戸に向つて出發し、その翌月先生も江戸に出て常磐橋内の藩邸に入り、主税の長屋内に住まれることになりました。所がこの頃一の大事件がありました。それは十月二日に於ける江戸の大地震です。安政の大地震といつて語り傳へられた者で、大正十二年の大地震と甲乙のない者でありました。外國事件がある所へ、かういふ大變災が起つて、江戸の都では家屋の倒壞、火災多數の死傷があつたのですから、當時人心の動搖した事は想像出來ませう。その中で主税や先生の痛恨に堪へなかつた事は、藤田東湖が倒れた家の下敷になつて亡くなつた事であります。前申すやうに、主税は江戸への道中に上つたのですが、今日のやうに電信電話などの無い時代ですから、木曾路の藪原驛で江戸の地震を始めて聞いて、夫から晝夜兼行で十一日の曉方常磐橋の邸に着きましたが、東湖の壓死した事は江戸近くの板橋驛で始めて聞いて大に驚き、江戸に着くと旅裝も解かず、其のまゝ小石川の水戸邸に行き、東湖の遺靈に對して慟哭したといふ事でありま

す。主税と東湖は肝膽相照した中でありまして、齊昭と慶永公との意見の交換、又は國事の相談は此兩人が直接に談合したのですから、主税も非常に落膽したのでありまして、以後東湖の話が出ると、「天この英雄を奪ふ又倶に國事を議すべき者なし」と云つて歎じたさうです。所がこの主税も憂國の餘り遂に腦病となり、翌安政三年二月に常盤橋の藩邸内で亡くなりました。その死ぬ前に「わが志を成す者は君の外に無いのだから何うか天下の爲めに努力してくれよ」と先生に後事を托したさうであります。先生が主税を失つた時の悲嘆は、その後墓表のことで、在國中の中根雪江に送られた手紙の中に、「倩主税こと何とも殘念の至り、痛恨遺憾淺からず存じます……何う思ひ返しても人材の乏しい中から一人奪ひ去られたのは此の上ない敗軍、嗚呼嘆ずべし」といつておられます。また東湖には主税と共に先生が心服して居られたのでありまして同じ手紙の中に「純（主税）も小拙も心服致し候者は水府藤田子に止り申候」と申しておられます。一年もたゝぬ中に、賴みに思つてゐた二大人物を失つた先生は、之れを悲しむと同時に、ます／＼奮ひ立つて國事に盡さねばならぬと誓はれたのであ

ります。

筆の序に鈴木主税の病歿のことを先きに述べて了つたが、安政二年十一月參府後、先生は主税と同邸內の一つ長屋に居て、春岳公の爲めに各方面の交涉應接に當られ、主税亡き跡はます／＼忙しく働かれたのであります。先きに云つた中根雪江へ主税の墓表に就て贈つた書簡は安政三年四月九日附のものでありますが、其終に

小拙も國家の事樣々思ひ出し憮燃悵然罷在候、段々國恩に依り安樂國の身分に相成り、此節は病家より叱責を被候事もなく、獨身悠然史を讀み經を考へ、傍ら兵を談し、時々詩文論策を作り、天下有名の士才人智士と相上下致し居候は古今宇內無上の大快事に御座候

といつて猶「併生來多病で晝夜間斷起つて困つてゐるが、此頃診察をして見た所が、餘程六ケしい病氣で、古の人も名をつけてゐない、此名は自分から始まるので、卽ち憂國愛君といふ病で、此病には藥がない、あなたも同病で此頃は恐く陽氣のせいで發作してゐることで御座らう」といふ一寸戲談交りに申送つておられますが、四方の名

士と交つてます〳〵知見を廣められたことゝ想はれます。西郷隆盛と知合ひになられたのも矢張此頃のことで、これにも一の逸話が殘つてゐます。

先生と西郷とは安政二年十二月廿七日、水戸藩士原田八兵衛のお長屋で出逢つたのが最初の面會であつたのですが、その後幾日か經つて、先生から西郷を薩摩の藩邸に訪問されました。而して先生の方から「あなたは是迄國事の爲に御盡力なさると承つて敬服してゐましたが何卒御高教に預りたい」と挨拶されたのです。すると西郷は先生の容貌が優しくて丸で婦人のやうであるから、聊かこれを輕蔑して、「いや吾輩は國家などを考へてゐるものではありません、御覽の通り唯毎日角力を取つてゐます、あれ御覽の通り、力士が出入してゐますぢや」と云つて相手にしなかつた。すると先生は「御戲談はお止しなさい」と云つて徐ろに現代の形勢と將來の國運とについてその理路の立つた雄辨で諄々と述べ立てられた。その言論は一々的に中つてゐて、幕府の機密に就ても西郷が始めて先生かち詳に知つたやうな次第であつた。西郷もこれには且つは驚き且つは恥ぢて、翌日早々先生を越藩邸に訪問してその失禮を謝し、以

來深い交りを結んだのであります。西鄉の恬淡洒落過を悔いて憚らざる態度も美しいことでありますが、如何に先生の才識が卓出してゐたかを知ることが出來ます。西鄉が「自分は先輩では藤田東湖に同輩では橋本左內に心服してゐる、この二人の才學器識は遠く及ばぬ」と云つたのを見ても餘程信服してゐたものと見えます。

十一、明道館時代

安政三年三月末に春岳公は福井に歸國されました。德川時代には參勤交替といふことがあつて、諸大名は一年江戶に在勤すると、次の一年は領國へ歸るのであります。安政三年からは公在國の番でありまして、翌年の四月まで福井に在國されることになつたのです。

この前年卽ち安政二年の三月に、公は鈴木主稅の議に依て藩學明道館を建てられました。これは水戶の弘道館に倣つたもので、福井城中三ノ丸大谷半兵衛の屋敷を以て學校に宛て、十五歲以上の藩士子弟をして入學せしめました。併し學校設立と共に公

は江戸參勤となりまして、學制も整はなかつたのでありますが、今度は在國にもなりますし、國事に就ては度々幕府に建白をしても一向採用にならず、慷慨に堪へないので、せめて自國內だけでも確り固めたいとの考から、大に敎育を振興し人材を作らうと企てられることになりました。そこで先生は猶江戸に留つて他藩との交渉やら學校制度の取調などに從事されてゐましたが、之を國元に呼び還して明道館刷新の事に當らせられました。

この時中根雪江から歸藩の命を傳へられた時に、先生から雪江に送つた返書は、如何に先生の志想の高邁であつたかを證して居ります。まづ「今回歸國せよとの事でありますが、藩の御用とは何んな事であるか、場合に依ては御斷り申したい」といひ、「國是を立つる云々とのことであるが、我國は古から歷史的に國勢國體が隣邦に卓出して居り、何も支那風を慕つたり、和蘭の眞似をするにも及ばぬ。忠實尚武といふことで行けば、五大州に武德を耀すことも出來る。況んや彈丸黑子の北國に雄峙する位は何んでも無いことだ」といつておられます。彈丸黑子の北國と福井藩など丸吞

にしてかゝつて居られる其の意氣には、在藩の重臣たちもその大膽に驚いたといふことであります。猶この書面の終に「例の議論のみに日を暮して後は徒に嘆息してゐるやうな事ならば、私だけはお除き下さい。歸國は致しません。命に從はぬと叱られかも知らぬが、私は本心を枉げて勢利にくつ付き、權門の御機嫌調子を取ることは御免を蒙りたい。私は十年ばかりは諸學を研究し世の變遷の跡を極め、少し物が分つたら是迄の御恩を一朝に報いたい考だ」と申しておられます。學校を出るか出ないかの中から、ペコ〳〵就職口を探し廻はる青年達とは、大分桁が違つてゐたのであります。且當時福井藩の氣風は保守頑迷で、何か新しい改革をやらうとすれば、彼此愚論を吐いて妨害するに相違ない事を、先生も十分承知してゐられましたから、前以て他日の反對を排する伏線を張つて置かれたのであります。同じ頃中根雪江に宛てた他の手紙に、明道館の教授連中が前例の有無を彼此いふのを攻擊して「彼の輩は平生何の學問をしてゐるのか不審の至りである。此くの如く例々々とのみ申候はば今日より屁一つも放ち難く相成申ずべく候」と喝破されてゐます。

結局先生は六月に歸國されました。そして七月に講究師（教授）同樣で明道館に出勤を命ぜられ、九月に明道館幹事と御側役支配（藩政の樞機に與る）とを兼ね、翌安政四年一月廿四歳を以て明道館學監同樣の心得を命ぜられました。明道館の職制では上に總教、參教などいふ職名がありますが、事實は幹事（後學監と改む）が今日の校長といふ格で、經營の任に當るのでありまして、先生は安政四年の八月再び江戸に上られるまでに明道館の改革と擴充とに從事されたのであります。今日二十三四歳では漸く大學か專門學校を卒業するかしないかの年頃でありますが、先生は自分のお父さんにも當る位の老教授―中には頑固な手合も尠からずあつたのでありますが―等の異論反對等にも拘はらず、着々其所信を斷行して、學校の大改善を行はれました。卽ち明道館は是迄素讀所―少年級とでもいふべきもので養蒙師句讀師助教といふ先生方が四書五經の素讀を授ける所と習讀所―青年級で教授助教授が居て四書五經史記漢書等の講讀を授ける所とたげて、重に漢學を授けてゐたのでありますが、先生は新に洋書習學所を設け、こゝで蘭語を習はせ進んで物理、化學、兵學、機械、物產、曆算、

測量、天文、地理等の學科を學ばせることに致されました。後には算課局、兵課局といふものを新設されて西洋の學術を研究させられました。

洋學を始めるに就て先生は斯う云つて居られます。

「これは固より外國の珍らしい技術を物好きでやるのでは無い。近頃西洋では學術技藝が大に進歩し、兵科、器械から數學等に至る迄實驗を重ね精巧を極めて我國以上のことを發明してゐる。故に彼の長を採り、我の短を補つて、我國をして益々萬國に勝れさせたい趣意である。尊王攘夷の策は先づ彼の長所を知る事が第一である。」と、そして猶先生は叨りに外國を誇つて我國を卑めるやうな所行のないやうに誡め、洋學を修むる者は必ず經書をも學ばねばならぬと定められました。佐久間象山が曾て「泰西の學術東洋の道德」と申ました、其意味は彼は學術に於て長じてゐるが、我は立派な道德を持てゐる、此二者相兼ねて始て完全な國となり、人となるのだといふのでありますが、左内先生の意見も之に合致してゐるであります。のみならず先生は次のやうに云つてゐられます。「洋學の義筋合正しく相開候時は、其の利夥しくこれ有候得

共、萬一杜撰に相成候時は、其害亦言ふべからず、……凡そ大に人を利するものは、亦必ず大に人を害する弊なき事能はず、故に此學の開闢。始に於て丁重用心致すべき也」と。洋學の利弊に就て斯くはつきりと豫言されてゐる先生の明識―寧ろその靈覺は唯恐入るばかりであります。

話は後になりましたが、一體明道館に於ける教育の標語は「政教一致文武不岐」といふのであります。此方針は春嶽公も鈴木主税も吉田東篁も左内先生も皆同意見でありました。政教一致といふのは政事と教育とが分れ〳〵になつて教育が虚飾とならないやうに、實際に役立つ眞の人材を作るやうにならねばならぬと云ふのであります。文武不岐といふのは、文に偏して柔弱となり、武に偏して頑固となるやうのことなく、剛柔相兼ね以て忠孝を勵むの士とならねばならぬと云ふのであります。そこで安政四年には明道館の中に惣武藝稽古所が建てられまして、各流の師範を教授として、こゝで劍槍銃砲の諸術を生徒が講究することになりました。

これ丈けの施設をするには、反對や異論があつたことは當然であります。「左内の青

二才が生意氣だ」と誹るもの嘲るものが多かつたのでありますが、先生は着々とその所信を斷行されました。猶先生は教育の方針、教授の方法、職員の制度、生徒の取締賞罰、書籍器具機械の購入、留學生の派遣等に就て、或は意見を立て或はその實行に當られましたが、教育者としての識見と行政官としての手腕とを兼ね併せ、立派な文部大臣であつたのであります。幕末の偉人の中で意見は堂々たる者でも、いざ實行となると案外手腕の無い人もありましたが、先生は明道館に於て立派にその實行力を證明されたのであります。序に申ますが、この頃江戸から先生の舊師であつた蘭學者の坪井信良を福井に聘用したり、和蘭語學原始といふ和蘭文典を福井で翻刻してゐますが、此等も先生の盡力に依つたのであります。

先生はまた殖產興業にも熱心でありまして、制產に關する建白もしてゐられますが、この明道館時代に佐々木權六（長淳）をして造船の研究をさせられました。この人は理學博士佐々木忠次郎氏の嚴父で、後に藩命で米國へ築港造船の研究に出掛けた人でありますが、此時スクーネル形の一番丸といふのが製造されました。又藩內に石

炭の出る所は無いかと探させられた所が、河合常之進といふ者が遂にこれを發見しました。―これは鷹巣山の方面で泥炭だといふことです―此時の先生の喜びは早速在江戸の中根雪江に報告せられたと見えて、雪江から安政四年七月十日在藩先生へ送つた手紙に、その事が書いてあります。當時春岳公初め人々の熱心と滿悦との情が躍如として顯はれてゐますからその儘こゝに記します。

河常（河合常之進）生奮勵努力、遂に石炭を見出し候條、開物の創端無比の大勳績と感賞に堪へず候。一片御廻送、如何樣十分老熟には之無樣に候へ共、焚臭等相違も之無、扨々心地能次第と欽喜に堪へず候。上（春嶽公）にも殊の外御悅喜にて、妙々との御意に御座候。唯恨らくは是を蒸氣船へぶちこみ、山丹滿洲邊を掠略致候節は、草葉の陰より一見と存候へば、例の頽齡を嗟嘆致候。併ながら此石炭を見候も中々仕合かとも思ひ直し申候。兄にも早々一見御出懸の由、左もこれ有るべき事と遙察致候。此他綠礬石樣の物等相見え候由、追々無盡藏の鎖鑰相開け申すべき勢、欣幸此事に候。

これに依て見ましても、先生は一歩所か三歩も四歩も時勢を先へ出て居た文明的政治家であつた事が明かであります。同時に先生の蘭學が如何に精確で正しく海外の事情を理解し洞察して居られたかを知ることが出來ます。夫に就てもその抱負と手腕とを我邦全國の上に施すことが出來なかつたのは實に〳〵殘念に堪へません。

猶こゝにもう一つ言ふべきことがあります。それは左内先生が熊本藩から横井小楠といふ大人物を明道館に招聘することに盡力された事であります。小楠は攘夷論の盛な時に當つて、開國論を唱へた眼識の高い人でありました。その學風は文藝の末に走るを退けて、國家經濟の大要を說いたのであります。併し熊本ではこれを實學といつて用ひられず、小楠は處士として子弟を教育してゐました。左内先生は明道館の教育を振興するのには何うしても學術人格の傻れた人を得なければならぬと考へられましたが、小楠を措いては外に適當な人が見當りません。是より先き先生は小楠に逢うて其人物を知つてゐられたのであります。そこで安政四年諸國の國情視察の爲に西國方面を巡遊中であつた村田氏壽―左内先生と最も親しくして國事に奔走し、先生につい

で明道館の學監になつた人であります—に命を傳へて熊本に回らせ、春嶽公の誠意と左内先生の懇請を傳へて越藩の禮聘に應せんことを求めたのであります。幸ひ春嶽公の夫人いさ姫は熊本の細川家から輿入になつた方で、兩藩の關係は親密でありましたから、話が順潮に進み、翌安政五年小楠は福井に來ました。春嶽公や左内先生は在府中であり、ついで後に述べますやうに公は江戸に於て蟄居を命ぜられましたが、國元に命を傳へて國賓を以て待遇し、家老以下弟子の禮を執つたのであります。

十二、三度目の上府　常磐橋邸內

閉め切つた部屋を開け放して、青葉を渡る清新な凉風を迎へ入れたやうに、先生の努力に依て福井藩の學風は頓に生氣を帶び、擧藩文武を勵み且つは西洋學術の研究に熱心いたしました。人材はすく〳〵と伸びて行きました。維新の前後、藩から出て相當名を成した人は多く明道館で學んだのであります。

併し時勢は何時までも先生をして育英に携はる事を許しませんでした。安政四年は

春嶽公參勤の年番でありまして、五月に江戸に上られたのでありましたが、國事奔走の爲め先生の上京を促されましたので、その八月五人の少年—三岡友藏（子爵由利公正の弟）堤五市郎（男爵堤正誼）溝口辰五郎（加藤斌）横山猶藏、齋藤喜作—を引連れて、三度目の上府の途に上られました。同月十九日着京、直に侍讀兼御內用掛を命ぜられて、春嶽公を輔佐して政治的活動をされることになりました。昨夢記事にはかう書いてあります。

八月十九日御國許に罷在明道館の學監橋本左內は、才學の優長なるは元よりにて洋學にも精しく、彼方の情狀形勢にも詳なれば、此節柄御用にも與るべけれと召寄せられ、今日江戶表へ到着せり。この後は御建白の御文章などの事は彼是と參豫を命ぜられたり。

また同月廿六日先生から在藩の村田己三郎（氏壽）に宛てた手紙には、「從來は二七の日に家老や君側の人々打混りて、書經を御會讀になつてゐたが、近日から別に孟子の御會讀を月に三度ばかり始め、其外資治通鑑などの御相手を申上げる積だ」とあり

ますやうに、侍讀として春岳公の爲に讀書の御相手をなし、公の見識を開くことに努められたのであります。時に公は年三十、先生は二十四でありました。誠に若い先生でありましたが、確かりした先生でありました。村田氏壽へ宛てた書面の一節を（安政四年十月廿一日付）御覽下さい。

君上（春嶽公）には從來理屈詰の學問のみ遊ばされ、眞の御見識相立ち申さず、深く恐れ入り奉り候ところ、近來小拙唐突を顧みず通義又は八大家文類疏通開濶なる者御進め申上候處、頗る御嘉納遊ばされ、如何にも面白し、從來此般の書讀まざる故、覺えず死論に陷居候など仰開けられ、以來は御手元始め學術一變遊ばされたき御思召の御樣子、且逐々に御手元の者に學問御勸めなされたき内旨もこれあり候へども、當節專ら其御含蓄御座候處御教誨申置候……此の頃は、晝の内「通議」御獨見、夜分は「八大家」小拙御伴讀申上候。近日より「温史」（資治通鑑）これは平本、桑山、萩原、波々伯部、香西、大谷、小拙等伴讀の筈。朝四つ前の處にて御輪讀遊ばされ候思召に御座候。

如何に先生が君德を成すに心を用ひられたか、また公が先生を信認されたかを見るに足ります。猶同じ頃の書面に「この頃立花（柳川侯）土佐（山内容堂）川越、因州（鳥取侯）の四君が大學の御會讀を始められ、明七日に藩邸に御集りのことになつてゐる。小生に侍講をせよとの仰せで甚だ痛心愧入つてゐる」と村田氏に報告されてゐますが、恐らく之は公が先生の明快な講義振に大に啓發をうけられたので、同僚の人々にも一つ聞かせてやりたいと考へられたことでありませう。「王者の師」といふ語がありますが、先生は慥かにこの語に相當した人であります。

先生は常磐橋藩邸の御長屋の奧十疊二間を居室として、炊事其他身邊の事は一切一人の學僕に委せ、衣類なども平生は綿服で淺黃の帶に無地の板羅紗の羽織といつた風で、質素な生活に滿足してゐられた。酒も烟草ものまず、道樂と云つたら先生の言を借つて云へば「大好物の讀書」でありました。そして忙しい中から、長屋つゞきに住んでゐる先生が引連れて來られた五人の學生の教育にも心をくばることを怠られなかつた。八月廿六日江戸着後間もない時の村田氏への手紙に「着後繁務晝夜間斷なし、

しかのみならず五生陸續質問講究、瞬間も間時なく候。實に近來怠惰の病を一洗致すべく大樂に御座候」とあります。私はこの一句に逢着した時、思はず涙の滂沱たることを禁し得ませんでした。何と尊い心持ではありませんか。五人の學生がいろんな問題を持つて來る。先生は忙しい中に五月蠅がりもせず、一所になつて、彼れ一問此れ一答、燈火を挑け盡して更の深くるを知らない。「實に近來怠惰の病を一洗致すべく大樂みに候」先生が若い學生のいそしむのを見て滿悅措く能はず、微笑を含んで相手になられた常磐邸御長屋の一室が彷彿として見えるやうな氣がします。

先生は常に春風を以て學生に接せられたが、また學生をして自奮自發せしめるやうに努められました。五人の學生の一人であつた溝口辰五郎（後加藤斌）の話にかうあります。

私が蘭書を學んだ大木仲益塾で、臨講があるので、毎晩明日の場所を豫習して行く定めであつた。或日の事、私が豫習したが、何程考へても解らぬ箇所がある。夫れから先生の前へ持出して、之は何といふ事ですかと尋ねると、先生は靜に「辰さん

私に臨講してお貰ひになるのですか」と云はれた。唯一言であるが、私は汗が流れる心地がして、早速自分の部屋へ逃げ歸り、自分で考へた所を翌日述べた。すると其れは誰も當惑してゐた所で、結局私の說がよかつた。

かくて先生はこの五學生を夫々才に應じて勉强させることにされて、堤には騎兵取調と槍術稽古を命じ、三岡、溝口には蘭學を專修させ、横山には經書の研究をさせ、同時に先生の手傳として諸方の探索に出掛けさせられました。また先生自ら學生を引連れて、講武場や海軍教授所に見學に出掛けられた事もあります。此等の學生が後ち皆相當な人物になつたのは先生の感化に依るといつて差支ありません。

其外先生は江戸に在り乍ら、明道館の爲めに心配をして、學監村田氏壽の相談相手となつて意見を申送つたり、書籍や器械の世話をしたり、蘭書の飜譯を坪井信良、市川齋宮等に（二人共に福井藩に抱へられた蘭學者）命じたり、三面六臂の働きをされたのであります。併しその最も大なるものはこれから述べやうとする政治的の活動であります。

十三、外交問題の經過

この頃わが國の大問題は二つでありました。一は外交問題、一は建儲問題であります。まづ外交問題から述べませう。

前に述べた如く安政元年五月米國との和親條約で、下田函館を開くことになつたのですが、ついで同八月英國とも同じ樣な條約を結んで長崎函館の二港を開くことを約し、十二月には露國との條約で下田函館を開くことになりました。

かうしてゐる中に、幕府の老中始め有司達は外國の事情も分つて來て、一概に攘夷の實行が出來ないことを悟つて來ましたが、さればとて開國の方針を斷行することも出來ませんでした。これは當時の輿論は攘夷說が盛であつて、水戶老公齊昭の如き有力な大名がその急先鋒であつたからであります。幕府は開國の已むを得ざるを知り乍ら開國と斷ずることをせず、攘夷の實行すべからざるを知り乍ら、猶口に攘夷を唱へて、左顧右眄、因循姑息、一時を糊塗して日を送りました。これが益々幕府の權威を

墜す基となつたのであります。左内先生もこの因循姑息には常に切齒されたのであります。

その頃幕府の老中筆頭は阿部伊勢守でありましたが、安政二年十月堀田備中守正睦に之を讓り、翌年六月病歿しました。そこへ今度はハリスの渡來といふ事が起りました。安政元年の米國との和親條約の中に、この條約の調印後十八ヶ月を經ば、兩國の協議を以て下田に米國官吏を駐在せしむる事あるべしとの條項があつたのです。米人タウンセンド・ハリスはこれに依て安政三年七月軍艦に送られて下田に來着し、爾來アメリカ合衆國の總領事として我國に駐在すべきことを告げました。幕府は「兩國の協議を以て」とあるのを盾に拒絕する積でありましたが、ハリスの決心態度が强硬なのを見てこれを許可することになりました。

ついで、ハリスは將軍に謁見して米國大統領の國書を捧呈し、且つ老中に面謁して重要な事件を御話したいと申込みました。幕府では若し之を許したならば、排外派から國家の面目を辱かしめる者として非難攻擊されるに相違ないから、專ら下田奉行を

して應接せしめ、そこで喰ひ止め樣としました。所がこのハリスは中々老練な外交家で、脅してみたり釣つてみたりして、江戸入府を强請して止みません、で、約一年に亙つて押問答を重ねた結果、幕府は遂に屈してその請を許し、安政四年十月七日ハリスは下田を出發して陸路江戸に入り、同月廿一日を以て登城謁見を了へ、老中堀田備中守を經て國書を捧呈しました。この時幕府の役人は直垂狩衣などの禮服を着用して參列し、將軍は大廣間上段に厚疊七枚を重ねてその上に座り、ハリスは下段に立つて拜禮を行つたさうであります。

登城謁見が終つて後、ハリスは堀田備中守――此人は蘭癖家と云はれた位で開國主義の人なのです――の屋敷で老中と逢つて、世界の大勢から說き起して、我國が何時までも鎖國を固守することは危險であることを諷示し、且歐洲列國の恐るべきを述べて、彼等の來る前に早く米國と條約を結ぶ方が宜しいと勸告をしました。幕府はこの頃英國が支那と阿片戰爭を開いたこと、其中我國へも詰寄せて來るべきことを和蘭から聞いてゐたのですが、今またハリスの雄辯を聞いて大體その要求を容れることに決

し、こゝに當時敏腕の譽れ高かつた下田奉行井上信濃守清直と岩瀬肥後守忠震との二人を全權に任じ、ハリスとの交渉に當らせました。この二人は安政四年十二月十一日から翌年一月十二日にかけて蕃書調所（蘭學研究所）で十三回の應接を重ね、通商條約を締結しました。即ち此條約に依て米國と交易を開き、米國公使及び領事の駐在を許し、下田函館の外神奈川長崎新潟兵庫の開港を約したのであります。

この條約締結について幕府は諸侯の意見を求めました所、水戸の齊昭は相變らず激しい攘夷論を唱へましたが、春岳公や島津齊彬などは卓拔な開國説を主張し、大體に於て前年のやうな無謀な攘夷論を叫ふ者は漸く減少しました。併し衆口一致して唱へられたことが一つあります。それは國家の重大事であるから、是非とも朝廷に奏問して勅許の上施行すべきであるといふのであります。そこで幕府は條約締結の議が始まると倶に、林大學頭及び目付津田半三郎の二人を京都に遣はし、嘉永六年以後に於ける外交の顚末を奏上し、今回の條約談判に關する幕府の內意を言上せしめました。所が當時京都の公卿達は海外の形勢に暗く、時局の實際に通ぜぬ者が多かつたから、

此の上言を聞いて議論が沸騰し、「米人は我邦を併呑せんとする野心を持つてゐる者である、通商貿易に託して人民を惑はさんとするものである」と論じて、攘夷を主張しましたから、到底勅許を仰ぐ望がない事になりました。かく朝廷が強硬となつたことは幕府の威望が漸く衰へたことを證する者でありまして、時勢はずん／＼と移り變つたのであります。

そこで堀田備中守が勅裁を得んが爲めに自ら上京することになりますが、之は後に述べることにしませう。

十四、先生の外交意見（其一）

以上ざつと當時に於ける外交上の經過を述べましたが、これから左内先生がこの間に何んな意見を持つてゐられたか、春岳公を通じて何んな事をされたかを見たいと思ひます。

先生の三度目の上京は前申したやうに、安政四年八月十九日でありましたが、丁度

この頃は幕府がハリスの江戸出府を許すことに定めた時でありまして、一般諸侯に此事を布告いたしました。大廊下席の諸侯は――大廊下席は親藩の諸侯の詰所で春岳公も其一人です――此大事に當て默視すべきでないといふので、八月十八日に德島侯松平阿波守齊裕、津山侯松平三河守慶倫、鳥取侯松平相模守慶德、明石侯松平慶憲の四人が春岳公の屋敷に會合して、いろ〳〵凝議をしました。其結果阿波守と相模守とが堀田閣老に面會して、何故に斯かる重大事を許したかの理由を質す事となり、二十日二人は堀田邸に備中守を尋ねました所、備中守は巨細にその顚末を語り、若し强て拒絕したならば、彼は軍艦を以て來襲するかも計られないといふ事を告げました。そこで春岳公等は廿四日更に阿波守邸で會議をされましたが、今更ハリスの出府を抑止することは不可能であるといふので、今後の處置に就て建白することになり、九月六日春岳公と阿波守との二人が堀田備中守の邸に行かれて建白書を提出されました。その大意は、

今度の事は止むを得ぬ事であるが、一旦許した以上は、英國も露國も同樣の願ひを

立てるに相違ない、その時甲を許して乙を許さぬといふ譯には參らぬから、之を始として彼等外人は江戸に來て我が國の情態を一々知る事にならう。で、彼等に輕蔑されぬやう、彼等に倨傲不遜の態度をさせないやう處置するが肝要である。而して其第一義は武備を充實するに在るが、數百年の太平に慣れて上下安逸を貪る風習になつてゐるから、これを機會に兵制の改革を斷行して士氣を振作するやう努められたい。こちらに必戰の覺悟があつて、其上で外國の待遇に信義禮節を重んじたならば、恩威併び行はれて武德を海外に傳へることも出來、彼の非望を挫いて末永く和親を續け得るであらう。

といふのであります。數年前に春岳公が唱へられた強硬な攘夷論から見ますと、非常な相違でありますが、之は左内先生啓沃の功多きに居る事は疑ひないのであります。

この頃ハリスが江戸へ登城するといふに就ては、色々な風說や臆說が行はれて衆說紛々であつたのです。先生から見ると可笑しくて仕樣がない。村田氏壽に宛てられた手紙に「米使登城に就ては衆議紛々たりといふ有樣だが、必竟襟懷の狹少なると、見

識の陋汚なると、衆論に雷同する者との三者のみで、困つた者である。定めて閣老あたりでもこんな愚論には顎もあづれる程の長あくびをして居ることゝ察せられる」と當時の愚劣な俗論を憫笑されておられます。同時に「唯恨らくは廟堂の上に一人の明快雄傑の大臣謀主がないから、萬世の長策一定の卓論が立たず、折々動搖の模樣があるのは嘆かはしきことだ」と幕府の因循を嘆じておられます。猶同じ書中に「ハリスが持つて來た國書に就て何んな事が書いてあるかと、水戸の老公等が頻りに心配してゐられるが、此等は迂僻淺陋の見解で小供の物案じ同樣である、私の案する所では大抵こんな事だらう」と云つて數ケ條を擧げてゐられます。この數ケ條は國書の中には無いが、ハリスが堀田備中守などに說いた所と殆んど符合してゐるのであります。先生は透視的の眼力を有つてゐられたやうです。

ついで同年十一月幕府が通商條約の可否について諸侯の意見を徵しました時に、春岳公は次の意見書を提出されました。その要項を原文のまゝ左に掲げます。

一、方今の形勢鎖國致すべからざる義は、具眼の者瞭然と存じ奉候。

一、我より航海を始め、諸州へ交易に出候事企望の折に候故、道理を以て來り乞ひ候者は御拒絶これ無き筈に候得ば、ミニストル（公使）の義も同斷にて候。

一、強兵の基は富國に御座あるべく候へば、今後商政を釐め貿易の學を開き、有無相通じ、皇國自有の地利に據り、宇內第一の富饒に致度き事に御座候。

一、其中最も怖るべきは他の諸國輻湊にあらずして露英二國の並至に候。兩雄並び立たざる情實既に使節の舌頭に歷然相現れ申候。他日兩國の內より必定大御危難の事件希望申すべしと杞憂に堪へず候。

一、人を制すると人に制せらるゝと、爭ふ所僅に先の一字に候。當今の勢、尤も此に止まるべく存じ奉候。

一、左すれば坐ながら外國の來り責むるを俟ち居候よりは、我より無數の軍艦を製し、近傍の小邦を兼併し、互市の道繁盛に相成候はゞ、反つて歐羅巴諸國に超越する功業も相立ち、帝國の尊號終に久遠に輝き、虎狼の徒自ら異心消沮仕るべく、是只管懸願の次第に御座候。

と述べて來て、右に就きて內地の處置は何うするかといへば、
一、賢明な御方を儲貳に立てられる事。
一、天下の人材を擧用すること。
一、太平の文飾を省き兵制を改革すること。
一、大小名の疲弊を救ひ陋習を破ること。
一、內地は勿論蝦夷地迄山海共種々と措置をする事。
一、四民の業を勵む事。
一、諸藝術の學校を興すこと。
を擧げてゐられます。實に是は堂々たる開國進取論ではありませんか。區々たる鎖國論とは雲泥の相違であります。明治維新後我邦は大體に於てこの意見書の趣旨を實現することになりましたが、當時に於ては殆んど比類なき極めて卓拔な意見であつたのであります。而して其の大綱は固より先生の胸中から出た者でありまして、昨夢記事にも「此御書面は要路の面々には素よりにて、橋本左內をも召され、思召の次第反覆御

商議の上にて御個條御定りに相成候事なりき」とあります。

十五、先生の外交意見（其二）

其後幕府はハリスと條約締結の談判を始めてから、一般諸侯に向つて意見を求めましたが、夫に對して春岳公は十二月廿七日答書を出されて居ります。この時の意見は前の建白書の旨意を更に布演した者でありまして、

一、貿易を盛に行ふことは最肝要であるが、夫には江戸大阪が最も互市に便利であると思はれる。其他三港に限るなどゝ限るのは却て不便であるから、總て適當と思ふ港はこちらから開くが善い。先方から強られて隨ふのは拙劣の下策である。

一、富國策として蝦夷の開墾を第一にやらねばならぬ、卽ち大諸侯數名を遣はして礦山を開き、漁獵を始め、林を伐り、軍艦を製し、砲臺を築きて守備を嚴することが第一の急務である。

一、それに就ては日本人だけでは駄目であるから、露人米人等をも雇ふてその長所

を盡させねばならぬ。

一、露國は世界第一等の國で其政事も行屆いて居り、吾國とは脣齒の關係にあるから、相提携することが必要である。

一、今度の使節と共に我國よりも使節、學生、商人をワシントンに遣はし、彼地に商館を建てゝ貿易を開くが善い。

一、猶廣東へも貿易場を設け、その次には露國英國和蘭等へも人を遣はしその國情を見せしめねばならぬ。

以上が其重な個條であります。

この意見書を差出された翌々の二十九日、幕府は有力な諸侯に登城を命じ、老中列坐の上で條約締結について充分議論を望むとの旨を述べ、土岐丹波守、鵜殿民部少輔、岩瀬肥後守等をしてハリスと談判をした始末を述べさせました。この時春岳公は色々質問を發し、意見を吐かれたのでありますが、その所説は一々肯綮に當り、聞く者公の英敏に感じたと云ふことであります。

所で公をして雄大な開國論を建白し、その英名を高からしめた者は云ふ迄も無く先生が陰に居ての輔導啓沃の力に依るのであります。十一月廿八日先生から在國の村田氏壽に宛てられた書簡を見ますとその間のことが極めて明瞭であります。この書簡は多數の先生の手紙の中で最も有名な者で、外交内治に關する堂々たる意見を發表してあります。全文は卷末に附けておきますが、こゝにその大意を掲げます。

「今日になつて鎖國の出來ぬことは識者には瞭然のことで、米國の要求を拒絶出來ないことは論ずる迄もないが、如何せん、廟堂上の小兒輩迚もその邊の話の出來る者は一人も無い。就ては、せめて我君なりともと思ふ故に、雪江と二人でいろ／＼苦言もし直論をも毎々申上げて居るのである。で、段々工夫もされるやうになり、粗御考も立つて來たやうであるが、兎角柔惰の弊習がきつぱりと脱けず、雪江や小生の云ふ事に手頼られて自發的の御氣概が薄いやうである。それで近頃は一切こちらからは申上げずに頼りに御難詰のみ申上げてゐます。それで段々御工夫される鹽梅で、今回の御上書（十一月廿六日の建白をいふ）も十が九まで御自身でおやりにな

り、當日までに四五度も草稿を改めて推敲され、當日になつて私が聊御添削申上げたのである。海外の所置に就ては公の御考は先づ私の意見と御同樣になつたのである」

と云つて是から日露同盟を說かれてゐます。

「今日世界の形勢を見るに、將來五大洲の國々は一團となつて同盟國となり、盟主を立てゝ戰爭を止めることにならう。そしてその盟主は英國か露國の中と思ふが、英國は慓悍貪欲であり露國は沈鷙嚴正であるが何れ後には魯國に人望が歸するであらう。そこで我が日本は迚も獨立が六ケしい、獨立するには山丹滿洲から朝鮮あたりを併合し、米國又は印度內に領地を持たねばならぬ。併し印度は西洋に占領せられ、山丹邊は露國が手をつけ掛けてゐるし其上我國の力が今不足であるから、到底西洋諸國に對して何年も戰爭することは覺束ない。却つて今の內に同盟國になつた方が宜い。所で英露は兩雄並び立たぬ國だから誠に取扱ひが六ケしい。近來もこの兩國が爭鬪した迹は明白である。依て後日英國から露國を伐つ先手にわが國を賴む

か、又は蝦夷箱館を貸してくれよと願出づるであらう。その時英國を斷然斷るか、又は之れに服するか、一定の方策が無ければならぬ。私は是非露國に從ひたいと思ふ。その譯は露國は信義の國で隣國であり我國とは唇齒の國であるからである。而して我國が露國に從へば露國は我國を恩に思ふだらうが、英國は我國を伐つであらう。是は我國の寧ろ願ふ所で、我國だけで孤立して西洋諸國の同盟に敵對は六ケしいが、露國の後援があれば例令敗れても全滅にはならぬことは明了である。さすれば此一戰で我が弱を强に轉じ危を安に變することになつて此から日本も眞の强國になるであらう」

といふのであります。我國は明治以後親英主義を取て日英同盟を結び、露國と一戰し先生の所論と正反對になりましたが、西洋諸國の一方と結ばねばならぬとの豫言は實行されたのであります。是で見ても先生は遙に時流を超越し、國際關係を明察されてゐたことが明でありまして、將來外務大臣としても立派に偉功を奏され得たことゝ想像されるのであります。また同じ書面に於て先生は

「かく大變革を始めるについては、內政の改革をなさねばならぬとして第一に儲君を建つること、第二に春嶽公、水戸老公（齊昭）薩摩の島津齊彬公位を國內事務宰相專任とし（內務大臣）肥前公（鍋島齊正）を外國事務宰相（外務大臣）として其下に川路（左衛門尉）永井（玄蕃頭）岩瀨（肥後守）等を指添へ、其外天下の有名な人物を御儒者と云ふ名目で陪臣處士に拘はらず撰擧し、これも各宰相に分屬せしめ、尾張公（德川慶恕）因州（松平慶德）を京都の守護にし、之に彥根（井伊直弼）戶田（大垣城主）を指添へ、蝦夷へは伊達遠州（宇和島城主）土州（山內容堂）位の所を遣はし、其外小名有志の向きを擧げ用ゐたら今日の狀態でも隨分一芝居は打てるだらう」

といつて、猶露國米國より諸般の敎師を雇入れること、諸國に學校を設立すること、物產を興すこと、蝦夷の開墾を爲すこと等を說かれてゐます。云はゞ擧國一致の內閣を作り、盛に人材を登用するの策でありまして、後に述べます建儲問題に春岳公及び先生が極力運動せられたのも、此の大經綸を實現せんが爲めに外ならぬのでありま

した。前記の各大名の役割などを見ても、先生の人物鑑識が如何に犀利尖鋭であつたかを知ることが出來ます。

十六、建儲問題（其一）

外交一件と絡んで、これと共に當時の注目となつた者は建儲——將軍の後嗣を定めやうといふ問題でありました。この問題の中心人物は實に松平春嶽公であつて、公はこれが爲めに心膽を碎いて盡力せられ、先生は中根雪江と共にその謀議に參して奔走されたのであります。

嘉永六年ペルリが渡來して間もなく、第十二代將軍家慶が薨じその嗣子實は弟の家定が第十三代の將軍職を繼ぎました。家定はこの時三十歳に達して居たが、病弱であり且つ長く大奥の深宮に育つたものだから、下情にも通ぜず、云はゞ凡庸天下の政務を裁斷する器ではありませんでした。太平無事の時ならば兎も角もであるが、米艦渡來に依つて天下騷然たる時であるから、人心稍もすれば疑惧の念を懷いて前途誠

に深憂に堪へないことになりました。春嶽公は徳川家の近親でありますから、非常に心配されまして、家慶のまだ亡くならない頃から、時の老中阿部伊勢守――伊勢守は公とは親類筋でもあり兼て懇意な間柄なのです――に向つて水戸老公（齊昭）は英明な人で天下の等しく矚目してゐる所であるから、この際同侯を儲君の羽翼にしたならば、諸侯人民も安堵するであらうといふ意味を密に建白されました。老練な伊勢守は自分の意見もさうであつたと云つて大に悦び、是から老公の隔日登城といふことになつたのです。やがて家慶の喪が發表されましたが、如何にも家定では心細い。誰か然るべき人を立てゝ將軍の養君となし、一臂の相談相手になる人は無いかと、一門の中を見回はして見られましたが、一橋慶喜の外には見當りません。慶喜は水戸齊昭の第七子であるが、前將軍の命を以て一橋を繼いだ人で、年比といひ不出世の英明といひ申分ありません。で、公は七月二日登城の時兼て同志として親しい薩摩侯島津齊彬に意中を話されたのであります。越えて八月十日公は阿部閣老にも此事を話された所、閣老は自分も同意であるが、之は至極の重大事であるから輕々しくは云ひ出せない、

深く心に秘めて好き機會を待たう、決して人には御話にならぬやうにとの事でありました。これが公の儲君問題に就て心配し始められた端緒であります。公の意中は天下多事の際人心を一統して、公武合體、擧國一致、國難に善處するには、幕府の主腦部に英明な人を置いて、天下その命を仰ぐといふ風にせねばならぬ。國家の爲にも、德川の爲にも、攘夷をするにも、開國をするにも、まづこれが先決問題だと考へられたのであります。

安政も元年二年と過ぎ、三年八月になつて、ハリスが我國に總領事としてやつて來ました。この時公は在國中でありましたが、外交問題のます〳〵面倒になるにつけても、早く儲君を決定せねばならぬと考へられて、德島の松平阿波守、名古屋の德川慶恕等へ書面を以て一橋擁立のことに盡力あるやうにと慫慂されました。阿波守は家齊將軍の子で現將軍に取つては最近親の人でありますし、名古屋は云ふ迄もなく御三家の一であります。猶公は譜代大名で賢明の聞えある安中の板倉伊豫守勝明、及び公と親交ある宇和島の伊達宗城等にも聲息を通ぜられました。

安政四年五月公は上府されましたが、間もなく六月に阿部伊勢守が病歿しました。公には公私共に大船の柁とも賴んだ人を失つて痛く落膽され、特に建儲問題に就ては誰に取りついて運動して見やうといふ手段を失ふて大に失望されました。そして一方ハリスの江戸入府の件は、伊勢守に代つて老中首席となつた堀田備中守に依つて許され、ハリスは將軍に拜謁することにならうといふ評判になつて來ました。兎角かういふ場合には流言蜚語が行なはれる者ですが、この時も「將軍は疳癖で、眸も正しからず、威嚴も乏しいから、拜謁の折は名代を立てるか、又は田安殿が身代りになるさうだ」といふ噂もとりどりに行はれました。公は之を聞いて益々一橋建儲の急務なるを感じ、熱心に運動を始められました。左内先生が福井から呼び寄せられたのは丁度この頃であります。

これから公は堀田備中守や久世大和守などの閣老に接近する策を講じ、或は大奥の機密を探らうと苦心されました。公の先代齊善侯の侍女であつた本立院といふのが、家定將軍の生母本壽院の姉である所から、これを呼んで大奥の樣子を探られた一件な

どは當時の大奥の樣子を知る一資料でありますから、一寸道草を食つて昨夢記事の一節を引用します。

公親ら（本立院に）何くれと問はせ給ふに、大奥にては西丸（儲君のことをいふ）などの事は何の聞えたる事も候はず、近ごろ御臺樣も出來させられ候へば、（島津齊彬の養女が家定夫人として輿入したのをいふ）程なく若君の御誕生もや候はんと、其の事のみ待ち申はべると申す。外國人登城の事はいかに申沙汰すかやと尋ね給ふに、されは唐人の事はいとけしからぬ事に申侍り、拜禮の折などは鏡を手の内に隱しものして、いち早く御影を寫し奉ると聞侍る。さる怪しき振舞する唐人をなど近づけ給ふにや、江戸へも立入れず、追返し給はんに、何事かあらん、御大名數多詰め給ひ、御旗本の衆中も夥敷に、こは何の爲めなるや、かゝる時こそ勇み立て打立切拂ひ給ふべき事なれ、女にしても口惜く片腹痛くいきどほろしく思ひ侍るなど、女に似氣なくいと猛々しく言ひ罵りたり。

かういふ無智な大奥が、非常な勢力を政局の上に持つてゐるのでありますから、建

儲問題も中々面倒なのであります。

春嶽公等がかく熱心に建儲問題に盡力せらるゝことは、夫となく世間に知れて來ることは當然であります。幕府の老中や役人などでも、腹の中では何か考へて居るのであるが、うかと口へ出すことも出來ず、左顧右眄してゐたのであります。所がその中堀田備中守がこの事に就て、何か或意向を漏らしたといふ事が公の耳に入つたものですから、公は九月十六日堀田閣老を訪ふて、始めて建儲の件について公の意中を語られ、やがて久世大和守をも訪ねて同樣の話をされました。その時の話の結果として、公の如き宗藩の有力者又は阿波守の如き將軍の近親から、儲君の事を申出でられることは、尤の事であるから、其件について公けに建議をなされはそれを機會に、老中共に於て協議を致しませうといふ事になりました。そこで十月十六日公は阿波守と連名で、公然建儲問題について建白されることになりました。

この間に一つ一橋擁立に對して暗い影がさした事があります。それは九月十三日を以て上田侯松平伊賀守が老中の列に加つたことであります。この人は水戸齊昭と仲が

悪い爲めに先きに罷免されたのでありますから、齊昭の子である慶喜擁立には勿論好意を持てない譯であります。これには公も非常に困られて、何とかして伊賀守に近接する方法は無いかといふので、中根雪江が當時江戸で鳴らした齋藤彌九郎といふ俠劍客と懇親であるからこの手で接近を計り、公は遂に伊賀守にも逢つて盡力を求め、一橋家の小姓平岡圓四郎の書いた慶喜の行狀を提出して、其推薦方を依頼される事に運びました。この平岡圓四郎は左内先生とは非常に親しく、互に赤心を披いて相談し合つた中でありまして、この行狀も先生から平岡に頼まれたのであります。

又一方大奥のことについては、島津齊彬の養女が更に近衛家の養女として將軍家定に輿入になつてゐますから、この方から一橋擁立の便を計らうとされました。齊彬はこの頃在國中でありましたが、特に腹心の臣西郷吉兵衛（隆盛）を江戸に出しました。西郷は十二月九日先生の許に來てから申してゐます。「わが藩公（齊彬）の胸中は春嶽公にも能く〳〵御承知の事であつて、力の限り盡したいのであるが、在國中で致方もありません。西丸の事はかねてから御臺樣（家定夫人）へも含めて置かれた事も

あつて、其方の便宜はよいのであるから、そちらの事は御力になる事が出來ませう。それで其方の周旋の爲にこの吉兵衛を遣はされたのであるのであるから、御家臣と思つて心おきなく御使下さい。又吉兵衛も我君とおもつて忠節を致せと仰付けられました」とこれから公は大奥のことについては西郷を頼まれた事が屢々でありますが、先生と西郷との親しかつた事は非常な助になつたのであります。

十七、建儲問題（其二）

次ぎに公は幕府の有司中權勢のある者を引いて、一橋擁立の勢をつけやうとされました。大目付土岐丹波守、目付永井玄蕃頭、鵜殿民部少輔、岩瀬肥後守等は皆一橋に心を寄せてゐるものでありましたが、勘定奉行川路左衛門尉聖謨は中々一筋繩ではいかぬ老練家で、一橋に傾いて居るやうではあるが、容易に本心を吐きませぬ。そこで公は先生に川路說得の任を授けられました。

安政五年正月十四日先生は川路の邸を訪ねられたのであります。その時の應答書を

先生自ら記されたものが一部殘つてゐます。

表座敷鴨居より第三疊目に席を占め、傲々然として 川路「何用にて御出候や」と申す。傍人これあり候故 左內「寡君の密命に候間御用にも差支へず候はゞ左右御遠ざけ願ひ奉り候其上にて申上くべし」と申す。承諾。因て謹んで御狀箱を兩手に捧げ、左內「御直書に候」と申す。川路「卿直書に候や」と申す。推戴、小刀にて封を切り合印を改め、拜誦。川路「扨々御美事なる御宇面々々々」と稱贊。川路「偖仰含候次第は如何」

川路はこの時六十餘歲、先生は僅に二十五歲の白面書生。傲然として先生に臨み、春岳公の直書を披いて「御美事な御宇面〳〵」と稱贊してゐる所など中々食へない老爺であります。

さて先生は公の思召を述べて、天下の爲に川路の盡力あらんことを求められましたが「吾々は斯る大議に關係すべきでない。君公の御盛意は感激に堪へぬが、御荷担致すやうも御座らぬ」とて、水中の月の有りとは見えて手に取り難い語らひ振り、左內

先生も一寸困らせられたのでありますが、先生が入說の一策にもと、公に願つて用意しておられた御書下げを出して、話を進められました。その御書下げといふのはこれです。

左衞門尉儀は深く國家の御爲は存居候へ共、彼人周密圓熟にて嚴しく形迹を避候氣味これ有義洞察致居候。若し此一件に付容忍時を待つ可し云々樣の語氣これあり候はゞ、彼の實心にはこれ無く候間、痛く辨析致し、彼の實心秘蘊推して詰問申すべき也。

此義只今心付き候故書き下げ之を遣はす。

それから天下の急務と天下の御爲といふ事を主として、急務を知りても、御爲と心得ても、默して居るのが有司の本意なるやと、ぐん〳〵理づめで數時間の討論をやられた所が、流石の川路も到頭屈服して、然らば及ぶ限り盡力致しませうといふ事になつて、請書を書いて先生に出しました。その中にかういふ文句があります。

左内は初見候へども辨論理をつくし、審詳なる事實に別段なる事と恐ながら感服に

て、存寄の趣十分に御受の義左内迄申上候へとも云々。

この時先生は十二時頃藩邸へ歸られたが、春嶽公も寢ないで待つておいでになり、應對の次第を一々聞かれて、左内ならでは出來ない事だと喜ばれたのであります。

その翌日正月十五日に、公が城中で川路に逢はれた所が、「昨夜は左内を御遣になつて御思召の程を段々伺ひましてかしこまりました。併し御役目上誓詞血判の事も御座いますから御思召通りに行き屆きかねませうが、成るべく努力致しませう」といつて「柝内には初めて對面を致したが、まだ若年であるのに議論の精確驚き入りました。餘りの辨析刀で切られぬ迄の事で御ざいました。斯ほどに押詰られ迷惑した事は是迄に覺えませんでした」と大に感嘆したといふ事であります。先生の舌はまさに正宗の刀であつたのであります。猶其の夕方公が備中守に逢はれた時も、備中守は「左内は廿四五ばかりで六七にはなつてゐまいが、辨論才智天晴な事で殆んと僻易致した、越前樣には善い御家來を持たれたものだと左衞門尉が殊の外賞嘆して居ましたよ」と公に語つたそうです。流石の左衞門尉も餘程參つたものと見えます。

かく迄春嶽公が懸命に奔走されましたが、こゝに決して安心の出來ない事があるのです。それは一橋派に對して紀州黨といふのがあつて、年は未だ十歳前後の幼弱ではあるが、血統からは將軍の最近親である紀州の慶福を擁立しやうといふのであります。之には彥根の井伊掃部頭はじめ幕府の中にも贊成者があり、特に紀州の付家老水野土佐守が賄賂請謁を行つて運動してゐたのであります。且大奧の方は何うかと申ますと、水戸齊昭の尊王心の厚い所から、彼は京都に媚びて德川を輕蔑する者であるとか、大砲を鑄たり調練をやるのは、德川に謀反の意志があるに相違ないとかいふ以前からの不評判がある上に、もしその子の慶喜が入つて儲君ともなり、將軍ともなれば、其の威力は幕府大奧にも及ぶであらうといふので、一橋派は大奧に受けないのであります。

そこへ外交問題がもつれて來て、通商條約の勅許が京都から出ないから、安政五年正月廿一日を以て堀田備中守等が上京するといふ事になりました。それが濟んでからとなれば時日遷延の中に形勢一變せぬとも限りません。それで夫迄に解決したいとい

ふので公や先生は極力奔走され、その結果幕府の閣内でも建儲の評議をなし、正月十四日將軍の臺聽に達するといふ所まで漕ぎ付きました。もし堀田備中守が「斷」の一字を以て一橋建儲を將軍に勸めたならば、或は事は決したかも知れないのであつたが、大奧の勢力に壓せられたといふ者か、人選は將軍の英斷に委せ京都から歸つた上でといふ事になつて、際どい所まで來て未解決に了つたのであります。

十八、堀田閣老の上京・外交問題

前に述べたやうに通商條約については、朝廷に奏請して勅許を仰ぐべしといふ諸侯の意見に隨つて、堀田備中守は安政五年正月廿一日、勘定奉行川路左衛門尉聖謨、岩瀬肥後守忠震その他の屬僚を具して、上京の爲め江戸を出發しました。

徳川家康が江戸に幕府を開いてから、老猾にして思慮周密な彼は、陽には朝廷を尊び、陰には之を抑へる方針を執り、天子及び公卿には學問藝能に專心遊ばすやうに仕向け、天下の實權を其掌中に握りました。そして京都を抑へこれを監視する爲に、い

ろ〳〵の方法を執りました。例へば公卿の中に武家傳奏といふのがあつて朝廷と幕府との間に交渉する役でありますが、その任免は幕府の同意を要することになつて居て、云はば幕府の傀儡同然であつたのであります。京都所司代は皇宮の警備京都の取締をする役でありますが、實は常に朝廷を監視する爲に置かれたのであります。かくて約二百年の間幕府の威權は朝廷を壓して來たのであります。

しかし時勢は何時までも一つ處に止まつては居りません。水戸學、本居宣長等の古學研究に依て、尊王の觀念は次第に培はれ養はれ、廣く蔓延して行つた一方に、幕府の政治も次第に沈滯し腐敗したものですから、その權威もいつの間にか衰へてゐました。外交問題は重大事とはいへ。何事も獨斷專行して來た幕府が、既に嘉永六年ペルリ渡來の時に於て、これを朝廷に奏せねばならぬことになつたのは、明に時勢の變を語つてゐるのであります。

かくて京都の事情も昔とは大違ひで、反幕府の空氣が極めて濃厚になつてゐました。第一、京都の公卿達は尊王論に刺戟せられて追々に自分達の地位を自覺し、多年

の壓迫に對して憤怨を洩すは此時とばかりに鼻息が荒くなつて來て、中々氣慨のある人もゐました。

第二、この公卿の背後に四五の大藩が姻戚關係又は何かの緣故を辿つて、窃に氣脈を通じてゐました。例へば水戶阿波の鷹司家に於ける、尾張薩摩の近衞家に於ける、土佐の三條家に於ける、井伊の九條家に於けるが如きでありまして、諸侯と幕府とが一致せず、互に背離してゐる有樣などが能く公卿の間に知られたのであります。

第三、王室家（勤王家）と稱する書生輩が、潛に公卿の間に遊說して入智慧したり煽動したりしてゐました。彼等は有爲の才を懷きながら、志を得ない連中でありますから、その言ふ所は自ら危激無責任に流れ、攘夷を唱へ、幕府を苦めやうとした事は當然であります。

堀田備中守は京都の情勢を觀測する上に於て大な見當違ひを致しました。幕府の老中首座―今日で云へば內閣總理大臣が幕府の威光を背負つて京都に乘り込めば、公卿達を威壓することは何でもあるまい。外交の事は世界の事情に迂遠な彼等に分らう筈

がない。自分と倶に、智謀辨力兼ね備はれる川路岩瀬等で說破することは容易であらう。まかり間違へば、黃金の力で貧乏な雲上人を緘口せしめることも易々たる事であらうと考へたらしいのであります。出立前春岳公に向つて十日程で始末を付けて歸府致す積だと公言した事で見ても、事態を極めて輕く見てゐた事は明了であります。

今や京都が本舞臺になつて、政治の中心はこゝに移りました。宮廷、宮廷を周ぐる諸公卿、公卿の家臣太夫、それ等に取り入つて遊說する志士、及び幕使の一行等が萬字巴と入り亂れて活動することになりました。且問題は外交事件でなくして、建儲問題も亦一所に移つて來ましたから、開國と攘夷、一橋と紀州とか混がらがつて、非常な紛糾を見るに至りました。左內先生もこの中に交つて大活躍をされるのでありますが、それは後に讓つてまづ外交問題に關する朝幕關係を簡單に述べませう。

堀田閣老等の一行は二月四五の兩日中に相前後して入京し、本能寺に宿泊し、同九日初めて參內し、小御所に於て天顏を拜し、傳奏を經て通商條約について勅許を乞ふ旨の一書を奉上しました。孝明天皇は頗る英明な御方でありまして、外交問題に就て

は痛く御宸念あらせられ、公卿の意見をお召になりました。所が、攘夷論が盛でありまして二月廿三日議一決し、廣橋東坊城の兩傳奏及議奏が本能寺へ來て備中守に、條約の一條に就ては　陛下にも非常な御心配である。且極めて大切な事は國内人心の一和であるから、三親藩以下諸侯の本心を知りたいとの御思召である。今一度幕府から諸侯の意見を上書させて天覽に具へよ」といふ命を傳へ、その外數條の御質問がありました。

備中守は御質問に答へ、御命令は直ちに幕府に傳へましたところ、三月朔日に松平伊賀守等三老中の連署で、「人心協和に就て宸念あらせられるは御尤であるが、此義に就ては幕府は如何にとも引受けますから、御安心あるやうに」との將軍の旨を傳へて來ましたから、備中守は之を朝廷へ轉奏しました。所がこの高壓的な答奏は却つて公卿達の感情を害したのであります。

この時公卿の間にも硬軟の兩派があつて相鬩ぎました。時の關白は九條尙忠でありましたが、鷹司政通は前關白で、その子輔煕は右大臣でゐましたから、威勢中々盛ん

で相拮抗してゐました。而して前者は反幕府派で後者は親幕派に傾いてゐました。猶その外に青蓮院宮尊融法親王（後の久邇宮邦彦王）右大臣近衛忠熈、内大臣三條實萬等の錚々たる攘夷派が御座いました。

然るに、その中鷹司と九條とは硬軟其地位を代へることになりました。これは九條の方へは井伊掃部頭の謀臣長野主膳が入說し、その家臣島田左近と相結んで關白を動かした爲めであります。之に反し鷹司は同家の侍講三國大學と諸大夫小林民部（筑前守）が直諫した爲めに豹變して正論となりました。卽ち今や九條關白の所論は段々因循となり、幕府に於て人心調和の責任を負ふ以上は、萬事關東に委任あるやう勅答を下さるやうにと努めたが、公卿達は多數關白の邸に押掛けてまで强硬に反對し、遂に青蓮院宮、三條內大臣、中山大納言忠能の三人が海防掛となり、滿廷攘夷派の有に歸し、三月廿日堀田備中守は次の勅答を拜しました。

墨夷（米國）の事、神州の大患、國家の安危に係り、誠に容易ならず神宮を始め奉り御代々に對せられ、恐れ多く思召され候。東照宮以來良法を變革の義は、闔國人

心の歸向にも相拘はり、永世安全量り難く、深く叡慮を惱ませられ候、尤も往年下田開港の條約容易ならざるの上、今度假條約の趣にては、御國威相立ち難く思召され候、且諸臣群議にも、今度の條々殊に御國體に拘はり、後患測り難きの由言上候。猶三家以下諸大名へも台命を下され、再應衆議の上、言上あるべき旨仰せ出され候事。

結局條約の勅許なく、もう一度諸侯の意見を徴して言上せよとの事であります。備中守は上京以前にハリスと約束をして、三月五日を調印の期としてゐましたが、既にその期限を過ぎても勅許を得ず非常に困難に陷りました。それで何とかして幕府獨斷の口實を作りたいと苦心しましたが、朝幕の間には大きな溝が出來て了つたのですから、今や如何ともし難く、滯京約二ケ月の後四月五日江戸に向つての歸途につきました。

十九、先生の京都に於ける運動

堀田閣老の上京前、春嶽公は何うも京都の風雲が穩かならず、幕府の對外處置につ

いても評判がよくない樣だといふことを聞かれて、幸ひ三條內大臣（實萬）は土佐侯山內豐信の舅君に當り、賢明の聞えある人だから、誰か一人腹心の家臣を上京させて江戶の事情を話し、朝幕間の縺れないやうに心配して貰へないだらうかと依賴されましたが、土佐侯の方には恥しながら然るべき家臣が居ないから、越前から誰か上京させては何うか、三條家へは十分便宜も計らはうといふことでありました。之には矢張他に適任がないので左內先生を派遣されることになりました。併し世間の聞えもある事ですから、表向きは航海術原書取調の爲め大坂へ出張を命ずるといふことにして、先生は正月廿七日橫山猶藏、溝口辰五郎（加藤斌）を引連れて江戶を出發され、二月七日桃井伊織の變名を以て京都に入られました。

讀者諸君、一つこゝで想像して御覽なさい。今より七十年の昔は電信電話などもなく、新聞紙といふ者もありませんでした。江戶と京都との間の往復は片道普通十日急飛脚で三日半を要しました。こんな時代に於て、江戶に居た者が勝手の違つた京都に來て直ぐに事情の分らう筈はありません。朝廷の大奧は何んな御樣子なのであらう。

天皇は何んな御方で入らせらるゝか。公卿さんの人物や意見は何んなであらう。誰の家には誰が出入をしてゐるか。何んな風說何んな噂が立つてゐるか。王室家と稱する志士連は何んな事を唱へてゐるか―かういふ事を能く承知しなければ遊說策動の道がありません。そこで先生は横山猶藏や後に福井から呼寄せた近藤了介等を使つて情報の探索をさせられました。江戸から京都の事が分らぬと同じ樣に、京都の公卿さんや書生輩にも江戸の樣子が分つてをりません。例へば春岳公の事なども、一部では幕府同樣の因循家で、西洋沈醉派だといふ風に考へられ、隨つて左內先生が開國說を唱へられると、幕府の廻者のやうに見られたといふ有樣でありました。それから公卿さんの邸に近寄るにしても、諸太夫の中には貪欲で片意地な人が居るから、相當の賂もせねばなりません。又其出入には密偵も居ますから、餘程警戒をせねばならないのです。先生が江戸に居られた時は、松平越前守といふ背景が物を云つたのでありますし、相談相手としては中根雪江といふ老熟な人もゐたのですが、今や孤劍百里の外に使して、獨力君命を果さねばなりません。その苦心その多忙實に容易な事ではありま

せん。而かも先生は滿身の智謀を傾け、畢生の雄辨を揮ひ、死ぬか生きるかの慘苦を嘗めて苦戰されたのであります。先生の一生の中、この京都に於ける二ヶ月の活動ほど目醒しい者はありません。その間に於ける京都から江戸への報告は、先生が各方面を探索して如何に形勢を揣摩されたか、如何に先生が公卿等の人物を洞察されたか、また如何にその雄辨を以て各方面に說入されたかを知るに足る興味ある者ですが、此等を載せてゐては餘り長くなりますからほんの大體に止めて置きませう。

先生の入京の目的は、攘夷論の本山たる京都へ行つて、世界の大勢に迂遠な公卿さん達の蒙を啓き、幕府使節の爲に遊軍として力添をしやう。公武の調和を計り備中守が一日も早く江戸に返られるやうに計らはうといふのでありましたが、京都に入つて見られると、外交問題と倶に建儲問題もこゝこ移つて來て居ることを發見されました。それは前にも述べたやうに、諸侯の京都手入れでありまして、薩摩の島津齊彬は近衞三條の兩公に宛てゝ、「今日人心を纒めるには一橋慶喜を繼嗣とするにあるから、勅命を以て左樣に仰出さるゝやうに」と依賴するし、水戶の方からも鷹司の方へ屢々

内密に運動したのであります。而して之に對して、彦根の井伊直弼は九條關白家に取り入り、直弼の懐刀といふべき長野主膳が、九條家の臣島田左近と相結んで、紀州派の爲に劃策しつゝあつたのであります。

春岳公は一意建儲問題に盡力されて來ましたが、この問題で朝廷を煩す考は無かつたやうですし、左内先生も重に朝幕の疏通が上京の目的であつたのですが、外交問題と共に建儲問題も京都に於て論議されてゐるのを見ては、其儘にして止む譯には行きませんでした。その上京都は攘夷論の火の手が盛であつて、生じつか開國論など唱へると、却つて誤解を招く虞がありましたから、それよりも寧ろ一橋建儲の事さへ決つて了へば、諸侯も協和し、朝幕の關係も調和し、外交問題も自ら解決し易い。云はば外交の要諦は先づ内治に在りと考へられたものですから、專ら主力を建儲問題に傾けられました。

先生が上京される前に、土佐侯から三條内大臣及び同家の太夫森川因幡守へ宛てゝの直書を貰ひ受けられました。で、上京後直ちに三條家を尋ね、まづ因幡守の手を以

て三條公に說き入られました。先生が三條公に面會されたのは、二月九日が最初でありますが、その時の模樣を斯う在府の中根雪江に報告されてゐます。

「海外の形勢を詳しく御承知になつてゐますか、又何う御觀察でありますかと御問ひ致したところ、漠然たる御樣子であつたから、それでは御話が六ケしう御座います。先づ私から御話を始めませうと云つて、近頃露國英國が我國に垂涎してゐる有樣、米國の恐喝する事情など、大略申上げた處、一通り御合點が行きました。それから關東の樣子や幕府使節の人物評などが出て、さて結局外人打拂の御意見か和議の御積かと御詰問をしたところ、まづ當分の模樣を推測してからの事だと仰せられました。それで和議ならばます／＼戰備を修めなければならぬし、戰爭ならば先づ廟算を定むることが大切であります。漫りに戰爭々々と云ふのは書生の迂論でありますと申上げた所、何分三家々門の中に英傑があるやうに思ふ、其人が賴みだと仰せられました。それで追々一橋公の事を御話したところ、掌を拍つて其人を得たりと歡ばれましたから、その譯をお問したところ、暗に西丸（將軍繼嗣）の御諭に

移りましたゆへ、直ちにわが公が近來專らこの事をのみ心配して居られる事を詳しく御話したところ非常に賞賛され、其義は內實この表にても沙汰があるから、尙ほ周旋も致さうと仰せられました」

これはほんの大意でありますが、先生がその雄辨を以て入說された模樣を知るに足ります。

三條公に就て、先生は「御人品々格溫雅寬平、御年は五十六、御軀幹肥腴ならず候へ共亦甚だ瘦小にも候はず、先づ中人體に御座候。流石事慣候御方故、圓熟の狀餘りて、鋒角稜々恐るべき方は之無……併徹上徹下正論に赴かれ候御人には相違これなし云々」と評されてゐます通り、正しい人ではあるが勇邁果決の點は聊か乏しかつたやうであります。で、先生は屢々公の邸に出入し、隨分思ひ切つて直言もし激勵もされました。公も亦深く先生を信じ、或る場合には宮廷の內密迄も打明けて相談されたのであります。公も一橋建儲の贊成者となられた事は勿論であります。

公卿中の兩巨頭は、九條關白と鷹司太閤とで、この二人はそりが合はず、始の程は

九條が正論で、鷹司が幕府方であり、鷹司は幕府から賄賂を取つたといふ評判が立ち、孝明天皇も御直に御召寄せて御叱り遊ばしたといふ噂もあつた位でしたが、其後兩方の風向きが一變し鷹司が正論になりました。是は同家の侍講に越前三國から出た儒者の三國大學といふのが居て、同家の家臣小林民部と共に太閤の汚名を蒙られるのを嘆いて直諫した結果だといふことは前にも一寸述べました。この頃公卿の間には一橋も越前も閣老同様因循ではないか、西洋沈醉ではないかといふ風說が立ち、一方では紀州派は九條家に取り入つて公卿の中にも贊成者があるのを見ると、先生は大學と中根雪江とが舊知の間柄であるのを利用して大學に接近し、大學から小林に接近し大に春岳公及一橋の爲めに妄を辨じ、この二人を動かして遂に太閤を動かし、太閤も一橋建儲の爲に盡力することになりました。

青蓮宮尊融法親王は孝明天皇の御親任が厚く餘程英邁な方でありました。左内先生の人物評に「英爽慷慨中々不出世の御模様……この頃主上の御論は神州を夷狄に辱しめさせては相成らざる旨、特立して仰せられ候よし。此も宮の後綱大分これ有る鹽梅

去りながら世に知る人少し」とあるやうに、直き〱天子に御意見を申上げられる地位に居られました。で、先生は宮に接近せんと努められたが、宮は「越前（春岳公）は頼にならぬ」と大分御機嫌が惡かつたさうです。それでその近臣伊丹藏人に話込んで遂に之を說服し、それから宮樣の御氣嫌を直し、宮をも一橋贊成者たらしめられたのであります。猶先生は宮が攘夷論であらせられるから、少し外國の形勢を御了解になり、隨つて朝廷の幕府に對する態度の緩和するやうにと、川路左衛門尉を宮に面謁させるやう策を廻らされてゐます。これは川路が奈良奉行をしてゐた時、宮も同地にゐらして能く御承知の間柄であつたからであります。かくて先生は宮家にも信認されて、或時など「何か左內に策はないものか」と獻策を求められたことがあります。

斯く先生は三條鷹司青蓮宮に近づいて悉く之を說服し、一は公武の調和一は一橋建儲の爲に奔走されましたが、其間に幾多知名の士にも逢ふて辯論を試みられたのであります。春日潛庵なども其一人であります。此人は久我家の侍臣で相當に名高い儒者でありました。「迂濶の二字は此地（京都）の持病明確、春日讃岐守（潛庵）の如き

人物にても稍其氣習を帯居候」「此地（京）の模様六ケしく候へども唯譯なく打拂ひと申す論丈は防ぎ留め、第一其根元なる儒生輩盡く說倒いたし申候、春日も多分同意に落候得共、此は通商と申事嫌ひ申候」など丶雪江への書面にあるのに見ても先生がその識見とその才學と人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る底の雄辨とを以てして、何人をも心折し屈服せしめられたには相違ありません。潜庵が先生を評して

橋本左内初めて來り訪ふ年纔に二十左右眉目清秀進退應接綽然として見る可し去るに臨み目送して嘆じて曰く好男子是れ越前の木村長門守なり。

と云つてゐますが餘程敬服した事が分ります。

先生は元來頑健ではありませんでした。上京前江戸でも病氣をされましたが、上京後も亦病氣に罹られました。「二月十七日朝より廿一日迄枕に伏す、精神恍惚、頭重く食味なし、發熱下痢腹痛攣急」とありますから可なり重い病氣であつたやうですが、この病弱の體軀を提げて、必死の活動をされました。我々はその精力の絕倫、報公心の旺盛を看逃してはなりません。

かくて先生必死の運動その功を奏し、鷹司、三條公等の盡力に依て早く建儲をなすべしとの勅諚を下され、その中に英傑、人望、年長の三條件を加へられる段取になつたのであります。この三條件は先生の建策に出たもので、これに宛て篏まる人は、一橋慶喜の外に無いのであります。然るにこゝに猛烈な反對運動がありました。それは前に申した井伊の謀臣長野主膳の九條關白入說であります。主膳も雄辯才略兼ね備はつた男で、外交問題に就ては左内先生同様、早く勅許があるやうにと備中守援助の目的で入京したのでありますが、建儲問題では反對の紀州黨でありまして、九條家は全く彼の擒となつて了ひました。關白を取込んだ事は非常な强味であります。即ち關白はその勅旨を傳へる段になつて專斷にも三條件を除き、そこに多少の色はありますが、結局幕府は誰を繼嗣に立てようが差支ない程度の勅旨を傳へることになりました。建儲に關して遂に內勅降下と迄は行つたのですが、肝心な所で殘念にも骨拔きになつたのであります。

先生は四月三日京都發、十一日江戸に歸着されました。

二十、先生と岩瀨肥後守の劃策

先生の京都運動中に、江戸では春岳公は中根雪江等と共に幕府の執政や大奥に向つて熱心に策動されましたが、その運動か盛になればなる程、大奥に於ける反一橋の空氣が濃厚になつて行きました。反對派から見れば、すべて此等の運動は彼等の大嫌ひな水戸老公の大陰謀と見れぬこともありません。將軍は一定の見識のない人ですから何うにでもなるとしても、將軍の側近者は一橋反對で固まつてゐます。特に將軍の生母本壽院は、もし一橋が西丸に立つことにならば、自害すると迄云ひ出したのであります。

そこへ幕府の政局に突然一つの彗星が出現しました。四月廿三日を以て彦根の井伊掃頭守直弼が大老に任ぜられたのであります。云ふ迄もなく彼は紀州黨の中心人物であります。而して幕閣中、一橋に心を傾きかけて來た堀田備中守は、京都の失敗から頓に其勢力を失墜して口が出せなくなり、春嶽公には一橋贊成のやうに見せ掛けてゐ

た松平伊賀守は、寝返をうつて紀州黨になつて了つたから、一橋派の旗色は日に非なりでありました。

春嶽公は一橋派の諸侯及び幕府の有司等と氣脈を通じて、猶あらゆる策謀を運らし、あらゆる運動をされましたが、此等は凡て省略してその運動の一として玆に先生と岩瀬肥後守との關係について少し述べませう。

岩瀬は幕府の有司中で出色の傑物でありまして、才學あり膽氣あり、屑々として舊例故格に束縛され、灰色で誤魔化して行くやうな役人ではありませんでした。外國の事情にも精通してゐましたから、ハリスとの談判に當り、時々彼の度膽を拔いた立派な外交官でありました。彼は當時閣老始め幕府有司が、因循姑息大局を擔當するに足らぬのを嘆いて、一橋擁立を熱心に賛成し、その意見を老中の前に披瀝して、上官の御機嫌が惡からうが、そんな事に頓着する男ではありませんだ。左内先生が京都で奔走中、彼は備中守に隨つて滯京してゐましたが、建儲についての內勅降下には固より賛成であつたのです。その頃から二人は意氣相投合し肝膽相照らす仲となりまし

て、先生が歸府後直に（四月十三日）岩瀨の許を尋ねておられます。この時先生から面會したいと書面で問合はせられた返事に「此節賤恙、着坐甚六ヶしく、御出の節甚失敬の體にて御目にかゝり申すべく候間、兼て御承知下さるべく候。且諸事誠の別格に致度候間、御承知下されるべく候」と申してゐるのでもその交情を察することが出來ます。爾來岩瀨は外交の經過、幕府の內情逐一先生に報告し、先生も屢々彼の所に行つて議論されてをります。

岩瀨はこの時先生に春嶽公を推して宰輔（大老以上のもの）にしやうといふ計畫を打明けたのであります。昨夢記事に雪江は次の如く書いてゐますが、これは井伊がまだ大老にならず堀田がまだ歸府しない前であるからその積で讀んで下さい。

肥後守は「此節同志統一の建議には、第一西城へ賢明の君を建られ、次に宰輔を置かれ、閣老の上に立て事を執り議を決する人なくては、靜謐すましき時勢なるよしを申立てしに、閣老衆にも至當の議なりと聞請よくて、備中守の歸府を待居らるゝ次第なり。其宰輔の任は、尊勞ながら太守公（春嶽公）を措いて外にはあらず、

尤も御家柄と申し、御身柄と申し、御大老なんどゝいへる名稱を奉るべきにもこれなく、時々御登營ありて、御前にも御出あり、大疑大件をも御聽斷下されなば事足り申すべく、瑣細の事故を以つて累し奉候儀なんどは毛頭あるまじくこそ。政令盡く英明の儲君、賢徳の宰輔に出候はんには、如何なる難事たりとも行はれぬ道理は有るべからず。先づ此二大件を定めて后、京師の御扱ひ夷狄の御處置等も、此條理より立ち行かでは、上下人心の歸向も定りがたくて、寧謐すべき見込更になし。已に傾覆せんとする徳川の御家の維持挽回なすべき大機會、この策より善きはあらず、十分決定して此節專ら廟算中に有るなれば、御歸國なんどの事は思ひよらず（此年は春嶽公歸國の年番に當る）賢勞は恐れ入候へとも、太守公の倚賴なくては、たとひ西城立たせられ候ても何の詮かあるべき、西城立たせられ候上にて、宰輔を任ぜらるゝは、正理公論第一等の上策なるべきものを」と、勢ひこふで申さる故、左内も夫れよからんと迂濶に雷同すべき事にもあらねば、寡君否徳と辨論に及ばんとせしかど、肥州ものをもいはせず「其臣としてしか云はるゝは何の珍しき事

かはある。別に天下を治る策ありや、別に宰輔に任する人ありや、申されよ承らん」といへる勢ひなる故、左内も遂に辭屈したりと物語れり。總して、肥州は才幹智略當世の選にて、雄辨懸河のごとく、しかも襟懷洒落にして小節に拘はらざる度量ある故、左内をも入幕の賓とかいへる振にて、燕室に引入れて、眞率にかゝる重大の議をも申出され、其他方今東西の形勢につきて種々の議論に及ばれしとぞ。

春岳公を總裁に推立てやうといふ説はこの頃一橋派の間に起つてゐたのです。慶喜などは餘りに事が面倒であるから儲君に立つことを好まなかつたが、越前が總裁にでも出るならなつても善いと考へることになつたので、その家臣平岡圓四郎なども專ら此説を唱へてゐました。而して岩瀬は幕府内に於て熱心にこの説を力説し殆んど一身を投げ出してかゝつたのであります。

かくなつては、春岳公も騎虎の勢衆望とあらば一橋建儲と共に自分も出て見やうといふ考になられたのです。左内先生も既に似よつた意見を持つてゐられました。先生の目から見れば當時何處を見まわしても難局を擔當する大人物がない。幕府の因

循姑息は齒がゆくてたまらぬ。一つ春岳公を推し立てゝ更始一新、兼ねての經綸を實行して見たい。かういふ考は當然起つて來べき事と思ひます。一橋擁立の動機は、公も先生も全く時局解決の最良策と信じられたからの事で、毫頭野心は無かつたのでありますが、事件の推移はこゝに到着したのであります。もしこの時この計畫が成功したならば、曩きに先生が村田氏壽に宛てられた書面にあるやうに、公武合體、擧國一致の內閣が成立して、譜第外樣の區別なく、陪臣處士のけじ目なく、賢材逸足はどしどし登用されて、明治維新の鴻業は十年も以前にその緒に就き、安政大獄などゝいふ陰慘な事件も起らずに濟んだであらうに、天運これを許さなかつたことは返へす返へすも殘念千萬な事でありました。

二十一、一橋派の慘敗春岳公の受譴

井伊掃部頭が大老となつてから、事態は急回轉をしました。

外交方面はハリスとの條約調印を延ばし〳〵したが、丁度この時英佛聯合軍が淸國

と戰つて之を破り、その餘威を以て數十の軍艦、わが國に殺到するといふ風聞がありました。ハリスは此機逸すべからずと、半は恐喝的半は忠告的に、早く米國と調印せねば、我國に取つて大なる不利を招くであらうと迫りました。で、掃部頭は六月二十日勅許を待たずして米國との條約に調印しました。彼は以前より朝廷に對して相當の尊敬を拂つたのでありまして、決して之を無視する考は無かつたのでありますが、是に至つて甚不利な汚名を荷はねばならぬことになりました。

六月二十三日掃部頭は内閣の改造を行ひ、堀田備中守、松平伊賀守を罷めて太田道醇（掛川）間部下總守詮勝（鯖江）松平和泉守乘全（西尾）を老中としました。

この日一橋慶喜は登城して無勅許調印に就て猛烈に大老及老中を責めました。そして其の翌二十四日水戸齊昭父子、尾張德川慶恕及び春岳公の所謂押掛登城となりました。この日公は井伊をその邸に訪ひ、ついで登城して水戸公等と城中に會はれたのですが、井伊邸に於て公は先づ勅命違背について大老を責め、次ぎに建儲問題に及ばれたところ、大老から明日愈々發表の運びになつたと聞かれて公は「それは多分紀州で

あらうが、京都では一橋をと沙汰されたやうにも聞いてゐる。條約調印の一條でも御逆鱗の時節何も急いで發表にも及ぶまい。條約問題が落着してからでも遲くは無からう」と強く談じ込まれた。その後は昨夢記事に斯う書いてあります。

此事は掃部頭甚だ不服にて、すでに明日ともなりたる事の如何にかはなるべき。紀州殿立たせられ候とて、京都において何の障りか候べきと强辨せらるゝ程に、時移りて既に登城の刻限になれる由、近習の者より申出たりければ、掃部頭殿今日はこれ切りにて御斷りに及び候と申され、坐を起ちて引き入らんとせらるゝ故、公は掃部頭殿の袴の裾を無手と握んで押居へ給ひ「よし御登城の刻限になりたり共、唯今申出たる事は明日に逼りたる事に候へば、今日を過しては何の甲斐も候はず、此處にて聞屆け給ふまじきならば、余も登城して營中に於て討論に及び申すべきか」と申させ給ふに「夫は御勝手次第なるべし、今は叶ふべからず」といひさま、振り拂つて引き入られたり。

それから公は登城して水戸公等と逢はれました。烈公は將軍に直接謁見して井伊を

免黜しやうといふ勢ひでありましたが、その目的を達せずむしろ失敗に終りました。

かくて公が多年心力を盡された一橋擁立の運動は愈々大詰となつて、其翌廿五日紀州の慶福が儲君たることが發表されました。この慶福が其後間もなく家定の後を承けた十四代家茂將軍であります。建儲問題は一寸考へると徳川一家の後嗣問題のやうでありますが、當時天下益々多事で、外國の事ある上に幕府と朝廷、また幕府と諸侯との間が漸く背離しようとする時であつたから、公武合體擧國一致、以て國難に當りたい、それには是非賢明にして衆望ある人を中心に立てねばならぬといふのが春岳公等の主張であつたのです。然るに數年寢食を忘れて奔走された功なく、苦心空しく水泡に歸しました。公や先生や中根雪江等の胸中は如何であつたでせう。

井伊大老は反動政治家でありました。保守的思想の持主でありました。今や公卿諸侯がのさばり出し、草莽の處士輩が天下の政治に嘴を容れ始めたのを見て、これを抑壓し、幕府の權力を獨斷專制の古へに復さうと考へました。この見地からすれば水戸、越前などは將軍の廢立を議し徒黨を作つて陰謀を企てたと見える筈です。彼の暴

壓政治の第一着手はまづ押掛登城の諸侯に加へられ、七月五日尾張慶恕、水戸齊昭に隱居愼を命じ水戸慶篤、一橋慶喜の登營を止め、同時に春岳公も隱居愼を命ぜられ、糸魚川から松平日向守が入つて藩封を繼ぐことになりました。

先生は是迄公の機密に參して、輔佐して來られましたが、今や異數の殊遇を受け水魚も啻ならざりし公の嚴譴を蒙られたのを見て、萬事休す、靦然として生き永らうべきでないと中根雪江と倶に自刄の決心をされたのであります。所が公は直に之を察して次のやうに親書を賜はりました。

是迄の忠誠感服に候。家臣罪を蒙り候に及ばざる段は國家の幸甚、尙彌々任重く候間後來の處も申談度卒爾之義これ有るに於ては我を見捨候也。

先生は痛く感激し、この上は死を以つて雪寃の爲めに心力を竭さうと決心されたのであります。

二十二、先生の幽囚と處罪

井伊大老はその高壓の手を段々のばして行きました。一橋派に贊した幕府の有司はつぎ〱に左遷され所罰されました。禍は同じ派の諸侯に及び公卿に及び、公卿の家臣、志士なども追々に捕縛されました。

安政五年十月廿二日夕方町奉行の屬吏數名が、突然常磐橋邸内なる左内先生の長屋に亂入して家宅搜索を行ひ、文書類を押收して行きました。この時機密書類は具足櫃の中に藏めてあつたので押收を免かれたさうです。その翌二十三日また捕吏が先生の居に現はれて町奉行石谷因幡の廳に引き去り、瀧勘藏なる者に御預といふことになりました。この捕手が來た時先生が逃げやうとされたといふ噂があつたものと見えて、其事を後に先生が聞いて左の一律をよんで居られます。

幽囚甘就是微忱。誰道途窮竟作擒。奉母雖憂虧慰養。爲君偏願掃愁霖。
盡忠全節身無恥。懷古傷今悶叵禁。豈費呶々向流俗。皇天后土諒我心。

先生は藩公の禍に罹かられた時に自分も共責を分つて嚴譴に遭ふべきものと覺悟されてゐたのであります。故に「幽囚甘んじて就く是れ微忱」と云はれてゐます。「皇天后土わが心を諒せん」の一句に至つて、その宗教的信念とも云ふべき高朗な心事を窺ふ事が出來ます。

幽囚中の先生は、是迄の多忙に似ず閒暇を得られましたから、讀書吟詠、以て幽懷を伸べ心鏡を磨かれました。中根雪江に宛てた書面（安政六年正月十五日）の中に、「蘭書でこの頃大に得る所があつた。航海の書物で帆や纜や碇などの運用から、停泊の規則まで書いた最新の著述があつて、三間舍幽囚の身も、萬里の雲天を驅けてゆく心地がしてをる。其他測量書の簡明なものもあつて、他年の渴望を達し得て愉快に堪へぬ」とあるのを見ると、蘭書なども熱心に讀まれたのであります。

而かも猶其の間に、明道館に於ける蘭書の買入のことや、春岳公の居室の天井に貼る世界大地圖の製作のことや、藩の產業振興などについても、いろ／＼心配をされたのです。

併し明暮先生の心に懸つた者も、春岳公のことと鄕里に於ける母上のことであつたに相違ありません。屢々母上に書面を送つて慰められてゐますが、その書中にまた何とかして君公の寃罪を雪ぎたいといふ至情が顯はれてゐまして、假名書きのやさしい手紙の中に、母を慕ふの孝情と君を思ふの忠心とが織り出されてゐまして、讀む者をして覺えず淚を催さしめるのであります。つぎにその二三節をあげます。

何事もお國にておぼしめすよりは、事輕に御座候あいだ、かならず〳〵御しんつうくだされまじく候。たゞかれこれと長引き、これには困り申候へども、今度のことよくわかり候へば、恐ながら、かみの御ためにもよろしかるべくと、日々たのしみおり申候（安政五年十一月）

笠原（白翁）へもよろしく、先度は養生のこと氣をつけくれ、忝く存申候。まい日槍をふり、運動いたし申候。中々上の御あかりたち候までは、病ぐらいは出て申さぬと、御申下されかし（同上）

いくたへも宜しく御申下されかし。小右衛門様に別に御返事は申あげず候。だんだ

ん御親切のところは深く御禮申候むねよく〳〵御申下されかし。おばさまよりもまことに御親切に仰下され、その上神々様にまで御祈願下され候こと、何とも恐多きことに御ざ候、何分にも神佛の御たすけに、私のことよりも、早く中將樣（春岳公）御あかりのたたち候こと願ひたきことに御ざ候（安政五年十二月）

安政六年八月廿八日幕府は水戸老公に水戸表へ永蟄居、一橋慶喜に隠居愼を命じ、岩瀬肥後守、川路左衛門尉等を所罰し、安島帶刀、鵜飼幸吉、小林民部等に切腹、獄門、遠島等夫々斷獄の沙汰があつた時にも、その事を母上に報じ、

さだめて右の事にて、またいろ〳〵御心配もかけ候やうな風說も御ざ候へども、かね〳〵申あげおき候通り、私ことは上の思召の外のことには、少しもかゝりあい御ざなく、その所は公邊にても只今にてはよく御わかりに相成候御ことゆへ、決して右等のことにくいあいは毛ほども御ざなく候。少しも御あんじ下されまじく候。いづれ私共の事も遠からぬうちにはらちあいもつき申すべく、さ候へばかみの所も御ひろくならせられ候御義と日々待居申候。

と母上に安心を與へてゐられます。併し私は右の處分があつた時に、先生は多分自分も同程度の嚴刑に處せられるだらうと覺悟されただらうと思ひます。而かも母上が心配されぬ樣に其心を慰められてゐる、其心事まことに悲しむべきではありませんか。

かくて安政六年一月八日町奉行で第一の取調べがあり、二月十八日、三月四日、七月三日、十月二日と都合五回の糺問がありました。先生は春岳公が國家の爲め宗家の爲めを思ふ忠誠の心から、賢明にして年長の一橋建儲に熱心された公明な心事を明かにして、自分もその旨を受けて奔走したのであるといふ次第を包み隱さずいつも明快に辨ぜられ、その堂々たる態度には幕吏も避易したやうであります。藩の役人等は餘り先生がずば〳〵と春岳公のことを陳述されるので、禍が公に及ばんかと心配したさうですが、先生は幕府の誤解をといて、公の公明正大な心事を闡明しその寃を雪がんと努められたのであります。第五回目の糺問の後傳馬町の獄屋に下され、十月七日五手（寺社奉行、町奉行、勘定奉行、大目付、目付）の判決は遠島の刑に處する事であつたのですが、大老老中の評定で更に一等を重くして死罪と決定されました。

申渡狀の內容は要するに「一橋を儲君とすることに就て、藩公より京都に於ける運動を命ぜられた時に、重役などにも話して差止むべきであるのに、上京して鷹司家三條家に出入奔走したのは、公儀を憚らざる致方であるから、處罪申付くる」といふに在ります。今日から見ますと、こんな事で死罪に處するなどゝは餘りの事と考へられますが、井伊大老などは斯かる暴斷に依らねば、幕權が恢復されぬ者と考へたのであります。

先生は獄中既に死を期せられたやうで左の詩があります。いづれも人口に膾炙してゐるものです。

苦寃難洗恨難禁。俯則悲傷仰則吟。昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心。

二十六年如夢過。顧思平昔感滋多。天祥大節嘗心折。土室猶吟正氣歌。

猶先生就刑の前日書かれた密書―實はこれが絕筆となつたのです―には「唯同藩の罪を一人に引かむり候鹽梅にて、獨斷にて取計らひ諫めも申さず、大臣へも申聞けずと申すところにて、私へは重く參り、口書も勝野、飯泉より重く御座候。迚も長き間

はこれなかるべく候まゝ、萬事宜しく此迄公私の事半途になり居候事共、吳々宜願奉候……私身上の事は必ず御案じ下さるまじく候。相替らず平和に罷在、詩などにて樂み居申候」とありまして、覺悟のほどが明かであります。

安政六年十月七日、草枯れ霜白き小塚原の刑場に於て先生は春岳公より賜はれる時服を着用し、從容として獄吏の刀下に二十六歲の生涯を斷たれました。この日賴三樹三郎、飯泉喜內等も同じ處で死刑に處せられたのであります。

この獄中には吉田松陰も繫がれてゐたのですが、室が違ふ爲めに相逢ふことが出來ませんでしたが、先生と同房にゐた勝野保三郎（幕府の士）が後に松陰と同居することになり、その話を聞いて「留魂錄」に

余勝保の談を聞いて、益々左內と半面なきを嘆ず、左內邸居に幽囚中、資治通鑑を讀み、註を作り、漢紀を終る。又獄中教學工作業の事を論ぜし由、勝保余に之を語る。獄の論大に我意を得たり。益々左內を起して一議を發せん事を思ふ。嗟夫。

と書いてゐます。兩雄遂に相見ゆるの期なく、十日を經て松陰も亦死罪に處せられまし

た。松陰が感心した獄制論と云ふのは、今の獄中の生活では罪人は益々悪くなる計りであるから、獄中に於て罪人を教導感化すると共に労作をさせ、その賃金を貯蓄させて出獄後、生計を立てさせねばならぬ事を説いた者でありまして、今日の獄制が即ちその通りの方針を行つてゐるのであります。先生がその行くところその處するところその臨むところに應じて立てられる意見の卓絶たゞ恐入る外はありません。

先生就刑の日、藩士長谷部恕連が春岳公の内命で遺骸を収め、小塚原の回向院に埋葬して「橋本左内墓」と題する碑を建てたのですが、刑人の墓を立てゝはならないと云つて幕吏が倒して了つたので、長谷部等は別に「藜園墓」の三字を刻したものを建てました。藜園は先生の別號であります。その後井伊大老が仆れ先生の寃が解けてから、墓石も遺骸も福井善慶寺橋本家の墓地に移されましたが「藜園墓」の墓石はその後また小塚原に移され、今も存してゐる譯であります。

二十三、雜話

先生の人物に就ては藤田東湖も賞め、西郷隆盛も賞め、春日潜庵も賞め、川路左衛門尉も感服し、岩瀬肥後守も感服し、武田耕雲齋も「東湖以後また東湖あり」と推賛してゐます。こんなに多くの偉人から推服された人は尠いやうであります。特に西郷の如きは「才學器識吾輩の及ぶ所ならんや」と云つて兄事した位でありますから、絶群の人であつた事は明瞭であります。

學問で云へば、先生は立派な醫者でありました。立派な蘭學者でありました。漢學は何分年が若かつたから深遠と迄は行かなかつたでせうが、經史の大體に通じ、春岳公や土佐の容堂公等の前で侍講がつとまる位ですから、相當に出來た事は云ふ迄もありません。詩も出來れば文も作られました。尤もこれ等も短生涯のことではあり、平生多忙であつた爲に述作多數はありませんが、詩作の中には律もあり長篇もあつて、詩情の饒かなのを見ることが出來ます。先生の書簡文に至つては簡勁にして能く委曲

を盡し、時に警句あり譬喩あり、讀んでゐる中に先生の雄辯を聞いてゐるやうな感が致します。

先生は口も八丁手も八丁の人でありました。さういふと才氣煥發聊か輕薄の氣を帶ぶるやうに解せられますが、そんな安つぽいものではなく、底力のある雄才でありました。その達辯雄辯は出會ふ所の人をして信服せしめずんば已まない魅力を有つてゐました。能く言ふ者能く行はずとも云はれてゐますが、先生は實際的手腕に於ても、その辯力に劣りませんでした。僅に廿三四歳にして明道館の學制を立て、藩風を振作されたのでも立派に之を證據立てゝゐます。併し何よりも卓出してゐたのはその頭腦であります。その尖鋭さその靈慧さは殆んど天才的でありました。この天稟に加ふるに、常人の及ばぬ勉强を以て、東西の學問を兼ね合せられたのでありますから、その識見の遙かに時流に超越したのは當然のことであります。例へば對外意見にしましても、當時横井小楠、佐久間象山のやうな開國論者がありましたが、先生の如く徹底して居らなかつたやうであります。

先生は熱血男兒と云ふよりは理性的な人でありました。兎角理性の勝つた人は稍もすれば冷酷に流るゝ弊がありますが、先生はまことに温情に富まれた方でその弊がありませんでした。母上に對する至孝の情は固よりでありますが、二人の弟に對しても、友人に對しても目下のものに對しても柔しい親切な人でありました。幸吉といふのを一時使用されましたが、これに就てその母上の所へ「幸吉まことに親切にいたしくれ候。よく〳〵御禮御申下されかし。洗濯などもたび〳〵いたしくれ、その上毎度毎度たづねくれ、まことに私大しやわせに御座候。昨日も大そうに雨ふり候なかに、遠方のところ二へんも尋ねくれ申候」と申送られてゐますが、かく親切を先生につくすのは先生の温情に感じての事に相違ありません。

先生は酒も飮まず、烟草も喫まず、妻も持たず、純潔な青年で終つた人でありました。その生活は清高氷雪の如くでありました。兎角英雄豪傑には私行上いろ〳〵な缺點を持てゐる者が多いのでありますが、先生は聖者の如く眞面目に生活されました。所が眞面目な人はまた世態人情に疎く、融通のきかぬ者でありますが、先生は酸いも

甘いも能く承知して、人情の機微を握んで居られました。京都の公卿の間に運動された時など、太夫家臣に取入るには相當の秘策を要したのですが、拔目なく要領を得て居られます。金も可なり撒かれたやうです。

先生は餘りに完全過ぎる程完全な人でありました。併しこれは眞摯な反省と修養とから來てゐます。先生は犀利な批評眼をもつた人で、その人物評はきび〳〵してゐます。之は先生が二十一史特に宋史などを好んで讀んで、人物の正邪忠奸進退行藏に就て講究された結果であらうと思ひます。餘りに明敏な人は、人を責め人に求むること急迫に陷る弊がありますが、先生にはかういふ點を常に反省されてゐたやうです。幽居中村田氏壽に宛てられた書中に

貴兄も私の見る所では風岸孤峭の習味が今少し脫けねばならぬ。世の人を一々自分の思ふ所へ引き入れる事は聖賢でも難しとするところ、まして御互では猶六ケしい。今一層從容包荒の氣量御思案ありたい。自分も近來まで此病が脫けず、先日から幽居中に前年中のことをふり返へつて見て反省してゐる。貴兄もちと超脫閑雅

の情をくみとつて、折々平心靜座して、名賢の奏議又は詠懷の詩作など御賞吟あるやう願ひたい。

とあるのでも、常に反省を怠られなかつた事がわかります。

先生は今日の語で云へば、民主的な考へ方の人でありました。繁文縟禮、舊例故格に拘泥する事は大厭でありました。直情徑行、直截簡明を喜ばれました。米國官吏が通譯と二人で江戶へ出て來た事を村田氏壽に報じて

偖萬里の波濤を凌ぎ、只兩人位にて侃々大都府へ罷出候は、その氣象勇邁想ひ遣られ、外國人ながら感服の至り、吾神州の泥々滯々、婦人女子にも及ばざる人物に比すれば其相距る幾何か。

と大に賞賛されてゐます。又先生の書かれた西洋事情書と云ふ者には

近來西洋各國では專ら政敎を修め、人民を撫育する事に努め、國王は僅十數人の御供で身輕に國內を巡遊し、人民の家に宿泊する由である。租稅も大約二十分の一位で、それも國王一身の營みには使はず、重に救荒禦災の爲に宛てるのである。國王

の居所も至つて手輕で詰めてゐる人數も二十人に過ぎないさうだ。

といひ

上下とも衆情に戻り公議に背くことをせぬといふのが根本の法律で、國政の大事はすべて衆議一同の上で行ひ、國王でも一人で吾意に任せ勝手には出來ない。學校の制度も特によく行屆き、政官も多く選擧によるのである。

と書いてありますが、封建の弊習が熟しきつて居た當時に於て、かゝる簡易にして自由な政治は、先生に取つて翹望の的であつたでありませう。故に先生がもし明治維新以後に生存されたなら、立憲政體の建設に對して大に努力さたらうことは疑ひありません。

先生には二人の弟があつて、仲を綱維といひ季を綱常といひました。綱維は始め兵學を修め、後ち醫學に轉じ、明治十年陸軍一等軍醫正にまで進んだのですが、翌十一年三十八才を以て歿しました。綱常は家業を繼いで醫者となり、明治五年獨逸に留學し、十年陸軍々醫監になり、やがて大學教授となり、軍醫總監になり、日本赤十字

病院長となり、醫學博士を授けられ、ついで男爵を授けられ、更に子爵を授けられ明治四十二年に薨じました。その閲歷の示す通り、明治時代に於ける醫界の泰斗と仰がれた人で、醫家としても勝れてゐたのは勿論でありますが、眞率剛正、權貴に阿らず、勢威に屈せず、而かも卑賤に對しては愛恤の情が深く、眞に國士の風格を備へた人でありました。子爵に關しても記すべきことは多々ありますが、皇室の御衛生に關する功勞は特筆すべき者であります。漏れ承る所では、昔から高貴な御方の拜診の場合には、玉體に直接觸れることが出來ないので、お脈を拜するにしても御召物の上から拜するといふ風であつたが、子爵はこんな舊慣を打破されたといふことであります。侃々諤々の人でなければ中々六ケしい事であつたのであります。大正天皇は御幼時御病弱で在らせられたが、其後御健康にならせられたのに就ても、子爵が誠忠を致されたやうに聞いてゐます。皇子皇女達が海岸へ御轉地のことも子爵の獻策によるのであります。特に大正天皇の皇太子として在らせらるゝ時、只今の皇太后宮を妃殿下として册立されるに就ては、一切の情實を排し、一身の利害得失を顧みずに、純醫

學上の立場から誠忠を抽でられたさうであります。今やその第一の皇子は今上陛下として卽位の大典を行はせられんとし、第二皇子秩父宮殿下は芽出度く勢津子姫との御婚儀を了らせられ、第三の高松宮第四の澄宮兩殿下も御健勝に渡らせられ、皇室の御繁榮は國民の欽賀して措かぬ所であります。左内先生が醫員を免ぜられて御書院番になられた時、綱常子に家業を繼ぐことを委囑され、子は勉强して其命に從ひませうと誓はれたことを前に述べましたが、先生の遺志は綱常子に依て顯揚せられ、先生歿後七十年目の本年を以て、陛下の御卽位を見るのも緣由なきにあらずと考へるのであります。

明治十八年有志相謀りて千住小塚原に先生の記念碑を建つ。重野安繹その文を撰す。聖上この擧を聞こし食され金百圓を賜ふ。春岳公左の歌あり。

國のためつくす功のあらはれて御代の光を仰くけふかな

皇國の御爲につくす功は千代も朽せぬこれの石碑

すてがたき命をすてし君が名はこの明けき御世にしらるゝ

附錄

緒方塾に於ける左內先生

啓　發　錄

先生の大經綸を開陳せる村田氏壽宛の書簡

緒方塾に於ける左内先生

この一文は昭和六年十月、大阪朝日新聞に連載したものに筆を加へた者であります。據所とした資料は是迄全く世間に知られて居らなかつたものであり、書生時代の先生を一層明瞭ならしむる者でありますから、此處に載錄することにしました。

新らしい資料　左内先生が緒方洪庵の門に入られたのは、正確な月日は判明しないが、嘉永二年の秋で、父長綱病氣の爲め退塾して歸鄕されたのが同五年の初らしいのです。すると先生十六歳の終りから十九歳の初頭に亘るので、在塾期間二年餘となります。この間に於ける先生の行動で是迄世間に傳へられてゐる逸話は二つあります。一は本書にも述べてありますやうに、先生が夜竊かに橋下に巣喰ふ乞食の中に行つて診察をしてやられたことであり、今一つは先生が或書林の主人と親しくなり、何時も其店頭で書物を借讀してゐられたが、或時その主婦が病氣に罹つたので、先生に治

療を乞ふた所が、幸に全快しましたので、主人はその御禮に何か御望は御座いませんかと尋ねた所、書店に掲げてあつた岳飛書の石摺の額を貰ひ受けられたといふことであります。この二つは如何に先生が志尙高朗にして學ぶ所に忠實であつたかを示すものでありますが、この度新しい資料を得て緒方塾に於ける先生の行動を一層詳にし、その面目を明かにすることを得ることになりました。それは在塾中の先生から在福井の笠原白翁に宛てられた九通の書簡と先生がその友宮永良山の歸鄕を送るの序とであります。(前者は白翁の孫笠原健一氏、後者は良山の姪宮永學而氏の所藏)今私はこの新資料に基いて話を進めたいと思ひます。

緒方塾—適塾の風景　緒方洪庵に就ては福翁自傳の一節を引いて、その輪廓を本書に述べて置きましたが、多少重複の嫌があつても、こゝに少しくその風景を述べて見ませう。

洪庵が大阪に出て瓦町に居をトし、蘭學塾を開いたのは天保九年のことで、その二十九歳の時であります。然るにその後門人が殖えて、手狹になつたから、天保十四年

(三十四年の歳)過書町へ移轉し、適々齋塾と名づけました。適塾とはその略名でありまして、現在北濱通三丁目三十番地に昔ながらの面影を止めて居るのであります。
適塾は挿入の寫眞で判るやうに(×)は二階の書生部屋であり、(※)の下が四疊ばかりのヅーフ部屋(ヅーフといふ字書が置いてある所)、その隣の(※※)が六疊で洪庵の居室でありました。二階の書生部屋は二十疊位の廣さであつたさうです。その頃の塾の樣子を窺ひ知るには福翁自傳の外に長與專齋の松香私志があります。專齋は肥前大村藩の侍醫で、明治政府になつて衞生局長を勤めた名家、嘉永七年（卽ち安政元年）に同塾に入門した人です。今こゝにその一部を拔抄しませう。
「この塾は適塾と稱へ、四方より來つて學ぶもの常に百人を超え、四時の輪講絶ゆることなく、當時全國第一の蘭學塾であつた。
輪講は學生を八級に分ち毎級月に六回の定めで、籤を採りて當日の席順を定め、その首席者先づ數行の原書を講じ、次席より問をかけ順次末席に至る一問毎に會頭、勝敗を判ち、勝者には白點敗者には黑點を附す、會頭は塾頭塾監及び一級生の人、

學級の高下によつてこれを分擔した。首席講義の役を卒つてその日の會を了す。それから一ヶ月間の點數を調べ、白點の最も多きものをその上席として、毎月席順を改め、三ヶ月續いて上席を占めたるものは上級に移る。（中略）

塾中疊一枚を一席とし、その內に机、夜具その他の諸道具を置き、これに起臥することゝて頗る窮屈であつた。就中往來筋や壁に面した席にをれば、夜間人に踏み起され、晝間燭を點じて讀書するなどの困難あり、しかるに毎月末席換へとて、輪講の席順に從ひ、上位の者より好み好みに席を取ることゆゑ、一點にても勝を占めたる者は次の人を追退けてその席を占むるを得るのである、……初學の內は冠詞、前詞などの外は一語も見識りたるものなく、片つ端から皆字引にて引出すことがあつたが、肝腎の辭書といへるは塾中只「ヅーフ」（即ちオランダ字彙で「ハルマ」といふ字典にヅーフといふ人長崎に來り和譯を附した書）の寫本一部あるのみ三疊敷許りの室を「ヅーフ部屋」と唱へて其處に備へ置き一册たりとも他には持出すを許さず、百餘人の生徒皆この一部の「ヅーフ」を杖とも柱とも賴むので立替はり入代

り、その部屋に詰め込み前後左右から引張り合ひ容易に手に取ることも叶はない。かくて晝間は字義の詮索も屆かないので、深夜に人なきを窺ひ字を引きに出かけるもの多く、「ヅーフ部屋」には徹宵の燈火を見ない夜はなかつた。」

當時の塾生活及び勤學の樣子が歷然たるではありませんか。

右の文中に長與專齋は四方より來り學ぶ者常に百人を超えたと云つてゐますが、この百人が皆塾中に起臥したわけでなく、通學者も少くなかつたでありませう。緒方家には今天保十五年甲辰孟夏から附け始められた門人姓名錄が保存されてゐます。これは過書町へ移つてからのもので、入門當時に自らその鄕國と入門の月日とを自署したものですが、中には後から書き足したかと思はれるもの、又は數名同筆のものなどがあります。半紙二百枚位のものに記名されてゐる總數は約六百五十名に及んでゐます。福井から緒方塾に入門した宮永典常が文久元年に記した知己姓名記といふものに、嘉永七年（安政元年）三月入門の筑後久留米の鶴田仙菴を筆頭として其以後の適塾入門者を列記してゐますが、私の數へた所ではその姓名の上に鄕國と入門年月とを記

入してあるもの百十七名、記入なきもの九十一名であります。この兩者を比較照合したらその數は更に正確さを加へるでありませう。それは兎も角、これ等門人の地方的分布についてざつと見た所では、全國各地に亘り、中國、九州、近畿、北陸が最も多いやうです。而して此等の人々がそれ〴〵郷國に歸つて、多くは醫業に從事し、または新文明の先覺者として一郷一國の文化開發に貢献したことを思ふと、私は緒方洪庵と適塾とに對して深甚の尊敬を捧げずには居られません。のみならず、その門下から政治軍事方面では大村益次郎（在塾中は村田藏六）大鳥圭介、佐野常民、花房義質、教育方面では福澤諭吉、醫學方面では長與專齋、戸塚文海、池田謙齋、足立寛等の錚〳〵たる傑物を輩出したるに於て益々洪庵の薫化力の偉大であつたことを思はねばなりません。而してわが左内先生も固よりその一人なのであります。

宮永良山の歸郷を送る序　宮永良山は名を欽哉といひ、（緒方の門人帳には勤齋とある）福井人で左内先生より七歲の長でありました、父の良旦は看山と號し、詩文を好み、漢方醫であつたが「西洋醫學の切實なるを察し、嘉永二年三月盟嗽禮服を着し、佛前

に進み、その所思を述べ、良山をして洪庵の下に入門せしむ」と宮永氏の家記に載つてゐますやうに、良山を適塾に入門せしめました。その入門の年月が正確に判りませんが、先生の送序に「今を距ること五七年前、余が友宮永良山笈を浪華に負ひ、贄を洪庵緒方先生に執り之に師事する者數年間云々」とありますから、年齢の上からは勿論、學問の上からも先輩であつたのです。右の送序は漢文でありまして、その日附は嘉永庚戌十月上澣とありますから、先生が十七歳の時入塾後一年經つた頃です。この一文は其頃の先生の漢文の力を知るに足るものでありますが、それよりも先生の見識の高く操持の堅きを證して興味ある者であります。その大意を申しますと、凡そ人の壽命は百年に及ぶ者は稀である。而して道は精微綿密、一日二日の思慮で之を究めることは出來ない。その上、人生十中の四は病氣や事故や遊事で空費して了ふものである。良山勉めよや」と云つて來て、

夫、世之學和蘭之方技術藝之徒、概皆無賴凡流之子弟、不至沈湎於酒、漁於婦女、狎般佚、習傲惰、而使制度斁倫常者鮮也。其大則不啻

毀其身體傷其髮膚、辱戮連及其父兄者亦間之有、良山其愼之乎哉、と述べ、「以上の一つだにあつても面目ないことであるのに、之を愧ぢ改めないならば犬豚の類である。何うして能く道の精密を極め天下の生民を濟ひ得ようぞ」と喝破されてゐます。當時緒方塾の學生中には粗放磊落快を一時に取るもの、或は淫蕩に身を持ち崩す者も尠からずあつたことが想像されますと同時に、先生が之を苦々しく思つて居られた樣子も窺はれます。

良山は後に半井仲庵、笠原白翁及び左内先生等と倶に福井に於ける蘭學の倡首となつた程の人で、私の幼少の頃、その從弟に當る私の父が屢々欽哉は豪ら者だつたと推賛したのを記憶して居ますし、送序の中にも「良山人となり銳烈才氣あり」と有り、宮永氏の家記に性佚蕩にして才氣あり、酒を好み客を愛し小事に拘泥せず云々」とある所から見ても一角の傑物で御座いました。併しそれ丈に適塾在學中は相當に發展した者とも思はれます。すると先生の送序は先輩に頂門の一針を與へたものでありまして、先生の老成振をこゝにも窺ふことが出來ます。

飯田柔平についての斡旋　先生が適塾在學中在福井の白翁へ宛てられた書簡九通は、いづれも月日はあつても年號の記入が無いのであるが、その內容及び他の事情から推定すると、皆嘉永四年卽ち先生十八歲の時のものに相違ないのです。此等の書簡を前後相照し綜合して見ると、その用向の主なことは塾長飯田柔平を福井藩に招聘しようといふ一件に關するものであります。

飯田柔平は周防下松の生れで、曩きに適塾の塾頭であつたが、少々放蕩をやつて不首尾となり、一旦鄕里に歸つてゐました。併し在鄕中に謹愼して身持も改まつたので、洪庵への歸參が叶ひ、再び適塾の塾頭になつたのです。然るに何うも洪庵の夫人八重子と折合ひが惡いので、一層關東に赴きたいと望んでゐましたが非常に窮乏して、旅費も無い所から、蘭學に熱心な福井藩に暫く厄介になつてその指導に當り、工面がついたなら東上したいとその衷情を左內先生に打明けて「君から御國の誰かに一つ話をしてくれないか」と相談があつたのです。

そこで先生は在鄕の同志笠原白翁にこの事を申し送られました。六月五日付の書面

には次のやうにあります。

「當地塾頭飯田柔平と申人、昨年より再度歸塾、塾頭勤居候處、師家令閨と少々不和之廉も有レ之、一向塾にも落付兼候。依て東武え越度樣子に候得共、當時赤貧、路費出來兼候故、進退甚窮り難義被ニ致居一候處、如何に被ニ思付一候哉、頻りに國元え參り度由小生に內談有レ之、右に付誰ぞ國元にて世話致呉候者も有レ之哉調らべ呉と被レ申候。小生も別に致方も無之故。賢兄え御賴み可レ申と返答致候」

「今度塾監澁谷良耳(肥前佐賀の人)加州え被レ參候故、定て良山氏方に止宿可レ有レ之、就ては右話も相生し可レ申其節可レ然御取計可レ被レ下候」

「(飯田)今度師家退塾は甚不敬之至に候得共、令內(緒方夫人)一向飯田を好み不レ申、每々先生え離間など有之候て先年行々東武えも世話致候て出し可レ申約定も有レ之候得共、迚も當時の勢にては右樣の事共にては無ニ御座一候。箇樣の事共逐一申立候得ば無ニ數限一事に候。何分郁藏分家仕候にても御察し可レ被レ下候。今度御國元え參り候上は、少々不滿意とて直に去り候樣の不義は不レ仕御國益に相成候樣の事業

相立候上にて、關東え誰君にても御世話被レ下候人之御助成を以發足可レ致候。都合に因り候ては三兩年も長く御國に滯留仕候ても不レ苦候」

右の文中郁藏といふのは洪庵の高足でその弟分となり緒方姓を冒した人です。洪庵夫人八重子は億川百記といふ醫師の女で、十七歳の時洪庵に嫁し、その頃五人の幼兒を擁してゐたが、此等の子女を育てながら、多數の患者の取扱ひから塾生の世話を燒いた人であるから、中々の確かり者であつたでせうが、洪庵の寛厚大量塾生の自由に任せるといふ風とは異つて、物矢釜ましい點もあつて、さきには郁藏が分家し、今は飯田が飛び出さうとしてゐるのでありませう。

飯田の話は何ういふ經過を取つたかと云ふに、七月二日付の白翁宛書面に「飯田氏一件御世話被レ下候旨被ニ仰下一、實に於ニ小生一大慶致候。卽直樣飯田氏え申聞候處、千萬辱旨に御座候」とあるから、白翁が世話を引受けることになつたのです。

その間に適塾の塾監（塾頭の次位）佐賀人の澁谷良耳が何か用事があつて加賀に旅行し、その途次發ねて知合の宮永良山方に逗留し、白翁が面會して話合ひをしたので、

事情が能く判り、遂に話が纏つたのです。そこで飯田が洪庵に北國行の御願を申出でる、洪庵は澁谷を呼び出して委細を聽き糺すといふ順序となり、何うしてそんな話が持ち上つたかと洪庵から其起因を問はれて、澁谷は一寸嫌疑を避け、「其邊は一つ橋本をお呼び出しになつて御聞取下さい」と答へたものですから、先生は洪庵の前に罷り出て澁谷や飯田に迷惑のかゝらぬやう釋明されました。

先生「飯田氏が北國行きに運びました次第は、かうなので御座います。昨年市川齋宮（福井藩に聘用された蘭學者）が國元へ來て原書を敎授して居りましたが、この秋江戸へ去つて了ひました爲め、原書の熱心家は今止めては殘念な事だと申し、特に笠原氏は人一倍の熱心家で御座いますから、原書讀を招聘したいものだと私方へ御頼みがありました所へ、丁度飯田氏が漫遊したい思召があるやうに承りましたから、何んなものかと御尋ねしましたら、それは誠に好都合、早速國元へ申送つてくれよとの御返答で御座います。で、直樣申遣はしました所、國元でも大よろこび致し、先般澁谷氏が行かれた時、笠原氏が態々面會になつて御世話を願ひ出でたことで御座います。何うか一日も早く北

國行きの御許を得たいと存じます。

洪庵「飯田が退塾いたしては手前甚差支へる譯だが、本人の所存もあることだらうから、此上は篤と本人の所存も聞いて、決定の返答をしよう。それにしても何ぜ笠原氏から賴み狀が參らぬのだらのう」

先生「それは内談がまだ確定いたしませんから、私から差止めて置いたので御座います。定めて程なく御賴みの書面も到來いたすことゝ存じます」

洪庵「それで御國元の御都合もよく判つた。いづれ本人へ然るべく指圖をいたさう」

この問答で洪庵も納得したのです。先生はこの次第を委細白翁に報告し、緒方へ一本賴狀を寄こすやうに申送られました。先生が斯ゝる機微な事柄を取扱つて、圓く纏められた頭腦の鋭敏さと辯舌の圓熟さは云ふ迄もありませんが、右の問答を委曲書面に書き現はされた手紙の上手さも亦敬服に堪へぬものであります。重複の嫌はあるが七月十八日付書簡の一部を左に抄錄いたします。

（前略）其故明早小生罷出申候は飯田北行に相運候次第は、昨年市川齋宮國許に參

り居、原書學教授致居候處、當秋東武罷越候。就ては昨年より原書執心仕候者も、只今打休候ては甚殘懷の次第、其上良策氏も近來篤志にて原書學致し候故、旁以原書讀一人招度旨兼て小生方え賴有候折節、飯田兄漫遊之御念も有之候由承及候故、幸之事と存じ、北行可被成哉相尋候處、其は甚都合好事に候得ば、早速御國元え御申越置可被下候旨御返答有之候故、直樣申越候處、國元にても大慶致し、其後澁谷兄北行に付良策態々御面會致し、飯田兄北行の御世話相願候事に御座候。良策御世話申方は澁谷兄より之御話し通に御座候。何分北行一日も早く御許容希度旨縷々申述候處、先生被申候は、飯田退塾致候ては手前甚指差へ候。乍レ去本人所存も有之事に候得ば不苦間、尙此上本人存じ更に篤と承り、決定之御返答可致、且右樣之次第に候得ば良策兄より何故賴狀不參候哉と不審被申候故、小生對候は、其は內談未だ確定不申候故、小生より止め置候事に御座候、定て無程御賴之書帖到來可仕被察候と申述候處、御國元御都合之次第篤と承知致候間、可然本人之指圖可致旨被申候、右之趣篤と御考辨、一筆御認、緒方えの賴狀御遣可被下候

洪庵と白翁との關係　こゝで一寸白翁と洪庵との關係を述べて置きませう。白翁の種痘將來の事は本書に述べてある通りですが、嘉永二年九月晦日福井を出發し十月五日京都に入つて師家日野鼎哉を訪れると、痘苗は既に京都まで到着してをり且つその痘苗を接種した日野の孫兒らの腕に見事に發痘してゐましたので大に喜び、鼎哉らとゝもに除痘館を京都に開き、こゝに痘田を開拓しました。このことを洪庵が聞いて十月晦日大阪から日野葛民、泉州堺の小林安石らと上京し、大阪への分苗を求めました。白翁は御用の痘苗を私に分與することに躊躇しましたが、萬一國元にて種切れにならんとも限らぬ、その用意に大阪に植苗しておいたら兩全の策であらうといふ鼎哉の計らひで、十一月七日一痘兒を携へて鼎哉、白翁同伴で大阪に下つて分苗を行ひました。これが大阪種痘法の最初であります。この大阪除痘所開館式の時、緒方や日野は白翁を上賓として上座につかしめ、白翁をして最初の種痘を行はしめてゐます。洪庵が書いた「大阪除痘館由來」といふ者があるがその終りに、洪庵は「冀くは後來の諸子、越前侯の恩徳と良策鼎哉の厚意とを忘るゝことなく云々」と書いてゐます。

かういふ次第で、洪庵と白翁とはすでに親しい間柄であるから、洪庵として見れば、飯田招聘(せうへい)について一本頼状を直接白翁から寄こしさうなものと、不審がるのも無理のないことであつたのです。

飯田事件の始末　飯田北行の件は順調(じゆんてう)に運び、洪庵の許可もあつたらしいのですが、こゝに思はぬ事件が起つて遂に成立にいたりませんでした。それは飯田柔平(じう)に弟があつて、これも緒方に入塾してゐたが、「元來舍弟病氣と申候は前月塾中無頼生に被誘引賣婦家にて傳染致し候疾に御座候」と左内先生から白翁に報ぜられてゐるやうに、甚だ香ばしからぬ病に罹り、「下疳(かん)相發、腐蝕(ふしよく)甚だしく疼痛等も難凌…咽部疼痛に相成…骨痛も相發。當節にては起臥(きが)歩行も甚だ大儀之樣子加之逐日衰弱相加り…食物も自由に致兼」(孟秋念五日付先生の手簡)塾中では攝生が六ヶしいから、洪庵先生から退塾して保養するやうにといはれ、柔平同道で歸國せねばならぬことになつたのであります。これには白翁も餘ほど失望したことであらうが、先生の次の書簡（九月十三日）にも

飯田氏一件は無二是非一次第、何分拜顏之上心緒盡度奉レ存候、貴答の如く好事多魔、
　是は盈虛消長之理にて不レ可二如何一者に御座候、併小拙于レ今甚殘懷に罷在候
とある如く人事意の如くならぬと達觀しながら殘念に堪へなかつた樣子が見えてゐます。

この飯田一件は飯田から先生に斡旋を願つたものであります。飯田は當時何歲であつたか判らぬが、適塾の塾頭である所から見れば先生よりは少くとも五、六歲の先輩であつたに相違ありません。また學力も相當勝れてゐたに相違ありません。それが自分の身の振り方について、僅か十八歲の年少者に依賴したところを以て見ても如何に先生が沈着老成、塾中に於て重きをなしたかを推知することが出來ませう、なほまた先生がこの世話をせらるるに至つたのは單に飯田の依賴があつたからやつて見たといふのではなくて、鄕國において蘭學が芽を吹き出してゐるといふものゝ、人物拂底の場合一人でも人物を拾つて鄕國に送り、新學の發達と國益の增進に資しようといふ高い見識と熱心とから出たことを着眼せねばなりません。同時に白翁が飯田を背負ひ込

んで研究の助けとしようとした義氣と篤學とはまた大に推賞すべき美事といはねばなりません。

蘭學の研究　先生と白翁との交渉のもう一つは蘭學研究に關してゞあります。元來白翁は文化六年の生れ、先生は天保五年の生れであつて、白翁は二十五歳の年長者、いはゞ親と子ほどの年齢の相違がある上に、白翁は先生の父長綱の友人であつて、先生は「笠原のおぢさん」と呼んだ筈であり、恐らく蘭學の手ほどきは白翁より受けたものでありませう。然るに先生が洪庵の門下に入塾し鋭意勉學の結果、蘭學に上達するやうになられたので、白翁が却つて先生から研究上の世話を受けることになつたのであります。白翁が不惑を過ぎた身を以て十七八歳の少年に謙り、道のために精進したその眞劍な態度もまた以て學界の美談といふべきであります。

先生が白翁の依頼に應じて周旋されたことの一つは扶氏經驗遺訓の蘭書謄寫についてゞあります。

扶氏といふのはドイツ、ベルリン大學教授フーフェランドのことで、經驗遺訓とい

ふのは同教授が多年治療に從事した經驗から結成した治療書及び醫戒であります。この原書が一八三八年（天保九年）ハーゲマンに依て蘭譯せられ、その蘭譯が天保十年か十一年ごろに我國に舶載せられ、それを洪庵が手に入れて直に譯し「扶氏經驗遺訓」として世に出したのであります。尤も洪庵の譯書が出版せられ大に世に行はれるに至つたのは安政以後のことであるが、當時蘭學者の間には洪庵の名と共にこの書に就て聞知し、これを讀んで見たいと渇望したに相違ありません。白翁は左内先生が緒方塾に在るを幸ひこの謄寫方を依賴したのは當然のことであります。

六月五日先生より白翁へあてた書面に

就ては被仰越候扶氏遺訓之義、早々相しらべ候處、今暫之處筆手塞り居候故、本月十日ごろより可ニ相始一由申居候、尤も貴旨之通、迚も一知半解之原書讀は不レ宜と被存候故、少し讀め候者に相賴み申、其中にても力は少少劣候とも綿密なる人可レ宜と存じ候故、綿密底之人に相賴み申候。無レ程爲ニ相寫一、逐々可レ呈ニ玉几下一、屈指御待可レ被レ下候

とあるやうに先生が塾生中から筆者を撰び、出來るに隨つてこれを白翁に送付せられた。九月十三日には校讀を終つた分百十二枚を送り屆けて

遺訓校讀一度致候へ共、定て謬誤間々可有之候間、若御不審有之候時はp.1.幾葉第幾行と御書し、前後之文一二行程御記し御遣可被成候。小拙早々原書と再校可致候

と報じて筆寫料の內譯を知らせて居られます。

一、紙（大美濃）　一狀に付（四十八枚）　四百文
一、寫　料　一枚に付　六分
一、表　紙　料　一冊に付　一匁四分
一、校　讀　料　六拾枚　四匁五分

校讀料は先生自ら校讀せらるるはずであつたが、不快のため、筆者に賴み別人二日ばかり賴んだ謝金だと斷つてあります。かくて扶氏遺訓の上卷だけは謄寫し終つたらしいが（この書は今笠原家に所藏されてゐる）白翁から前後先生宛てに送金した額が三兩二分に及んであるところを見ると今日の貨幣價値にして見て尠くとも三、四十

圓以上に當るのであつて當時學問の硏究に如何に多大の勞力と費用とを要したかを知るに足るでありませう。

其他の蘭書　右の外、白翁から新しい書物または有益な蘭書が見付かつたら、周旋して貰ひたいと先生へ賴んであつたと見えて、書面の中に次の書名が散見せられます。

ドドネウス。世界全圖。ビュルメンバック人身窮理（または貌氏人身窮理）。昆斯病理論。ウエランドキヲンスウヲールド（またはキンスト字引）。

右の中ドドネウスといふのは不明であるが、ビュルメンバック（又はブルメン）人身窮理は（貌氏はこれにあてた漢字）は、ドイツのゲッチンゲン大學の醫學敎授ブルーメンバッハの著はした生理學書の蘭譯であります。昆斯病理書といふのは、ドイツのコンスブルッフの著書で洪庵の著書「病學通論」の參考書の一であります。ウエランドキヲンスウヲールドといふのは、ウエーランド氏著の術語辭典であります。これらの書は、三兩又は五兩といふ高價なもので、到底一書生である左內先生には歯が立たなかつたが、出物があるごとに、白翁に報じて購入如何と周旋の勞を取られた

ものです。

先生の語學力　かくて、福井にゐて立派な門戸を張つてゐる四十男の白翁と、大阪に居る白面の一書生である先生とは互ひに扶け合ひ勵み合つて、蘭學の研究に精進したのです。

七月二日の書面に「承り候得ば、原書格別御上達之旨小生深く愧入候。何分飯田北行相勸、御互之有益致度所存罷在候間、此一件は精々心配可仕候」といつてをり、七月八日の書面に「小生近來原書進候由、是は澁谷（福井へ立寄つた緒方門人）潤色と奉存候。自分心には甚駑鈍嘆居候。漸先日より文法書終業致、是の頃昆斯相始候。獨見にて腹稿致し候上にて講釋相賴候、誠に不レ堪ニ眩暈一候。御一笑可被下候」といはれてゐる所を見ると、謙辭の中にも、先生が刻苦勉勵、遂に昆斯病理論に手をつけるまでに蘭學に上達せられたことを示してゐます。

今日英語やドイツ語を學ぶ者は、書籍や辭書や文法書等を得るに何等の苦勞もなく、教師を得ることも難事ではありません。それでも學び初めてから二年位でもう專

門書に取り掛ることは容易ではありません。中學五年で滿足にリーダさへ讀み得ない有樣です。これを以て見ても先生の明敏さ精力の絕倫さを推想することが出來ます。私は先生他日の大識見大飛躍の基礎はかくて適塾二年有餘の學生時代に培はれたものと信ずるのであります。

啓發錄

去ル稚心ヲ

稚心トハヲサナ心ト云事ニテ、俗ニイフワラベシキコト也。菓菜ノ類ノイマダ熟セザルヲモ稚トイフ。稚トハスベテ水クサキ處アリテ、物ノ熟シテ旨キ味ノナキヲ申也。何ニヨラズ稚トイフコトヲ離レヌ間ハ、物ノ成リ揚ル事ナキナリ。人ニ在テハ竹馬・紙鳶・打毬ノ遊ヒヲ好ミ、或ハ石ヲ投ケ蟲ヲ捕フヲ樂ミ、或ハ糖菓疏菜甘旨ノ食物ヲ貪リ、怠惰安逸ニ耽リ、父母ノ目ヲ竊ミ、藝業職務ヲ懈リ、或ハ父母ニヨリカヽル心ヲ起シ、或ハ父兄ノ嚴ヲ憚リテ、兎角母ノ膝下ニ近ツキ隱ルヽ事ヲ欲スル類ヒ、皆幼童ノ水クサキ心ヨリ起ルコトニシテ、幼童ノ間ハ強テ責ルニ足ラネドモ、十三四ニモ成リ學問ニ志シ候上ニテ、此心毛ホドニテモ殘リ有レ之時ハ、何事モ上達致サス、迚モ天下ノ大豪傑ト成ル事ハ叶ハヌ物ニテ候。源平ノコロ幷ニ元龜

天正ノ間マデハ、随分十二三歳ニテ母ニ訣レ父ニ暇乞シテ初陣ナド致シ、手柄功名ヲ顯シ候人物モ有レ之候。此等ハミナ稚心ナキ故ナリ。モシ稚心アラバ親ノ臂ノ下ヨリ一寸モ離レ候事ハ相成申間敷、マシテ手柄功名ノ立ツヘキヨシハコレナキ義ナリ。且又稚心ノ害アル譯ハ、稚心除カヌ時ハ士氣振ハヌモノニテ、イツマデモ腰拔士ニナリ居リ候モノニテ候。故ニ余稚心ヲ去ルヲ以テ士ノ道ニ入ル始ト存候ナリ。

振レ氣

氣トハ人ニ負ヌ心立アリテ、恥辱ノコトヲ無念ニ思フ處ヨリ起ル意氣張ノ事也。振トハ折角自分ト心ヲトドメテ振立振起シ、心ノナマリ油斷セヌ樣ニ致ス義ナリ。此氣ハ生アル者ニハミナアル者ニテ、禽獸ニサヘコレアリテ、禽獸ニテモ甚シク氣ノ立タル時ハ、人ヲ害シ人ヲ苦シムルコトアリ。マシテ人ニ於テヲヤ。人ノ中ニテモ士ハ一番此氣强ク有レ之故、世俗ニコレヲ士氣ト唱ヘ、イカホド年若ナ者ニテモ、兩刀ヲ帶シタル者ニ不禮ヲ不レ致ハ、此士氣ニ畏レ候事ニテ、其人ノ武藝ヤ力量ヤ位職ノミニ畏レ候ニテハコレナシ。然ル處太平久敷打續、士風柔弱佞媚ニ陷リ、武

門ニ生レナガラ武道ヲ忘却致シ、位ヲ望ミ女色ヲ好ミ、利ニ走リ勢ニ附ク事ノミニフケリ候處ヨリ、右ノ人ニ負ケヌ恥辱ノコトハ堪ヘヌト申ス雄々シキ丈夫ノ心、クタケナマリテ、腰ニコソ兩刀ヲ帶スレ、太物包ヲカヅキタル商人、擔ヲ荷ヒタル擔ヒロヒヨリモオトリテ、纔(ワツカ)ニ雷ノ聲ヲ聞キ犬ノ吠ユルヲ聞テモ、卻(キヤク)歩スル事トハ成ニケリ。惜々可レ嘆之至ニコソ、シカルニ今ノ世ニモ、猶未タ士ヲ貴ヒ町人百姓杯御士(サムラヒ)樣ト申唱ルハ、全ク士ノ士タル處ヲ貴ヒ候ニテハ無レ之、我君ノ御威光(ヰクワウ)ニ畏服致シ居候故、無レ據(ヨキトコロナク)貌(カタチ)ノミヲ敬ヒ候コトナリ。其證據(シヨウコ)ハムカシノ士ハ、平世ハ鋤鍬持士クジリ致シ居候得共、不斷ニ恥辱ヲ知リ人ノ下ニ屈セス心逞シキ者ユヘ、マサカ事有ルトキハ吾大御帝或ハ將軍家抔ヨリ、募リ召寄セラレ候ヘバ、忽チ鋤鍬打(スキクワウチ)擲テ物具ヲ帶シテ、千百人ノ長トナリ、虎ノ如ク狼ノ如キ軍兵バラヲ指揮(シキ)シテ、臂ノ指ヲ使フゴトク致シ、事成レバ芳名ヲ青史ニ垂レ、事敗ルレハ屍ヲ原野ニ暴シ、富貴利達死生患難ヲ以テ其心ヲカヘ申サヌ大勇猛大剛強(ゴウキヤウ)ノ處有レ之ユヱ、人々其心ニ感シ、其義勇ニ畏候ヘドモ、今ノ士ハ勇ハナシ義ハ薄シ、謀略ハ足ラズ。迚モ千

兵萬馬ノ中ニ切リ入リ、縱横無碍ニ駈廻ル事ハカナフマジ、況ンヤ帷幄ノ内ニ在リテ、運レ籌決レ勝之大勳ハ望ムヘキ所ニアラズ、サスレハ若シ腰ノ兩刀ヲ奪ヒ取候ヘバ、其心立其分別、盡ク町人百姓ノ上ニハ出申マジ。百姓ハ平世骨折ヲ致シ居、町人ハ常ニ職業渡世ニ心ヲ用ヒ居候ユヘ、今若シ天下ニ事アラハ、手柄功名ハ却ッテ町人百姓ヨリ出テ、福島左衛門大夫、片桐助作、井伊直政、本多忠勝等ガゴトキ者ハ、士ヨリ出申サザルベキカト思ハレ、誠ニ嘆カハシク存スル、箇樣ニ覺ノナキモノニ、高祿重位ヲ被レ下、平生安樂ニ被ニ成置一候ハ、偖々君恩ノホド申ス限リナキコト、辭ニハ盡シガタシ、其御高恩ヲ蒙リナガラ、不覺ノ士ノミニテ、マサカノトキニ我君ノ耻辱ヲサセマシ候テハ、返ス返ス恐入候次第ニテ、實ニ寐テモ目モ合ハス、喰テモ食ノ咽ニ通ルヘキ筈ニアラズ。コトサラ我先祖ハ國家ヘ奉レ對聊ノ功モ可レ有レ之候得ドモ、其後ノ代々ニ至リテハ、皆々手柄ナシニ恩祿ニ浴シ居候義ニ候ヘバ、吾々共聊ニテモ學問ノ筋心掛ケ、忠義ノ片端モ小耳ニ挾ミ候上ハ、何トゾ一生ノ中ニ粉骨碎身シテ、露滴ホドニテモ御恩ニ報イ度事ニテ候。此忠義ノ心ヲ撓マ

サズ引立、後還リ致サヌ樣ニ致候ハ、全ク右ノ士氣ヲ引立振起シ、人ノ下ニ安セヌト申ス事ヲ忘レヌコト肝要ニ候。乍レ去只此氣ノ振立而候已ニテ志立ヌ時ハ、折節氷ノ解ケ醉ノサムル如ク、後還リ致ス事有レ之者ニ候故ニ、氣一旦振立候ヘバ方(マサ)ニ志立候事甚大切ナリ。

立志

志トハ心ノユク所ニシテ、我コヽロノ向ヒ趣キ候處ヲイフ。士ニ生テ忠孝ノ心ナキ者ハナシ。忠孝ノ心有レ之候テ、我君ハ御大事ニテ我親ハ大切ナル者ト申ス事、聊ニテモ合點ユキ候ヘハ、必ス我身ヲ愛重シテ、何トゾ我コソ弓馬文學ノ道ニ達シ、古代ノ聖賢君子英雄豪傑ノ加ク相成リ、君ノ御爲ヲ働キ、天下國家ノ御利益ニモ相成候大業ヲ起シ、親ノ名マデモ揚テ、醉生夢死ノ者ニハナルマジト直ニ思付候者ニテ、此卽志ノ發スル所也。志ヲ立ルトキハ、此心ノ向フ所ヲ急度相定、一度右ノ如ク思詰候ヘハ、彌(イヨ〳〵)切ニ其向キヲ立テ、常々其心持ヲ失ナハヌ樣ニ持コタヘ候事ニテ候。凡志ト申ハ、書物ニテ大ニ發明致シ候カ、我ハ師友ノ講究ニ依リ候カ、或ハ自

分患難憂苦ニ迫リ候カ、或ハ憤發激勵（フンペツゲキレイ）致シ候カノ處ヨリ立チ定リ候者ニテ、平生安樂無事ニ致シ居リ、心ノタルミ居候時ニ立事ハナシ。志ナキ者ハ魂ナキ蟲ニ同ジ。何時迄立チ候テモ丈ケノノブル事ナシ。志一度相立候ヘハ、其以後ハ日夜逐々成長致シ行キ候者ニテ、萠芽ノ草ニ膏壤（コウジヤウ）ヲアタヘタルガゴトシ。古ヨリ俊傑ノ士ト申候人トテ、目四ツ口二ツ有レ之ニテハナシ。皆其志大ナルト逞シキトニヨリ、遂ニハ天下ニ大名ヲ揚候ナリ。世上ノ人多ク碌碌ニテハ相果候ハ他ニ非ズ、其志太ク逞シカラヌ故ナリ。志立タル者ハ恰カモ江戸立ヲ定メタル人ノ如シ。今朝一度御城下ヲ踏（フミ）出シ候ヘハ、今晩ハ今莊明夜ハ木ノ本ト申ス樣ニ、逐々先ヘ先ヘト進ミ行申候者也。譬ハ聖賢豪傑（セイケンゴウケツ）ノ地位ハ江戸ノ如シ。今日聖賢豪傑ニ成ラン者ヲト志シ候ハヾ、明日明後日ト、段々ニ其聖賢豪傑ニ似合サル處ヲ取去リ候ヘハ、如何程短才劣識ニテモ、遂ニハ聖賢豪傑ニ至ラヌト申ス理ハコレナシ、丁度足弱ナ者デモ、一度江戸行キ極メ候上ハ、竟ニハ江戸マデ到着スルト同シ事ナリ。偖右樣志ヲ立候ニハ物ノ筋多クナルコトヲ嫌ヒ候。我心ハ一道ニ取極メ置キ不レ申候ハデハ、戶ジマリナキ

家ノ番スルゴトク、盗ヤ犬ガ方々ヨリ忍ヒ入リ、迚モ我一人ニテハ番ハ出來ヌナリ。マダ家ノ番人ハ隨分傭人モ出來候得共、心ノ番人ハ傭人出來不レ申候。サスレバ自分ノ心ヲ一筋ニ致シ、守リヨクスヘキ事ニコソ。兎角少年ノ中ハ、人々ノナス事致ス事ニ目ガチリ、心ガ迷ヒ候テ、人ガ詩ヲ作レバ詩、文ヲカケバ文、武藝トテモ、朋友ニ槍ヲ精出ス者アレバ、我今日マデ習ヒ居タル太刀業ヲ止テ槍ト申ス樣ニ成リ度キモノニテ、コレハ正覺取ラヌ第一ノ病根ナリ。故ニ先ツ我知識聊ニテモ開候ハバ、篤ト我心ニ計リ、吾所レ向所レ爲ヲサダメ、其上ニテ師ニツキ友ニ謀リ、吾及ハズ足ラハヌ處ヲ補ヒ、其極メ置タル處ニ心ヲ定メテ、必多端ニ流レテ多岐亡羊ノ失ナカランコト、願ハシク候。凡テ心ノ迷フハ、心ノ幾筋ニモ分レ候處ヨリ起リ候事ニテ、心ノ紛亂致シ候ハ吾志未ダ一定セヌ故ナリ。志定マラズ心收マラズシテハ、聖賢豪傑ニハ成ラレヌモノニテ候。何分志ヲ立ル近道ハ、經書又ハ歷史ノ中ニテ、吾心ニ大ニ感徹致シ候處ヲ書拔キ、壁ニ貼シ置キ候カ、又ハ扇杯ニ認メ置キ、日夜朝暮夫ヲ認メ味メ、吾身ヲ省察シテ其不レ及ヲ勉メ、其進ヲ樂ミ居リ候事肝要

ニシテ、志既ニ立候時ハ、學ヲ勉ムル事ナケレバ、志彌フトク逞クナラズシテ、動モスレバ聰明ハ前時ヨリ減シ、道德ハ初ノ心ニ慚ル樣ニ成リ行クモノニテ候。

勉學

學トハナラフト申ス事ニテ、總テヨキ人スグレタル人ノ善キ行ヒ善キ事業ヲ迹付シテ習ヒ參ルヲイフ。故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テハ直チニ其人ノ忠義孝行ノ所爲ヲ慕ヒ倣ヒ、吾モ急度其人ノ忠義孝行ニ負ケズ劣ラズ勉メ行キ候事、學ノ第一義ナリ。然ルヲ後世ニ至リ字義ヲ誤リ、詩文ヤ讀書ヲ學ト心得候ハ笑カシキ事ドモナリ。詩文ヤ讀書ハ右學問ノ具ト申スモノニテ、刀ノ柄鞘ヤ二階ノ階梯ノ如キモノナリ。詩文讀書ヲ學問ト心得候ハ、恰モ柄鞘ヲ刀ト心得、階梯ヲ二階ト存候ト同シ。淺鹵粗糙ノ至リニ候。學ト申スハ忠孝ノ筋ト文武ノ業トヨリ外ニハ無レ之、君ニ忠ヲ竭シ親ニ孝ヲ盡スノ眞心ヲ以テ、文武ノ事ヲ骨折勉强致シ、御治世ノ時ニハ、御側ニ被レ召使レ候ヘバ君ノ御過ヲ補ヒ匡シ、御德ヲ彌增ニ盛ンニナシ奉リ、御役人ト成リ候時ハ、其役所役所ノ事首尾能取修メ、依怙贔負不レ致、賄賂請謁ヲ不レ受、公平廉直ニ

シテ、其一局何レモ其威ニ畏レ、其徳ニ懷キ候程ノ仕ワザヲナシ可レ申義ヲ、平世ニ心掛ケ居リ、不幸ニシテ亂世ニ逢ヒ候ハヽ、各々我居場所ノ任ヲ果シテ寇賊ヲ討平ケ、禍亂ヲ克定メ可レ申、或ハ太刀槍ノ功名組打ノ手柄致シ、或ハ陣屋ノ中ニアリテ、謀略ヲ賛畫シテ敵ヲ鏖ニシ、或ハ兵糧小荷駄ノ奉行トナリテ、萬兵ノ飢渇不レ致兵力ノ不レ減様ニ心配致シ候事杯、兼々修練可レ致義ニ候。此等ノ事ヲ致シ候ニハ、胸ニ古今ヲ包ミ、腹ニ形勢機略ヲ諳シ藏メ居ラズシテハ叶ハヌ事共多ク候ヘバ、學問ヲ專務トシテ勉メ行フヘキハ、讀書シテ吾知識ヲ明カニ致シ、吾心膽ヲ練リ候事肝要ニ候。然ル處、年少ノ間ハ、兎角打續キ業ニ就キ居リ候事ヲ厭ヒ、忽讀ミ忽廢シ忽習レ文忽講レ武トイフ様ニ、暫ク宛ニテ倦怠致スモノナリ。此甚タ不レ宜、勉ト申スハ力ヲ推究メ、打續キ推遂候處ノ氣味有レ之字ニテ、何分久ヲ積ミ思ヲ詰不レ申候ハデハ　萬事功ハ見エ不レ申候。マシテ學問ハ物ノ理ヲ説キ筋ヲ明カニスル義ニ候ヘハ、右ノ如ク輕忽粗龐ノ致シ方ニテ眞ノ道義ハ見エ不レ申、中々有用實着ノ學問ニハナリ申サヌナリ。且又世間ニハ愚俗多ク候故、學問ヲ致シ候ト兎角驕謾

ノ心起リ、浮調子ニ成テ、或ハ功名富貴ニ念動キ、或ハ才氣聰明ニ伐リ度病折々出來候モノニテ候。コレヲ自ラ愼ミ可ㇾ申ハ勿論ニ候ヘトモ、玆ニハ良友ノ規箴至テ肝要ニ候間、何分交友ヲ擇ミ、吾仁ヲ輔ケ吾德ヲ足シ候工夫可ㇾ有ㇾ之候。

擇㆓交友㆒

交友ハ吾連朋友ノ事ニテ、擇トハスグリ出ス意ナリ。吾同門同里ノ人同年輩ノ人吾ト交リクレ候ヘバ、何レモ大切ニスベシ。乍ㇾ去其中ニ損友益友候ヘバ、則擇ト申ス事肝要ナリ。損友ハ吾ニ得タル道ヲ以テ其人ノ不正ノ事ヲ矯直シ遣ス可ク、益友ハ吾ヨリ親ミヲ求メ事ヲ詢リ常ニ兄弟ノ如クスヘシ。世ノ中ニ益友ホド難ㇾ有難ㇾ得者ハナク候間、一人ニテモ有ㇾ之バ何分大切ニスベシ。總テ友ニ交ルニハ、飮食歡娛ノ上ニテ附合、遊山釣魚ニテ狎合候ハ不ㇾ宜、學問ノ講究、武事ノ練習、士タル志ノ硏究心合ノ吟味ヨリ交ヲ納レ可ㇾ申事ニ候、飮食遊山ニテ狎合候朋友ハ、其平生ハ腕ヲ扼リ肩ヲ拍チ、互ニ知己知己ト稱シ居候ヘ共、無事ノ時吾德ヲ補フニ足ラス、有事ノ時吾危難ヲ救ヒクレ候者ニテハナシ。コレハ成リ丈屢出會不ㇾ致、吾身

ヲ嚴重ニ致シ附合候テ、必ズ狎昵致シ、吾道ヲ褻サス樣ニシテ、何トカ工夫ヲ凝シテ、其者ヲ正道ニ導キ武道學問ノ筋ニ勸メ込候事友道ナリ。偖益友ト申スハ、兎角氣遣ナ物ニテ、折々不二面白一事有レ之候。夫ヲ篤ト了簡致スベシ。益友ノ吾身ニ補ヒアルハ、全ク其氣遣ナル所ニテ候。士有二爭友一雖二無道一不レ失二令名一トハ申スコト經ニ有レ之候。爭友トハ卽益友也。吾過ヲ告知ラセ我ヲ規彈致シクレ候テコソ、吾氣ノ附ヌ處ノ落モ欠モ補ヒタシ候事相叶候ナリ。若右ノ益友ノ異見ミ嫌ヒ候時ハ、天子諸侯ニシテ諫臣ヲ御疎ミナサレ候同樣ニテ、遂ニハ刑戮ニモ罹リ不測ノ禍ヒヲモ招ク事アルベキナリ。偖テ益友ノ見立方ハ、其人剛正毅直ナルカ、溫良篤實ナルカ、豪壯英果ナルカ、俊邁明亮ナルカ、濶達大度ナルカノ五ツニ出デズ。此等ハ何レモ氣遣多キ人ニテ、世間ノ俗人ドモハ甚ダシク厭棄致シ居候者ナリ。彼損友ハ佞柔善媚、阿諛逢迎ヲ旨トシテ、浮躁辯慧、輕忽粗慢ノ性質アル者ナリ。此ハ何レモ心安ク成リ易キ人ニテ、世間ノ女子小人トモ其才智ヤ人品ヲ譽居候者ナレドモ、聖賢豪傑タラント思フ者ハ、其所レ擇自ラ在ル所アルヘシ。

以上五目少年學ニ入ルノ門戸トコヽロエ書聯申候者也。

右余嚴父ノ敎ヲ受ケ、常ニ書史ニ渉リ候處、性質疎直ニシテ柔慢ナル故、遂ニ進學ノ期ナキ樣ニ存シ、毎夜臥衾中ニテ涕泗ニムセビ、何トゾシテ吾身ヲ立テ父母ノ名ヲ顯シ、行々君ノ御用ニモ相立、祖先ノ遺烈ヲ世ニ耀シ度ト存居候折柄、逐々吾身ニ解得致シ候事トモ有レ之候樣覺申スニ付、聊書記シ後日ノ遺忘ニ備フ。敢テ人ニ示ス處ニアラス。嗚呼如何セン、吾身刀圭ノ家ニ生レ、賤技ニ局々トシテ吾初年ノ志ヲ遂ル事ヲ不レ得ヲ。然レトモ所業ハ此ニ在リテモ所レ志ハ彼ニ在リ候ヘハ、後世吾心ヲ知リ吾志ヲ憐ミ、吾道ヲ信スル者アラン歟。

嘉永戊申季夏　　橋本左内誌

安政四年十一月廿八日先生ヨリ在藩村田氏壽ニ與ヘラレタル書面

(前略)

偖又去十三日夕、亞墨利加使節申立并應對書和解二通御渡ニ相成、直ニ拜見被二仰付一、依レ例事理分明、其中英夷トハ段々內談モ有レ之鹽梅、且ハ虛喝モ可レ有二御坐一候へ共、何分一々我弊ニ中候處可レ恐々々、此義ハ實ニ神州ノ御大事、今度彼二ケ條御許相成候ハ卽御國體變遷之姿ニ候。乍レ去只今ト相成候テ、鎖國獨立不レ可レ致ハ固ヨリ、識者ニ於テハ瞭然ニ可レ有レ之候ヘハ、固ヨリ拒絕不二相成一ハ不レ俟レ論候ヘ共、唯如何セン、廟堂上之小兒輩、迚モ其邊之咄出來候者一人モナシ、就テハ責テ我君(松平越前守慶永)ナリトモト奉レ存候故、參政(福井藩側用人中根靭負師質)ト共ニ種々苦言直論每々高聽ニ奉レ入、遂ニ御工夫モ被レ爲レ在候處流石ニ粗御考モ相立候、乍レ去兎角柔怠之御舊弊、未タ霍然御脫却被レ成兼、只管參政幷小拙邊申上候處ニノミ御手寄被レ遊、御嘉納ト申迄ニテ、御自身樣ヨリ御發出薄姿御坐候故。近來ハ一切此方ヨリ申上ハ相止頻リニ御難詰ノミ申上居候。併此迄ヨリハ一段御工

夫ハ不レ斷被レ遊候御鹽梅、御策之程ハ實ニ奉ニ感入一候。尤モ御上書モ十ガ九ハ御自身様ニテ被レ遊候コトニテ、當日迄ニハ凡四五度モ御草稿相替リ、色々御推稿御坐候故、御當日ニ到リ、小拙聊御添削申上、今般之運ニ相成候。此ハ執政ヨリ御内見可レ被レ成候。定テ御地執政方モ御上書ニハ一寸御退避可レ被レ成奉レ存候。君上ニハ其邊之御勇斷ハ充分被レ爲レ在候ヘ共、天下之奸雄豪傑ヲモ籠絡被レ遊候御手段ニ御乏シク、唯々御誠心一片ニ歸シ、仁柔之風勝、撥亂之御器量ニ不ニ相成一歟ト存シ、其處ヲ不足ニ奉レ存候。扨海外之御處置ニ付テハ、君上ニモ種々御考被レ爲レ在候得共、近來ハ先小拙ノ所見ト御同様ニ被レ爲レ成候故、先小拙ノ存申上候。御賢判之上御可否可レ被ニ仰下一候。當今之勢、日本之事務國內之御處置ト外藩御待遇トノ二件ニ可レ歸奉レ存候。外藩御待遇ニ付テハ海外之事情第一御推察有レ之度候。方今之勢ハ行々ハ五大洲一圖ニ同盟國ニ相成リ、盟主相立候テ、四方之干戈相休可レ申相運候半ト奉レ存候。右盟主ハ先英魯之内ニ可レ有レ之候。英ハ慓悍貪欲魯ハ沈鷙嚴正何レ後ニハ魯ヘ人望可レ歸奉レ存候。偖日本ハ迚モ獨立難ニ相叶一候。獨立ニ致候ニハ山

丹満洲之邊朝鮮國ヲ併セ、且亞墨利加洲或ハ印度地内ニ領ヲ不レ持シテハ迚モ望ノ如クナラス候。此ハ當今ハ甚六ケ敷候。其譯ハ印度ハ西洋ニ被レ領、山丹邊ハ魯國ニテ手ヲ附試居候。其上今ハ力不レ足、迚モ西洋諸國ノ兵ニ敵對シテ比年連戰ハ無ニ覺束一候間、却テ今ノ内ニ同盟國ニ相成可レ然候。然處亞國其外諸國ハ交致候モ不レ苦候へ共、英魯ハ兩雄不ニ並立一國故、甚以扱兼申候。其意ハ既ニ「ハルレス」口上ニモ歴然、其上近來爭闘之迹ニテ明白ニ御坐候。依レ之後日英ヨリ魯ヲ伐チ先手ヲ賴候歟、又ハ蝦夷箱館借呉候旨可ニ願出一候。其時斷然英ヲ斷候歟、又ハ從候歟、定策可レ有レ之事。小拙ハ是非魯ニ從ヒ度奉レ存候。其譯ハ魯ハ信アリ隣境ナリ、且魯ト我トハ脣歯之國、我魯ニ從候ハヽ、魯我ヲ德トスベク候。サスレバ英怒リ可レ伐レ我、此我願ナリ、我孤立シテ西洋同盟ノ諸國ニ敵對ハ難レ致、魯之後援有レハ假令敗ルヽモ皆滅ニ不至ハ了然ニ候。然レバ此一戰我弱ヲ强ニ轉シ危ヲ安ニ變候大機關ニ御坐候テ、此ヨリ我日本モ眞ノ强國ニ可ニ相成一候。其上其戰爭迄ニハ是非魯國幷亞國ヨリ人ヲ倩ヒテ、我國之大改革始水軍陸戰共精勵可レ爲レ致事ト奉レ存候。偖右樣魯之親

昵ヲ得候ニハ所謂難報之恩無之シテハ不ニ相濟一候。魯國ヘ我ヨリ使節ヲ以テ和親ヲ乞候積、其段ニハ種々心算有レ之候得共筆ニテハ難レ述候。扨魯ヘ國ヲ托シ候迄ニ、外ヨリ擾亂被レ致候テハ不ニ相成一候故、其迄ハ何分亞墨利加ヲ頼付、英夷之跋扈强梁等ハ成丈拒貫ヒ候事、此亦色々工夫モ御坐候ヘ共、何モ應答言辭之間ニナクシテハ口ニモ難レ述奉レ存候事。依レ之交易ミニストル指置之二ケ條相許、其中交易ハ矢張官府交易ニ致度候間、勝手交易ハ相斷申度候事。阿片幷借地之事ハ斷リ、港ハ堺神奈川箱館長崎ノ四ケ處位ニ極置申度事。何分亞ヲ一ケ之東藩ト見、西洋ヲ我所屬ト思ヒ、魯ヲ兄弟脣歯ト爲シ、近國ヲ掠畧スル事緊要第一ト奉レ存候。偖右樣大變革相始メ候ニ就テハ内地之御處置此迄之舊套ニテハ不ニ相濟一第一建儲、第二我公、水老公、薩公（薩摩守島津齊彬）位ヲ國内事務宰相ノ專權ニシ、肥前公（松平肥前守鍋島齊正）ヲ外國事務宰相ノ專權ニシ、夫ニ川路（幕府勘定奉行川路左衛門尉聖謨）永井（幕府大目付兼外國奉行永井玄蕃頭尚志）岩瀨（幕府目付兼外國奉行岩瀨肥後守忠震）位ヲ指添、其外天下有名達識之士ヲ御儒者ト申名目ニテ、陪臣處士ニ不レ拘

選擧致シ、此モ右專權之宰相ニ派別ニ致シ附置尾張（德川大納言慶恕）因州（松平相模守池田慶德）ヲ京都ノ守護ニ、其指添ニ彥根（井伊掃部頭直弼）戶田（戶田采女正氏彬）位、蝦夷ヘハ伊達遠州（伊達遠江守宗城）土州（松平土佐守山內豐信）候位相遣シ、其外小名有志之向ヲ擧用候ハバ、今之勢ニテモ隨分一芝居出來申候半歟ト奉レ存候。其上魯西亞亞墨利加ヨリ諸藝術之師役五十人斗借受、諸國ニ學術稽古所相起、物產之道ヲ手廣ニ始メ、內地之乞兒雲介之類ニ頭ヲ立テ、相應之賄遣シ、蝦夷ヘ遣シ、山河之營爲レ致往來ハ重ニ海路ヨリ致シ候ハヽ、蝦夷モ忽開墾可二相成一、航海術モ直ニ可レ熟奉レ存候。因テ一句ヲ吟申候「人間自有二適用士一、天下何無二可レ爲時一」嗚呼此等之事夢ニモ難レ見奉レ存候。其中薩之事ハ御不同意ニモ可レ有レ之候ヘ共、此ハ小拙大ニ所見有レ之事ニ御坐候。畢竟日本國中ヲ一家ト見候上ハ小嫌猜疑ニハ不レ可レ拘ハ勿論ニ御坐候。昨日モ川路之咄聞候處、此モ右迄ノ見ハ不レ承候ヘ共、何分日本ニ於テ遠大之處置無レ之シテハ不二相濟一、就テハ魯ト和親ヲ結ヒ、且建儲ヲ致シ、根本ヲ固メ候腹ハ有レ之鹽梅ニ御坐候。乍レ去全ク風波ヲ恐居候由、其

內實ニ難澁ナル咄共有レ之、不レ斗感慨落涙仕候。何分此後何等之邊へ落付可レ申哉。
頓ト不レ被レ斗、實ニ志士可ニ憤惋一之秋ニ御坐候。因州土州二侯ニハ不ニ容易一御感慨、
土州杯ハ御國政一變之思召候由、此間中我君上ト頻ニ御高論御坐候。小拙モ乍レ蔭周
旋仕、折角我君ヲ正鵠ニ仕掛申候。此聊賤臣ノ微忠ニ候。此ニテ何卒御英果御憤悱
之御覺相立、以後如何樣之大事落來候共、御蹈堪へ出來候樣致度心得ニ御坐候。

（後略）

橋本左内先生略年譜

年號	時事	先生年譜	年齢
皇紀二五一三 嘉永六年 癸丑	六月米國ペルリ提督軍艦四隻を率ゐて浦賀に入る 六月家慶將軍薨ず 七月諸大名に對外意見を徵す 四月露國提督プーチャチン長崎に來る 八月品川の臺場を築く 十一月家定將軍宣下	十二月種痘に出精したる廉を以て藩主より慰勞の辭を賜はる	二十歳
同 二五一四 嘉永七年十一月廿七日改 安政元年甲寅	正月ペルリ再び浦賀に來る 三月ペルリと和親條約を結ぶ 八月英國と十二月露國と和親條約を結ぶ	二月江戸に出て坪井信良ついで杉田成卿に就て蘭學を學ぶ 漢學を鹽谷宕陰に學ぶ 七月福井大火。先生の居宅燒く	廿一歳
同 二五一五 同 二年 乙卯	正月江川太郎左衛門歿す 二月講武所を築地に建つ 三月福井藩明道館を建つ 十月堀田正睦老中となる 六月和蘭汽船を贈進す勝安房等長崎にゆきて運用を習ふ 八月松平伊賀守老中を罷む 十月江戸大地震藤田東湖死す	六月春嶽公より學業上達を褒せらる 七月命に依て歸藩 十月醫員を免せられ御書院番に列せらる 十一月再び江戸に出で常盤橋藩邸内鈴木主税の長屋に入る 十二月七日水戸藩士原田八兵衛の曹舍に於て始て西郷南洲と相逢ふ	廿二歳

年	事項	事蹟	年齢
二五一六 同 三年 丙辰	二月蕃書調所を九段坂に設く 二月鈴木主税江戸藩邸に歿す 八月米國總領事ハリス下田に來る	春岳公在藩、六月歸國 七月明道館出勤 九月明道館幹事となり御側役支配を兼ぬ	廿三歳
二五一七 同 四年 丁巳	六月阿部伊勢守卒す 十月ハリス江戸に出て將軍に謁す 十二月米國と通商條約締結を議す 同月日米條約の可否を諸侯に諮る	正月明道館學監同様心得べき旨命ぜらる 四月洋書習學所を館内に設く 八月三度目の江戸上府、これより外交問題及建儲問題の爲に奔走	廿四歳
二五一八 同 五年 戊午	正月條約の勅許を乞ふ爲め堀田備中守上京 四月井伊直弼大老となる 六月米國と通商條約締結、水戸齊昭、春岳公、押掛登城し大老と激論、紀州慶福將軍の儲貳となる 七月家定薨す、春岳公等隱居謹愼を命ぜらる 九月間部詮勝上京志士を捕ふ	正月京都に入り條約及建儲問題に周旋 四月江戸に還る 十月廿二日幕吏曹舍に於いて家宅捜索をなす 同廿三日町奉行の廳に召され瀧勘藏に預けらる	廿五歳
二五一九 同 六年 己未	八月安島帶刀鵜飼幸吉等を刑す、水戸齊昭に永蟄居一橋慶喜に隱居を命す 十月十七日吉田松陰等を刑す	正月八日、二月十二日、三月四日、七月三日町奉行所にて糺問をうく 十月二日評定所にて糺問の後獄に下さる 十月七日小塚原に刑死	廿六歳

橋本左内　實價八十五錢

昭和八年十月廿五日印刷
昭和八年十一月三十日增補改訂發行

著者　滋賀貞

發行者　前田信
東京市小石川區高田老松町四三

印刷者　小谷實
東京市小石川區茗荷谷町九六

印刷所　武藏野書院印刷部

發行所　東京小石川目白臺
振替東京六七一四六
武藏野書院